史跡 城山横穴群

福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査

福智町文化財調査報告書

第５集

序

本書は、史跡城山横穴群指定後に行ってきた範囲・内容確認調査の報告書です。平成 26 年の史跡指定以来、「城山横穴群」の保存整備を進め、活用に役立つように調査を行ってきました。

「城山横穴群」は先人たちの生きてきた証です。全国有数の規模と密集度を誇り、千年以上の時を越えて今に残るこの横穴墓は、古代と現代をつなげるタイムカプセルとして、郷土の歴史の扉を開くものです。

調査を進めていく中で得られた新たな発見や出土品は、先人たちが残したかけがえのない財産であり、それぞれが語りかけるメッセージがあります。その貴重な史跡を確実に保存し、調査研究を進め、活用していくことは、町の誇りを醸成することにもつながると考えています。

かつてこの城山の地にあった祈りのカタチ、郷土の歴史と人々のおもい。それらを受け止め、次世代に伝え、後世へとつなぐことが、今を生きる私たちの責務ではないでしょうか。

今回の報告書がその一助となれば幸いです。

福智町教育委員会

例　言

1. 本書は、福岡県田川郡福智町金田所在の城山横穴群における、保存目的のための範囲・内容確認調査の報告書である。福智町文化財調査報告書の第 5 集にあたる。
2. 発掘調査及び報告書作成は福智町教育委員会が平成 27 年度から令和 2 年度にかけて国庫補助事業として実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、井上勇也・太田信行・城戸冨士子・小池史哲・平嶋寿敏・吉岡淳子が作成した。
4. 掲載した遺構写真及び遺物写真は井上、小池、九州文化財計測支援集団が撮影した。遺物実測図及び図面の浄書は城戸・木村恵・小池・舟橋京子・吉岡・米元史織・九州文化財計測支援集団が作成した。
5. 出土遺物の整理・復元、実測・製図作業は福智町教育委員会が主体となり実施した。
6. 本書に使用した方位は全て座標北である。
7. 本書の執筆は井上、Ⅲ 4. 丘陵斜面の調査（7）表土層出土の中世遺物を小池、6. 城山横穴群 Y73 号墓出土人骨についてを蓮田賀子・足達悠紀・小髙蒼大・舟橋・米元がそれぞれ行った。編集については小池、長谷川清之の協力を得て井上が行った。

天井部の形態については、佐田茂 1975「九州横穴の形式と時期」『考古学雑誌』61 巻第 1 号をもとに以下の三形態に分類している。天井部が半球形を呈するものをドーム形、天井部が家形もしくは軒先線の表現があるものを家形。奥壁、前壁側がほぼ垂直に立ち上がり、断面形がかまぼこ形に近い形態をアーチ形としている。

遺構の時期比定には出土遺物、主に須恵器を使用した。年代観は九州編年（舟山良一編 2008『牛頸窯跡群 - 総括報告書Ⅰ -』）による。

目　次

Ⅰ　調査にいたる経緯と経過 …… 1
1. 調査にいたる経緯と経過 …… 1
(1) 調査の経緯 …… 1
(2) 史跡指定までの経過 …… 1
(3) 史跡指定後の経過 …… 3
2. 調査組織 …… 3
Ⅱ　位置と環境 …… 5
1. 福智町の概要 …… 5
2. 自然環境 …… 5
3. 歴史的環境 …… 6
Ⅲ　調査の内容 …… 14
1. 遺跡の概要 …… 14
2. 調査の方法と概要 …… 14
3. 旧宅地の調査 …… 16
(1) 宅地トレンチ …… 16
4. 丘陵斜面の調査 …… 20
(1) 基本土層 …… 20
(2) 丘陵斜面トレンチ …… 20
(3) 横穴墓 …… 26
(4) 表土層出土の古墳時代遺物 …… 31
(5) 城山横穴群採集の古墳時代遺物 …… 43
(6) 表土層出土の弥生時代遺物 …… 44
(7) 表土層出土の中世遺物 …… 45
5.Y133 横穴墓 …… 57
6. 城山横穴群 Y73 号墓出土人骨について …… 58
Ⅳ　おわりに …… 66
(1) 旧宅地の調査 …… 66
(2) 丘陵斜面の調査 …… 66
(3) 出土遺物 …… 66
(4) まとめ …… 67

挿図目次

第 1 図　福智町の位置
第 2 図　城山横穴群周辺遺跡分布図 …… 9
第 3 図　城山横穴群周辺地形図 …… 10
第 4 図　遺構配置図（1/200）…… 11
第 5 図　検出遺構配置 …… 12
第 6 図　丘陵斜面・宅地トレンチ配置図（1/750）…… 13
第 7 図　宅地トレンチ 1 実測図（1/60）…… 16
第 8 図　宅地トレンチ 2 実測図（1/60）…… 17
第 9 図　宅地トレンチ 3 実測図（1/60）…… 17
第 10 図　宅地トレンチ 4 土層図（1/60）…… 18
第 11 図　宅地トレンチ 5 実測図（1/60）…… 18
第 12 図　基本土層図（1/60）…… 20
第 13 図　丘陵斜面トレンチ 1 実測図（1/60）…… 20

第14図　丘陵斜面トレンチ２実測図（1/60）…… 21
第15図　丘陵斜面トレンチ３実測図（1/60）…… 22
第16図　丘陵斜面トレンチ４実測図（1/60）…… 23
第17図　調査区周辺の横穴墓分布状況（1/200）前回報告書時点 …… 24
第18図　調査区周辺の横穴墓分布状況（1/200）調査後　赤は確定・黒は未確認 …… 25
第19図　Y73 平面図及び人骨出土状況図（1/20）…… 26
第20図　Y73 出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 28
第21図　調査区周辺の横穴墓平面図（1/60）…… 30
第22図　その他の横穴墓出土遺物実測図 …… 31
第23図　表土層出土の古墳時代遺物実測図１（馬具）（1/3）…… 32
第24図　表土層出土の古墳時代遺物実測図２（須恵器 1）（1/3）…… 36
第25図　表土層出土の古墳時代遺物実測図３（須恵器 2）（1/3）…… 37
第26図　表土層出土の古墳時代遺物実測図４（須恵器 3）（1/3）…… 40
第27図　表土層出土の古墳時代遺物実測図５（須恵器４・土師器）（1/6・1/3）…… 41
第28図　表土層出土の古墳時代遺物実測図６（埴輪）（1/3）…… 42
第29図　城山横穴群採集の古墳時代遺物実測図（1/6）…… 43
第30図　表土層出土の弥生土器実測図（1/3）…… 44
第31図　表土層出土の中世遺物１（陶磁器実測図 1）（1/3）…… 46
第32図　表土層出土の中世遺物２（陶磁器実測図 2）（1/3）…… 47
第33図　表土層出土の中世遺物３（瓦器・土師器等実測図 1）（1/3）…… 49
第34図　表土層出土の中世遺物４（瓦器・土師器等実測図 2）（1/3）…… 52
第35図　表土層出土の中世遺物５（瓦器・土師器等実測図 3）（1/3）…… 53
第36図　表土層出土の中世遺物６（石器・石製品実測図）（1/3）…… 55
第37図　Y133 庇石　赤色顔料の状況 …… 56
第38図　Y133 実測図　前回報告書より転載加筆（1/20）…… 57
第39図　Y73 号墓人骨出土状況図（1/20）…… 59
第40図　眼窩示数と上顔示数（V）の関係（男性）…… 62
第41図　鼻示数と上顔示数（V）の関係（男性）…… 62

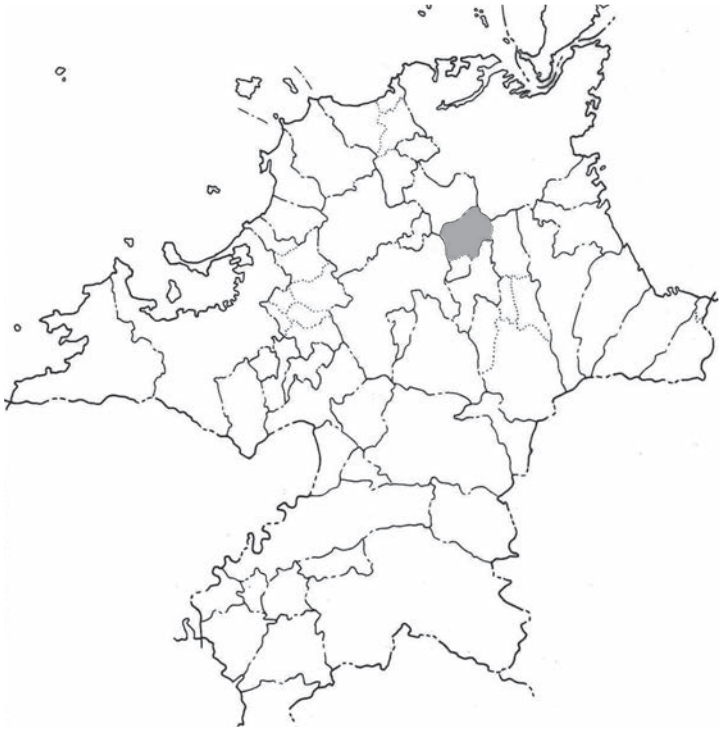
表 目 次

第 1 表　頭蓋計測値（男性）…… 65
第 2 表　確認遺構一覧表 …… 68

図版目次

図 版 1　1. 調査後の城山横穴群（南西より）
　　2. 整備中の城山横穴群（西より）
図 版 2　1.Y73 人骨出土状況
　　2. 宅地トレンチ１（西から）
　　3. 宅地トレンチ１土層状況１（南から）
図 版 3　1. 宅地トレンチ１土層状況２（南から）
　　2. 宅地トレンチ２（東から）
　　3. 宅地トレンチ２土層状況（南から）
図 版 4　1. 宅地トレンチ３（東から）
　　2. 宅地トレンチ３土層状況（南から）
　　3. 宅地トレンチ４（西から）

図 版 5　1. 宅地トレンチ 4 土層状況 2（南から）
2. 宅地トレンチ 5（東から）
3. 宅地トレンチ 5 土層状況 1（北から）
図 版 6　1. 宅地トレンチ 5 土層状況（南から）
2.（南から）・2. 丘陵斜面トレンチ 1 サブトレンチ 1（北から）
3. 丘陵斜面トレンチ 1 サブトレンチ 1 土層状況（西から）
図 版 7　1. 丘陵斜面トレンチ 1 サブトレンチ 2（北から）
2. 丘陵斜面トレンチ 1 サブトレンチ 2 土層状況（西から）
3. 丘陵斜面トレンチ 2 サブトレンチ 1 土層状況（西から）
図 版 8　1. 丘陵斜面トレンチ 2 サブトレンチ 2（西から）
2. 丘陵斜面トレンチ 2 サブトレンチ 2 土層状況（西から）
3. 丘陵斜面トレンチ 3（西から）
図 版 9　1. 丘陵斜面トレンチ 3 土層状況 1（北から）
2. 丘陵斜面トレンチ 3 土層状況 2（北から）
3. 丘陵斜面トレンチ 4 サブトレンチ 1（南から）
図版 10　1. 丘陵斜面トレンチ 4 サブトレンチ 1 土層状況（南から）
2. 丘陵斜面トレンチ 4 サブトレンチ 2 土層状況 1（西から）
3. 丘陵斜面トレンチ 4 サブトレンチ 2 土層状況 2（西から）
図版 11　1.Y133　前回調査時（北から）
2.Y133 庇石　赤色顔料の付着状況（北から）
3.Y73 人骨出土状況 3D カット
図版 12　城山横穴群 Y73 号墓出土人骨　頭蓋骨
図版 13　城山横穴群 Y73 号墓出土人骨　1 号・2 号人骨残存部位
図版 14　城山横穴群 Y73 号墓出土人骨　1 号・2 号・3 号人骨残存部位
図版 15　出土遺物 1
図版 16　出土遺物 2
図版 17　出土遺物 3
図版 18　出土遺物 4
図版 19　出土遺物 5
図版 20　出土遺物 6
図版 21　出土遺物 7
図版 22　出土遺物 8
図版 23　出土遺物 9
図版 24　出土遺物 10
図版 25　出土遺物 11
図版 26　出土遺物 12



第１図　福智町の位置

Ⅰ　調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過

(1) 調査の経緯

史跡城山横穴群の保存整備工事を行うため、指定地内で未調査であった、公有地化を行い家屋移転した宅地部分と家屋に隣接し調査が不十分であった西側斜面の一部を対象に詳細な内容確認が必要となった。そのため平成 27 年度から令和 2 年度にかけて国庫補助事業として範囲・内容確認調査を行った。

(2) 史跡指定までの経過

年 度	概 要	
H20 年度	目的	・急傾斜地崩壊対策事業に先立つ事前調査として丘陵上の遺跡分布状況の把握
	方法	・地形測量図に確認遺跡を記入 ・トレンチを設定し、表土厚及び遺跡内容を確認
	成果	・確認トレンチから、埋没遺跡が多数存在し、横穴墓数は増加する可能性が考えられた。
H21 年度	目的	・詳細な城山横穴群についての内容把握 ・丘陵全体及び各墳丘の形状把握（地形測量） ・遺跡の部分的な発掘調査及び簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握 ・横穴墓分布空白域の横穴墓有無の確認 ・中世城郭の基礎的情報の把握
	方法	・Y124 玄室内部構造の把握、Y124 上部の墳丘 5 の盛土状況確認トレンチによる墓道部の確認 ・石材が散乱し石室墳の可能性があるため、墳丘 10 に伴う Y122 について、陥没部分のトレンチによる内部構造確認 ・『金田町史』に赤色顔料記載の南側丘陵 Y133 について、内部構造の把握と赤色顔料の確認、トレンチ調査による墓道部の確認 ・前方後円形で埴輪片が採集される墳丘 9 について、トレンチ調査（墳形確認）
H 22 年度	目的	・城山横穴群についての構造把握 ・遺跡の部分的な発掘調査、簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握 ・調査概要報告書（城山遺跡群　福智町文化財調査報告書第 2 集の刊行） ・開発に伴う事前調査から保存目的の調査へ方針を変更
	方法	・Y122 北側斜面の表土除去およびトレンチによる横穴墓の分布状況確認 ・横穴墓の構造確認のため、進入可能な横穴墓における略測、写真撮影 ・丘陵全体の地形測量（1/500）と横穴墓の分布状況を図化 ・墳丘の詳細にて図化（1/200、20cm コンタ） ・横穴群上部に存在する中世城郭の縄張図を作成

年 度	概 要	
H 23 年度	目的	・国史跡へ向けた範囲・内容確認調査を開始 ・城山横穴群についての構造把握 ・遺跡の部分的な発掘調査、簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握
	方法	・墳丘規模確認のため、墳丘 5 のトレンチ調査 ・墳丘 9 主体部と考えられる Y181 墓道部のトレンチ調査 ・横穴墓構造確認のため進入可能横穴墓を略測、写真撮影による簡易調査
H 24 年度	目的	・城山横穴群についての構造把握 ・遺跡の部分的発掘調査、簡易調査による横穴墓の構造、時期変遷の把握
	方法	・Y181 横穴墓の玄室内部構造確認の為の床面の発掘調査 ・斜面上の横穴墓の墓道構造解明のためのトレンチ調査 ・横穴墓の構造確認のため進入可能横穴墓における略測、写真撮影による簡易調査
H 25 年度		・発掘調査報告書（城山横穴群　文化財調査報告書第 4 集）作成 ・文化庁へ史跡指定の意見具申

■官報告示文
名　　称　　城山横穴群
指定年月日　　平成 26 年 10 月 6 日
文部科学省告示第百三十七号（史跡に指定する件）
指定管理団体：福岡県福智町
　　平成 27 年 3 月 11 日指定（官報　文化庁告示第十号）
■官報告示文（追加指定）
名　　称　　城山横穴群
指定年月日　　平成 28 年 10 月 3 日
文部科学省告示第百四十五号（史跡に追加指定する件）
■官報告示文（追加指定）
名　　称　　城山横穴群
指定年月日　　平成 29 年 10 月 13 日
文部科学省告示第百四十三号（史跡に追加指定する件）

○指定面積　　24,215.57㎡

（3）史跡指定後の経過

年 度	概 要
H 26 年度	・平成 26 年 10 月 6 日指定告示。平成 27 年 3 月 11 日福智町管理団体に指定。 ・公有地化の開始（2 件完了） ・文化庁への追加史跡指定の意見具申。
H27 年度	・公有地化（3 件完了） ・範囲・内容確認調査の開始。 ・文化庁への追加史跡指定の意見具申。 ・保存活用計画審議
H28 年度	・公有地化（3 件完了） ・範囲・内容確認調査。 ・保存活用計画策定
H 29 年度	・公有地化（1 件完了） ・範囲・内容確認調査。 ・整備基本計画策定
H30 年度	・範囲・内容確認調査。 ・整備基本設計作成。 ・次年度保存整備工事部分について実施設計。
R1 年度	・範囲・内容確認調査。 ・保存整備工事。 ・次年度保存整備工事部分について実施設計。
R2 年度	・範囲内用確認調査の開始。 ・保存整備工事完了。 ・範囲・内容確認調査報告書、整備報告書作成、刊行。

2. 調査組織

事務局（福智町）

福智町教育委員会

教育長

辻村　哲弥（令和 2 年 4 月 19 日まで）

朝部　英晴（令和 2 年 4 月 20 日から ）

生涯学習課

課長　　谷川　信行

課長補佐　松田　有紀　（平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月）

係長　　前川　　司　（平成 29 年 9 月まで）

　　奥　　一 幸　（平成 29 年 10 月から平成 30 年 3 月）

　　野村　和貴　（平成 30 年 4 月から平成 31 年 3 月）

　　仲村　浩美　（平成 31 年 4 月から）

主査　　豊田　佑香　（令和 2 年 7 月から ）

　　井上　勇也　（担当平成 25 年 4 月から）

主任主事　井上　勇也　（担当平成 25 年 3 月まで）
主事　　斉藤　亮麿　（平成 27 年度）
係　　小池　史哲　（平成 28 年 4 月から）
　　長谷川　清之（平成 31 年 4 月から）

発掘調査、整理作業に参加された方々は下記のとおりである。記して感謝いたします。

発掘作業員・整理作業員（敬称略・五十音順）
荒木 昭生、内野 賢三、衛藤 直實、太田 喜久男、太田 信行、奥 紀美子、奥村 ひろみ
城戸　冨士子、木村 恵、久保 一二三、小森 奈津希、内藤 歩、根津 恒夫、長谷川 勝義
原田 恵、春本 篤、平嶋 寿俊、藤川 岳久、堀江 達男、堀川 幸敏、松島 ツヤ子、松田 正明
森 五十男、八隅 定雄、吉岡 淳子

調査にあたって、文化庁記念物課（文化庁資源活用課）、福岡県教育庁教育総務部文化財保護課においては現地視察、協議に際し有益な御助言・御教示をいただいた。筑豊、北九州両教育事務所管内文化財担当ものの皆様には調査、報告書作成において有益な御助言・御教示をいただいた。
現地調査においては九州歴史資料館、地元住民ほか関係各位に多大な御理解と協力を得た。また、多くの方々に調査・報告書作成において、有益な御助言・御教示をいただいた。感謝いたします。

Ⅱ　位置と環境

1. 福智町の概要

福智町は、福岡県の中部から北東よりに位置し、直方市・北九州市・香春町・田川市・糸田町・飯塚市と隣接している。福岡・北九州市の両百万都市の中心からそれぞれ約 45km、約 35km の距離にある。

町の中央部で彦山川と中元寺川が合流し、北部へ貫流している。また、標高 901 mの秀麗な福智山がそびえ、その周辺は北九州国定公園に指定されるなど緑豊かな自然環境に恵まれている。

現在の人口は約 24,000 人、 観光、教育をはじめとする人の活力を生かしたまちづくりを展開している。文化的には、400 年の歴史を誇る国指定伝統的工芸品「上野焼」の窯元が点在する陶芸の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として全国的に有名である。

2. 自然環境

(1) 地形概況

町の北側は福智山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。町南部では中元寺川と彦山川が合流し、北へ流れ直方市内で福岡県第二位の河川として知られる一級河川遠賀川と合流している。これらの河川が第三紀層を主体とする低丘陵や支谷を多数つくりだし、地表には石灰岩、花崗岩、地下には石炭層を挟在している特異な地形である。

東側の福智山地は北九州市若松区の石峯山、弥勒山等の山塊に発し、洞海湾を超えて皿倉山から福智山（901 m）、牛斬山、香春岳へと続いている。貫山地は企救半島から貫山、竜ヶ鼻、戸城山、犢牛岳を経て英彦山火山地域に連結している。

西側の金国山地は遠賀郡遠賀町の御嶽山に発し鞍手郡の剣岳、六ヶ岳から小竹町を経て、日尾山、関の山、船尾山、金国山、熊ヶ畑山へと連なっている。

田川東部丘陵は、彦山川の右岸と、今川及び金辺川とその支流の御祓川の左岸との間にみられる。大任町と赤村の境を画しながら北上し、田川市夏吉の彦山川と金辺川の合流点まで連続している。

田川中央丘陵（大峰丘陵）は、彦山川の左岸と、中元寺川右岸の間にみられる。中元寺より大峰を経て、川崎町と大任町の境を画し、田川市を東西に二分しながら北上して福智町金田の彦山川と中元寺川の合流点まで連続している。

城山横穴群は、中元寺川の右岸の独立丘陵上、標高 21 mから 39 mほどに位置する。遠賀川の中流域に含まれる地域であり、福岡県下でも横穴墓集中地帯として知られている地域である。

(2) 気象状況

福智町は、田川盆地の北に位置し、西九州内陸型気候区に属し、県内の他の地区に比べ、昼と夜、夏と冬の気温の較差が最も大きい地域である。風も特に夜間は弱く、放射冷却が激しいことが霧の発生を多くしている。

福智町に最も近い飯塚観測所の平成 27 年気象データを見ると、平均気温は 16.0℃で、7、8 月

の平均気温は 25℃を超え最も高く、2 月は 6.0℃と最も低くなっている。過去 10 年間を見ても、年間平均気温が 15.3℃から 16.5℃と 15 ～ 16℃前後で推移している。

降水量については、過去 10 年では平成 18 年（2006）は 2,317.0 ㎜と例年に比較して多くなっているが、過去 10 年の平均降水量は 1,885.2 ㎜である。

（3）植生

福智町は東西から山地に挟まれた河川沿いの平野と丘陵からなり、平野部は農地が広がる地域である。植物生態は一般的ではあるが、特徴的なものは福智山の植生があげられる。

福智山は人々の生活・生産のため、昔からよく利用されてきた。樹木は木炭、薪、杭木などにする目的で伐採が繰り返されてきたため、英彦山などにある標高 700 m以上のブナ帯特有の植物はあまりみられなくなっている。頂上付近の準平原には樹木が無く草原となっている。福智山は山の規模の割合には植物の種類が少ない。山頂付近の隆起準平原にはクマイザサ群落とススキ群落、その下部のアカシデ･イヌシデ群落、照葉樹林帯では上部にアカガシ･ミヤマシキミ群集、上野峡一帯のアカマツ･コバノミツバツツジ群集、低地に近づくとスダジイ・ヤブコウジ群落に区別される。また、福智山は平尾台などと同じ石灰岩質の地質も分布しており、他の地質部分にはほとんど生育することのない好石灰植物がみられ、香春岳や竜ヶ鼻などと同様のイワシデが生育していることも特徴となっている。

かつて町内に多くみられたボタ山はススキ・セイタカアワダチソウ群落からヤマハゼとアカメガシワの侵入からはじまり、クスノキ、ヒサカキなどの常緑照葉樹が成長していた。

福智町は彦山川の中流域にあたり、河川植生ではヨシ、オギ、タチヤナギ、カナムグラ、ミゾソバ、サクラタデ、セイタカアワダチソウなどがみられる。

3. 歴史的環境

福智町の歴史的環境であるが、国指定史跡 1 件、国登録文化財 1 件、県指定文化財 8 件、町指定文化財が 15 件と指定、指定・登録文化財だけでも 23 件を数え、他にも多くの文化財が所在し地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。

町内でもっとも著名な文化財は田川市群初の国史跡城山横穴群、登録文化財の九州マクセル赤煉瓦記念館や、県指定文化財を3件所有する上野興国寺であろう。九州マクセル赤煉瓦記念館は、旧三菱方城炭鉱時代の建物であり築 100 年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。この赤煉瓦の建物は敷地内に残る他の赤煉瓦建物とともに、かつて炭坑で栄えた筑豊の近代化遺産を象徴する存在となっている。上野興国寺は足利尊氏が九州へ逃れた際に隠れたとも伝えられ、尊氏、直義兄弟発願の安国寺の一つである。古文書、仏殿（観音堂）、木造玄晦禅師坐像は県指定文化財に指定されている。また、町内には県下でも著名な町指定天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禅寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤がある。虎尾桜は福智山の中腹にあり、そこにいたる道は幾分険しいものの毎年盛りになると多くの見物客が訪れている。このエドヒガンは希少種の桜であるが、町内の福智山山麓には九州でも例がない密集地帯として有名である。

福智町では、古く縄文時代より人々が生活していた痕跡が残されている。明確な集落は未確認であるが、金山遺跡・長浦遺跡では縄文時代の遺構、遺物が確認されている。数点ではあるが、縄文時代早期から前期の縄文土器も出土し、古くからこの地で人々が暮らした痕跡が残されている。特に金

山遺跡では縄文時代後期から晩期の石器製作跡と考えられる遺構が確認され、周辺に縄文時代集落が存在した可能性がある。

弥生時代は、遠賀川流域では立岩遺跡や立屋敷遺跡といった学史に残る遺跡も多く確認されている。立岩遺跡では 10 面の前漢鏡を副葬した集団墓が確認され、弥生時代のクニの存在が明らかとなっている。また、そこで生産された石包丁は北部九州に広く分布し、立岩型とされる石包丁は全国的に有名である。彦山川流域では北部九州の弥生時代研究では著名な下伊田式土器の由来となった下伊田遺跡群などが存在する。町内では彦山川、中元寺川の河岸段丘に生活の場が移り、伊方丘陵やその周辺、神崎などで生活の痕跡や墓地が確認されている。特に伊方丘陵やその周辺は弥生時代から古墳時代にかけて主要な生活の場であったと考えられ、町内でも有数の遺跡密集地帯である。弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓から内行花文鏡が出土し、ほぼ同時期と推定される三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。このことは、有力ものの存在を連想させ、後の伊方古墳と並び周辺地域の中でも中心地であったことがうかがわれる。青銅器は弥生時代においては有力者層の存在を想定できる資料である。彦山川流域では上流域の大任町で銅剣が、隣の糸田町では銅戈が、香春町では宮原遺跡で銅鏡が、田川市では上ノ原台地で細型銅剣が出土し、それぞれの地域において有力者層の存在が想定される。

古墳時代前期から中期にかけては各地で前方後円墳が首長墓に採用される時期である。遠賀川流域においても上流の嘉麻市所在の沖出古墳や下流の遠賀町所在の島津・丸山古墳群などで前期の前方後円墳が築造される。町内の古墳時代前期の古墳は迫古墳が知られる。主体部は粘土郭で覆われた木棺で、副葬品等は出土しないが、形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。神崎遺跡では前期と考えられる石棺墓が確認されている。

古墳時代中期は前方後円墳が各地で築かれるとともに巨大化していく。また、横穴系の墓制が日本列島に導入された時期に当たる。流域の田川市ではセスドノ古墳、猫迫古墳という 2 つの古墳が営まれる。セスドノ古墳は朝鮮半島との関連が伺える横穴式石室を持ち、猫迫古墳は古墳時代中期の資料が少ない遠賀川流域の中で九州最古級の馬形埴輪などが出土し全国的にも有名である。また、5 世紀後半には豊前北部で横穴墓の築造も開始される。行橋市の竹並横穴群や中津市の上の原横穴墓群に 5 世紀代にさかのぼると考えられる横穴墓が確認されている。町内では古墳時代中期には目立った古墳の造営もなく、不明な点が多い。

古墳時代後期になると各地で群集墳が築造される。福智町の位置する遠賀川流域は地質的な影響からか横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営され、今回報告を行う城山横穴群も主体は横穴墓群である。横穴墓群の数に反比例して横穴式石室を内部主体にもつ古墳の数は少ない。町内で確認されている後期古墳はわずか数基である。遠賀川流域においても横穴式石室を内部主体とする古墳群は横穴（墓）群に比べ数は少ない。一部、宮若市のように横穴式石室墳が群集墳の主流となる地域もあるが、主流は横穴墓である。その中でも町内の伊方古墳は墳丘径約 32m、内部の横穴式石室は全長 12m を超え福岡県下でも有数の規模を持つ巨石墳である。保存整備に先立つ発掘調査の結果、少ないながらも金銅装の馬具等が確認され、地域首長の古墳であると考えられる。また町内では、神崎 1 号墳出土の獅噛環柄頭という優れた副葬品が出土している。獅噛環柄頭は全国的にも類例は少なく貴重な遺物である。神崎1号墳は周辺の状況から横穴墓の可能性もあり、そうであるなら首長墓に準ずる階層の横穴墓採用という横穴墓集中地域

としての地域性の現れとして重要である。遠賀川上流域の飯塚市では金銅装の帯金具などの豪華な副葬品が出土している櫨山古墳が横穴墓と考えられている。遠賀川流域では、横穴墓という墓制が有力者層にも採用されていたことが想定できる。

町内だけでも古墳時代後期の群集墳は、横穴墓を中心に数百基存在すると考えられるが、現在までのところ、これら群集墳の造墓主体となる集落は確認されていない。古墳時代の土器が伊方丘陵の裾部や赤池の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘上などで集落が発見される可能性がある。

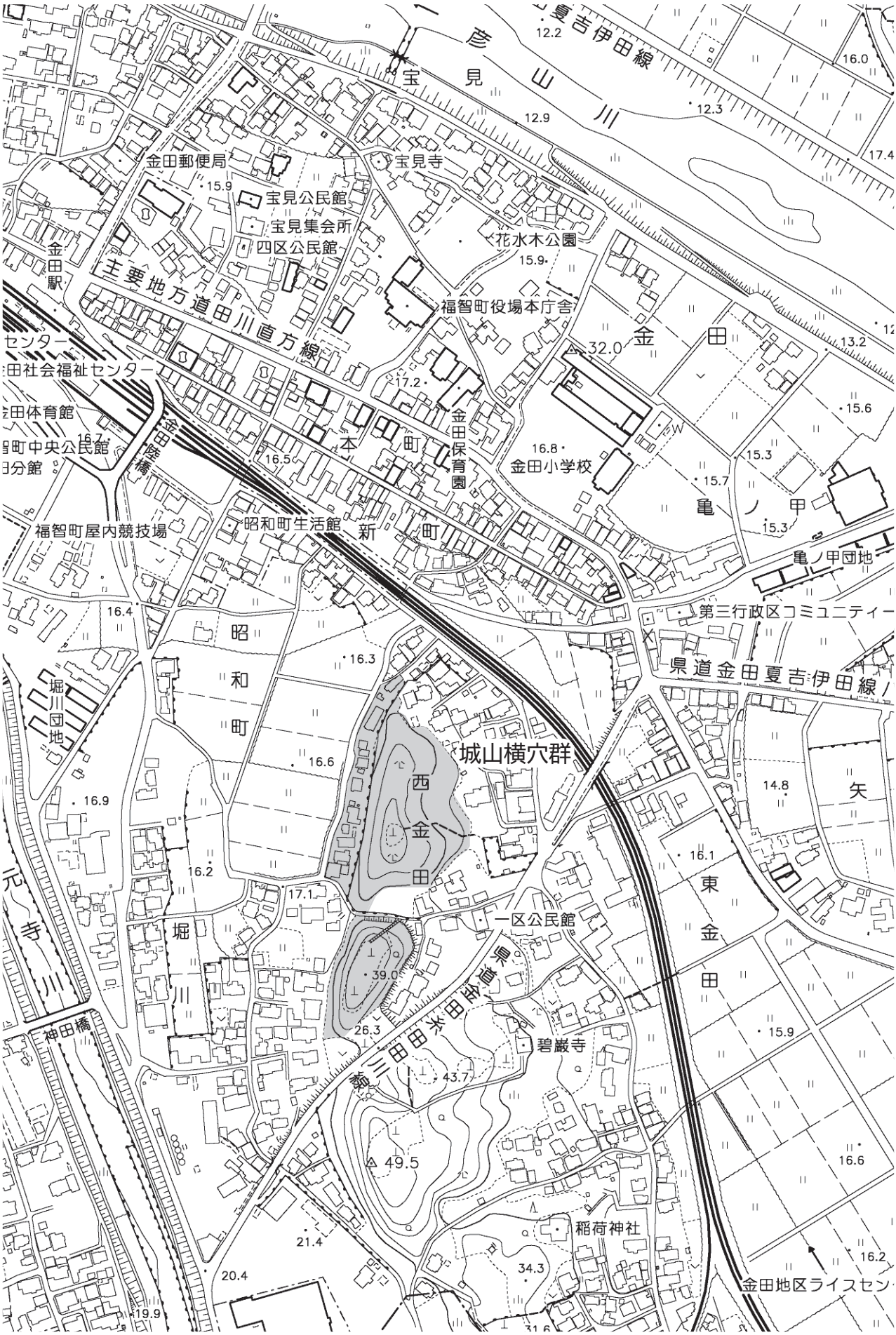
古代では伊方城園遺跡で掘立柱建物等が確認されている。また伊方の地名は伊方荘として文献にも散見され、伊方城園遺跡では鎌倉時代の建物も確認され、伊方石丸遺跡でも同時期の井戸が確認されている。伊方周辺は中世まで地域の中心地として人々が生活していたことがう窺える。また上野興国寺は、室町時代に安国寺として創建され現代に続く古刹である。先に述べたように、足利尊氏の伝承も残り、近世豊前に入封された小笠原藩ゆかりの寺でもある。幕末には小笠原藩9代藩主の葬儀もここで行なわれた。

近世の周辺地域は細川氏、小笠原氏によって治められた豊前の地であった。豊前小倉藩では手永を管轄する大庄屋が周辺の年貢の管理などを行っていた。その中でも金田手永の六角家は有名である。現在の母屋は後世のものであるが、六角家には藩主が通る専用の門である御成門のある白壁、土蔵などが残り往時の姿をとどめている。城山横穴群はこの六角家の裏山であり、敷地の一角として手付かずのまま残されたといえる。横穴群の頂部には累代の近世墓も残っている。現在も町の特産品として 400 年の歴史を持つ上野焼は、文禄・慶長の役により日本へやってきた朝鮮陶工を招き細川氏により始められ、細川、小笠原の時代に藩窯として栄えた。町内には開窯である釜の口窯をはじめ、岩屋高麗窯、皿山本窯という古窯址も存在しその歴史の深さを今に伝えている。

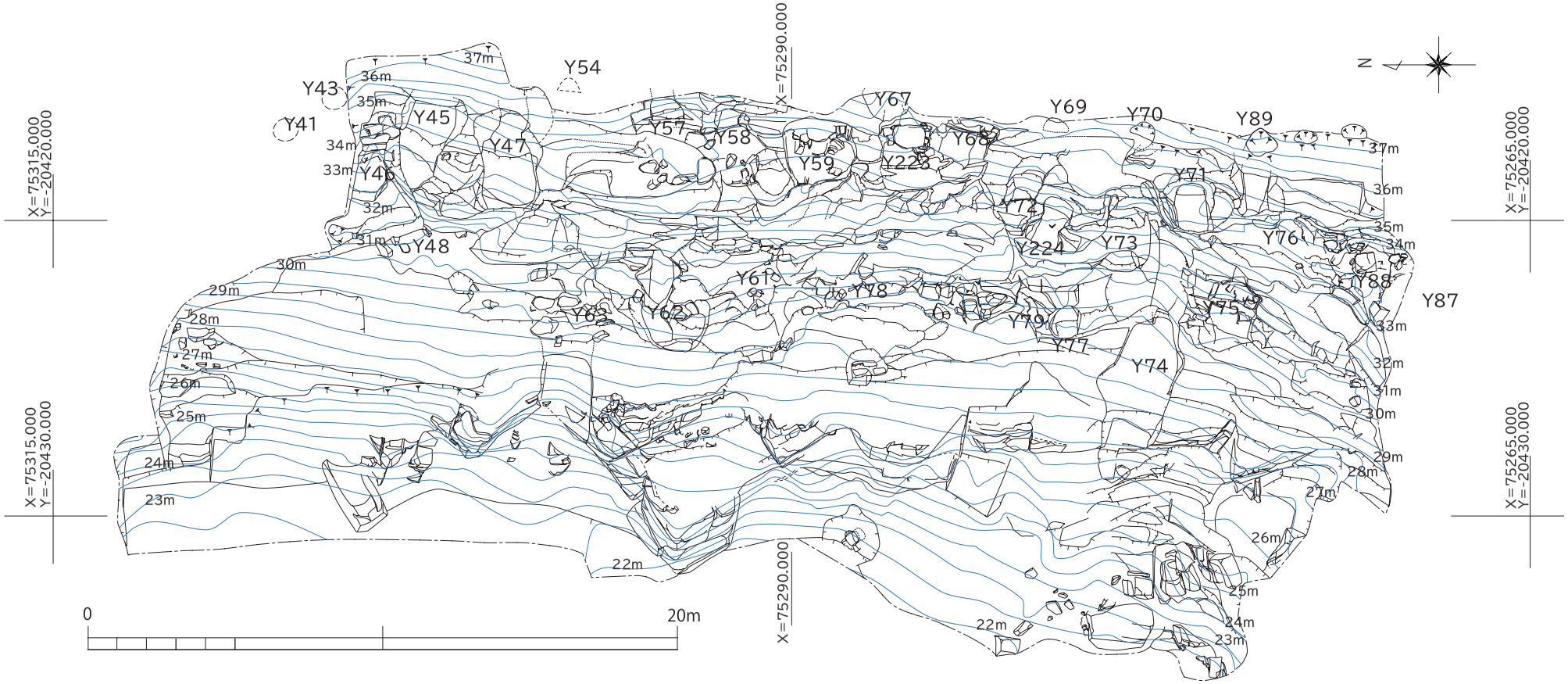
近代は、周辺を含め筑豊地区全体が炭鉱とともに発展して行った。町内でも三菱方城炭鉱、明治赤池鉱業所など大手資本による大規模炭鉱をはじめ、数多くの中小炭鉱が創業し活気にあふれていた。現在ではボタ山等にわずかにその面影を残すのみとなっている。その中でも三菱方城炭鉱の赤煉瓦建物群は現在マクセル株式会社の敷地内に数棟残り、国登録文化財の九州マクセル赤煉瓦記念館を始め今でも活用され、筑豊の近代化を物語る資料として筑豊の歴史を見守っている。

第２図　城山横穴群周辺遺跡分布図（1/25,000）

1. 城山横穴群　2. 東金田横穴　3. 玉穂山古墳　4. 飯土井古墳　5. 神崎遺跡　6. 人見古墳群（神崎1号墳）7. 和田山横穴群　8. 野添遺跡群　9. 高崎山古墳　10. 法華屋敷遺跡　11. 前村遺跡　12. 伊方遺跡群　13. 伊方城園遺跡　14. 伊方小学校遺跡第1地点　15. 伊方小学校遺跡第2地点　16. 伊方小学校遺跡第3地点　17. 伊方石丸遺跡　18. 伊方古墳　19. 後谷遺跡　20. 九州マクセル赤煉瓦記念館　21. 長谷横穴墓群　22. 三本松古墳群　23. 草場遺跡　24. 宝珠遺跡　25. 迫遺跡　26. 迫横穴墓群　27. 迫古墳　28. 板取遺跡　29. 宮ノ馬場遺跡　30. 石松遺跡　31. 市津川床遺跡　32. 市場平石遺跡　33. 鋤木田川床遺跡　34. 草場川床遺跡　35. 蔵元遺跡　36. 鋤木田古墳　37. 諏訪山遺跡　38. 国境石　39. 那岐野丘遺跡　40. 上野興国寺



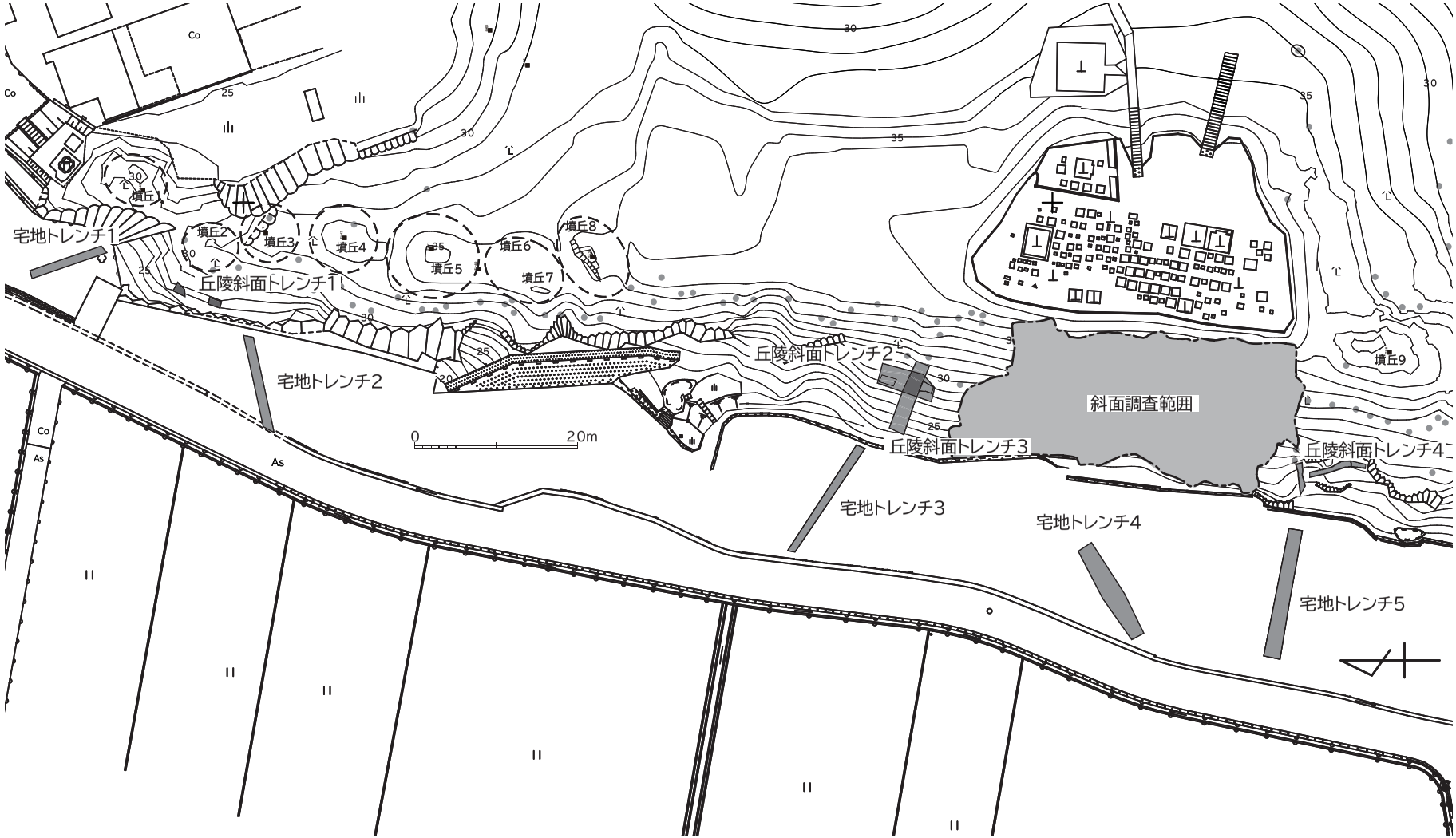
第３図　城山横穴群周辺地形図（1/5,000）



第４図　遺構配置図（1/200）

Y43
Y45
Y47
Y54
Y57
Y58
Y59
Y67
Y68
Y69
Y70
Y89
Y41
Y46
Y48
Y63
Y62
Y61
Y223
Y78
Y72
Y224
Y73
Y79
Y77
Y74
Y71
Y75
Y76
Y88
Y87

第５図　検出遺構配置



第６図　丘陵斜面・宅地トレンチ配置図（1/750）

Ⅲ　調査の内容

1. 遺跡の概要

城山横穴群は、福岡県の中央を流れる遠賀川の支流のひとつ中元寺川の右岸、標高 21m ～ 39m の独立丘陵上に存在する。以前より斜面上に横穴墓が分布することが知られており、また、彩色を持つ横穴墓が存在する可能性も指摘されていた。

平成 20 年から平成 24 年の調査では、222 基の横穴墓と横穴式石室墳 1 基、中世城郭を確認した。横穴墓の中には墳丘を有する横穴墓も含まれ、地域史解明の糸口となる貴重な遺跡である。平成 26 年 10 月 6 日付官報にて国史跡に指定された。

前回の調査では確認された横穴墓及び横穴式石室には発見順に Y の略号を付け番号を振った。墳丘も同じように発見順に番号を振った。各遺構の数値は残存部および推定値を含み、追加調査等で変更される場合がある。今回の調査では若干の番号の振り替えを行った（第 17・18 図）。遺構一覧表に修正を反映させている。

2. 調査の方法と概要

(1) 平成 27 年度の調査

a 目的

・宅地部分での遺構残存状況確認。

・家屋解体後に未調査部分として残っていた西側丘陵斜面における遺構の残存状況の確認。

b 方法

・家屋移転が完了した地点でのトレンチ調査。

・北側丘陵西側斜面のトレンチ調査。

(2) 平成 28 年度の調査

a 目的

・宅地部分での遺構残存状況確認。

・家屋解体後に未調査部分として残っていた西側丘陵斜面における遺構の残存状況の確認。

b 方法

・家屋移転が完了した地点でのトレンチ調査。

・北側丘陵西側斜面のトレンチ調査。

(3) 平成 29 年度の調査

a 目的

・宅地部分での遺構残存状況確認。

・詳細な分布状況が明確でない箇所について遺構の基礎データ収集。

b 方法

・家屋移転が完了した地点でのトレンチ調査。

・北側丘陵西側斜面で表土を除去し、遺構の残存状況の確認、遺構の分布状況の確認を行った。

(4) 平成 30 年度の調査

a 目的

・詳細な分布状況が明確でない箇所について遺構の基礎データ収集。

b 方法

・北側丘陵西側斜面で表土を除去し、遺構の残存状況の確認、遺構の分布状況の確認を行った。

(5) 令和元年度の調査

a 目的

・詳細な分布状況が明確でない箇所について遺構の基礎データ収集。

・北側丘陵西側斜面において遺構の分布状況、残存状況等の 基礎資料収集。

b 方法

・西側丘陵斜面部分で表土を除去し、遺構の残存状況の確認、遺構の分布状況の確認を行った。

(6) 令和 2 年度の調査

a 目的

・詳細な分布状況が明確でない箇所について遺構の基礎データ収集。

・北側丘陵西側斜面において遺構の分布状況、残存状況等の 基礎資料収集。

b 方法

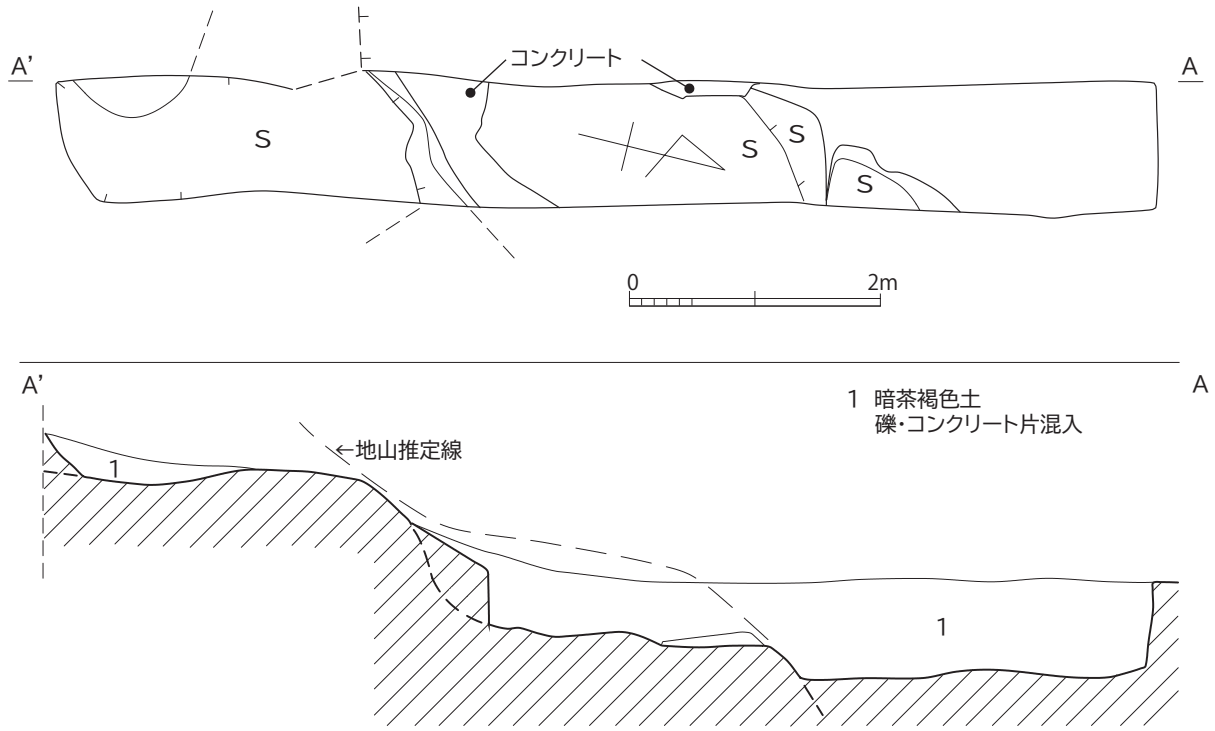
・西側丘陵斜面部分で表土を除去し、遺構の残存状況の確認、遺構の分布状況の確認を行った。

3. 旧宅地の調査

(1) 宅地トレンチ（第 6 図）

宅地トレンチ 1（平成 28 年度、図版 2・3、第 6・7 図）

728 番地 3 に南北方向に設定し人力により掘削した。トレンチの埋土は暗茶褐色土の礫やコンクリート片の混入したものであり、宅地造成の際に持ち込まれたと考えられる。トレンチの南側は地山が削平され、北側は急激に落ち込む。地山が落ち込む部分は本来の丘陵裾部と考えられる。この部分で丘陵斜面は推定線のように緩やかだったと考えられる。このトレンチから遺物は出土せず、遺構の存在も確認していない。



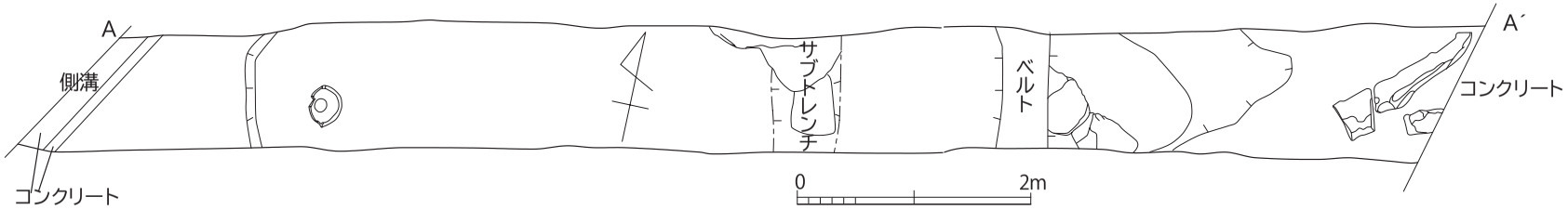
第 7 図 宅地トレンチ 1 実測図（1/60）

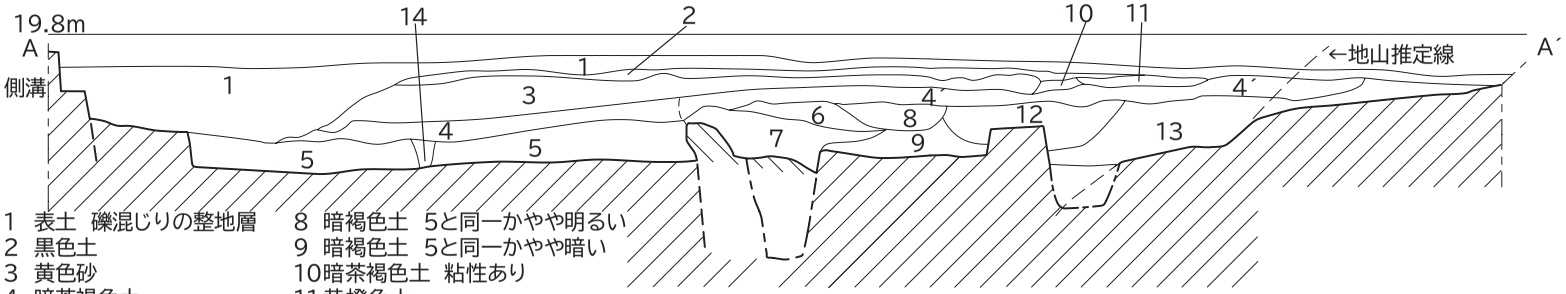
宅地トレンチ 2（平成 27 年度、図版 2・3、第 6・8 図）

728 番地 2 に東西に設定し人力により掘削した。地山崩落土も部分的にみられるが、トレンチ 1 同様 1 から 13 層まで宅地造成の際に持ち込まれたものと考えられる。トレンチの東端付近で地山の残存を検出した。この部分は丘陵裾部と考えられ、急激に立ち上がることから丘陵斜面はトレンチ 1 に比べ急傾斜であったことが推定できる。また、トレンチ中ほどでサブトレンチを掘削し、造成土の下部の確認を行ったところ、灰色砂質土と礫が確認でき流路跡と推定される。このトレンチから遺物は出土せず、遺構の存在も確認していない。

宅地トレンチ 3（平成 27 年度、図版 4、第 6・9 図）

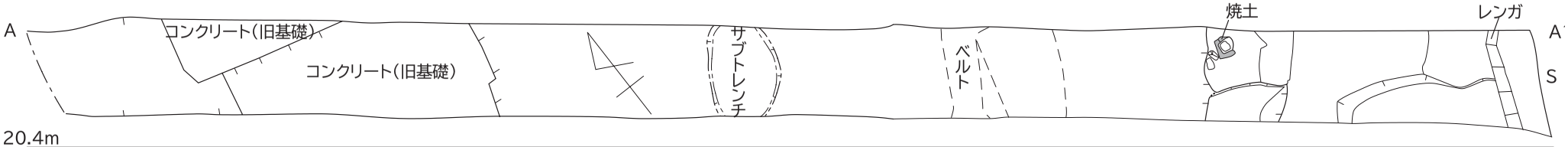
729 番地 2 に東西に設定し設定し人力により掘削した。トレンチ西側では現地表面から 0.3m から 0.4 m下がったところで旧基礎面を検出した。この旧基礎面より上部に堆積した層は瓦片等が混入した造成の際の整地層である。トレンチの東端付近で地山の残存を検出した。この部分は丘陵裾部と考えられ、急激に立ち上がることから丘陵斜面はトレンチ 1 に比べ急傾斜であったことが推定できる。ト

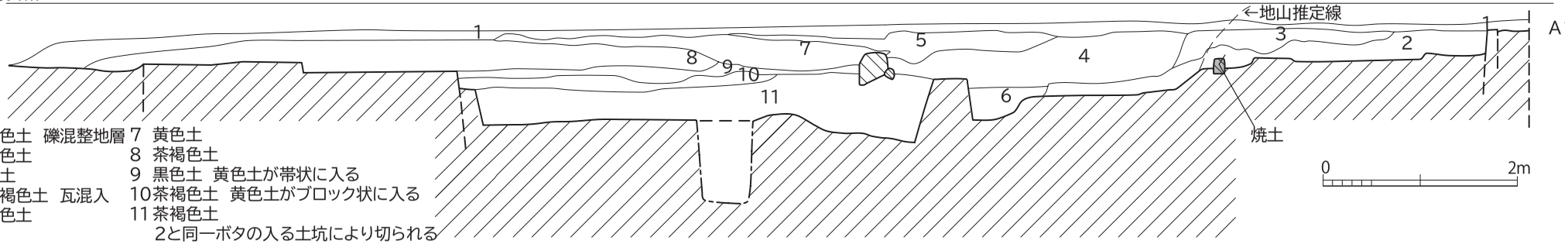




1 表土 礫混じりの整地層
2 黒色土
3 黄色砂
4 暗茶褐色土
4’ 4よりやや暗い
5 暗褐色土 4よりやや明るい
6 茶褐色土
7 茶色土 礫混入
8 暗褐色土 5と同一かやや明るい
9 暗褐色土 5と同一かやや暗い
10暗茶褐色土 粘性あり
11黄橙色土
12茶色土 礫混入
13茶褐色土
14暗茶褐色土 Pit状に入る

第８図 宅地トレンチ２実測図（1/60）

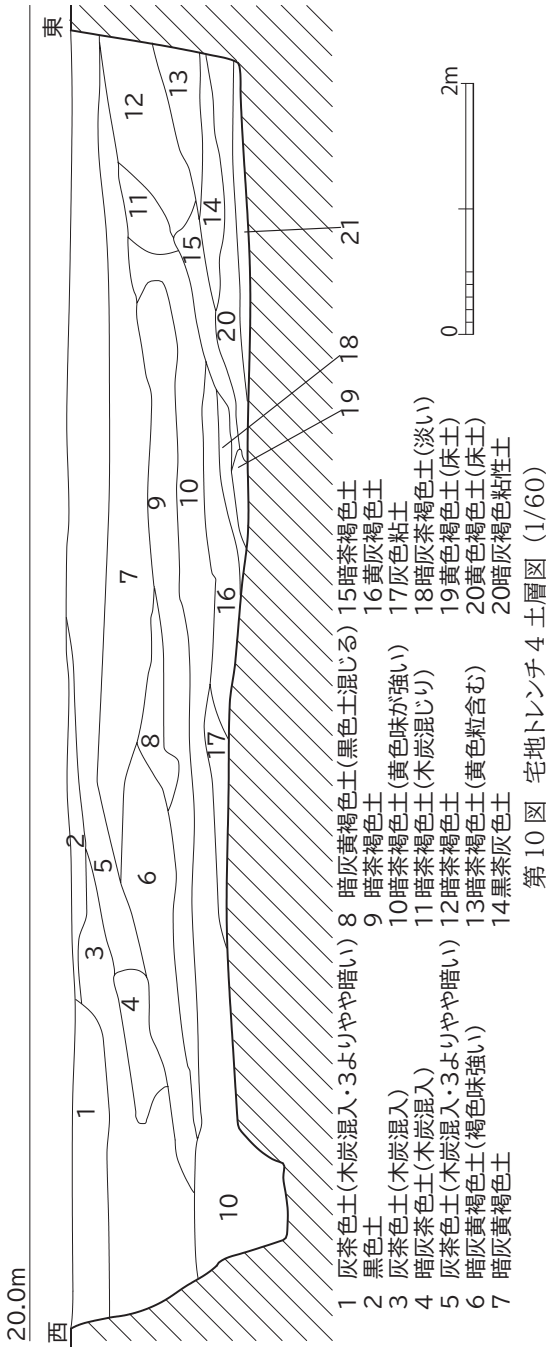




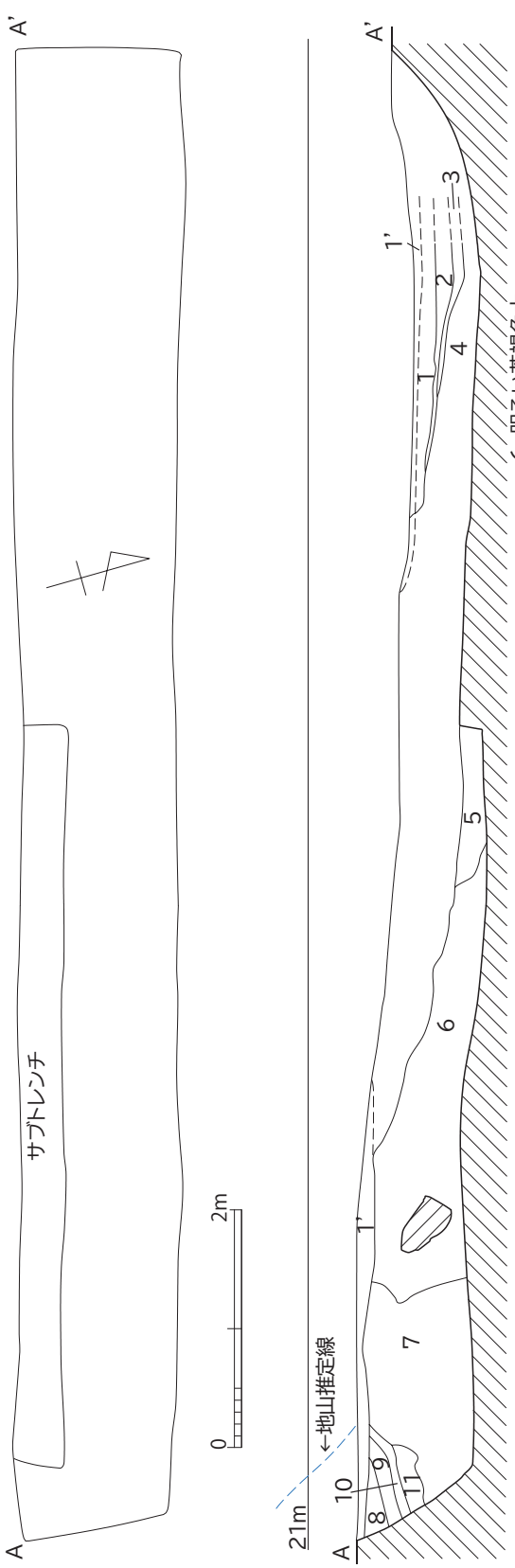
1 灰茶色土 礫混整地層
2 茶褐色土
3 黒色土
4 暗茶褐色土 瓦混入
5 暗褐色土
6 ボタ
7 黄色土
8 茶褐色土
9 黒色土 黄色土が帯状に入る
10茶褐色土 黄色土がブロック状に入る
11茶褐色土
2と同一ボタの入る土坑により切られる

第９図 宅地トレンチ３実測図（1/60）

レンチ最下層は粘性が強くなり、トレンチ２の状況から丘陵西側は流路が入り低湿地状になっていたものと推定される。このトレンチから遺物は出土せず、遺構の存在も確認していない。



第10図　宅地トレンチ４土層図（1/60）



第11図　宅地トレンチ５実測図（1/80））

宅地トレンチ４（平成 29 年度、図版４・5、第６・10 図）

731 番地に東西に設定し、前年度までの宅地部分の状況を追認するため重機を使用し掘削した。トレンチ 1 同様 1 から 21 層まで宅地造成の際に持ち込まれたものと考えられる。トレンチ 3 同様最下層は粘性土となり丘陵西側は低湿地上であったことが追認できた。このトレンチから遺物は出土せず、遺構の存在も確認していない。

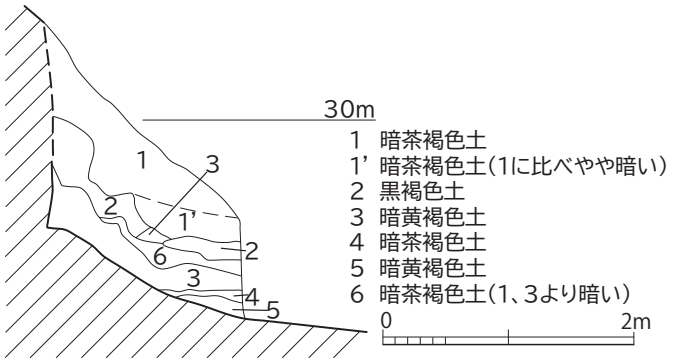
宅地トレンチ５（平成 28 年度図版５・6、第６・11 図）

732 番地に東西に設定し設人力により掘削した。宅地トレンチ 1 同様に、1 から 6 層まで宅地造成の際に持ち込まれたものと考えられる。7 層は不自然に途切れることから、造成時に地山を掘削したとも考えられる。ただし、7 層は白色粘土であり強い粘性を持ち、泥炭層が混入する。トレこのトレンチから遺物は出土せず、遺構の存在も確認していない。

4. 丘陵斜面の調査

(1) 基本土層（第 12 図）

丘陵西側斜面において表土を除去し、遺構の分布状況等の確認を行った。その際一部をベルトとして残し基本土層を確認した。地山上は 2 層を除く 1 層から 6 層まで後世の堆積と考えられる茶褐色土を主体とした表土層である。2 層は堆積の中間付近にあり、黒褐色であり、一時期表層となっていた旧表土と考えられる。この 1 から 6 層の堆積度中には古墳時代から古代末、中世初期の遺物が含まれる。特に古代末、中世初期の遺物はその量が多く、輸入陶磁器、土師器、瓦器、陶器など器種、種類も様々である。頂部に戦国時代と考えられる中世城郭があるものの、時期は異なり現在残っている中世城郭以前に何らかの遺構があったものと考えられる。



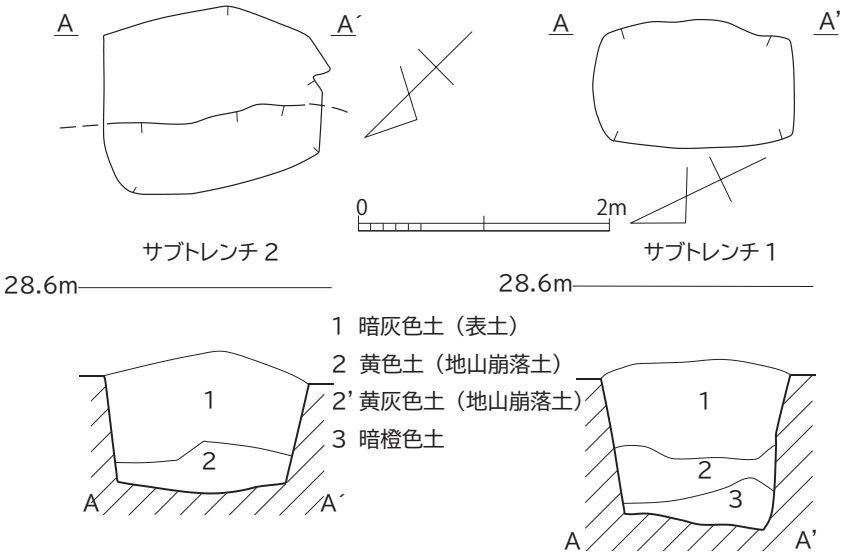
第 12 図 基本土層（1/60）

(2) 丘陵斜面トレンチ（第 6 図）

平成 27 年度、29 年度の丘陵斜面の調査は、足場を組みトレンチを主体とした調査を行った。平成 29 年度からは保存整備の範囲も固まったため、工事範囲を中心に表土を除去し面的な調査を行った。丘陵斜面では大きく 4 か所でトレンチを掘削した。

丘陵斜面トレンチ 1（平成 27 年度、図版 6・7、第 6・13 図）

丘陵の北端付近で設置した。2 本のトレンチを設定し掘削を行った。堆積状況は両トレンチとも 1 層の表土下部には地山の崩落土と考えられる 2 層が堆積する。2 層はサブトレンチ 1 ではやや白っぽい色調である。サブトレンチ 1 では 2 層の下部で 3 層として検出した暗橙色の層も地山崩落土と考えられる。 サブトレンチ 2 ではテラス状の平坦面を検出した。このテラス上の平坦面はトレンチ外へ延び

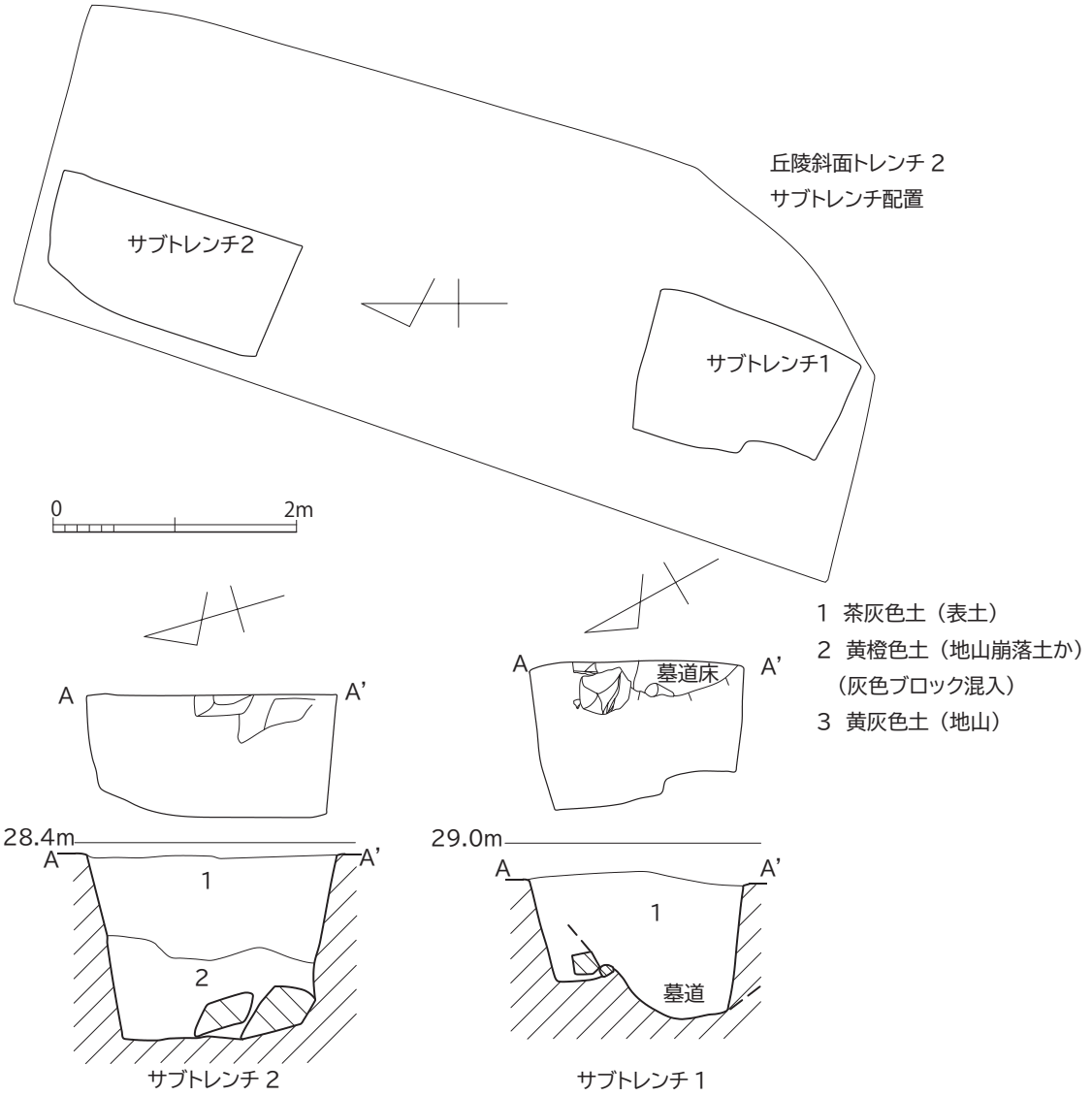


第 13 図 丘陵斜面トレンチ 1 実測図（1/60）

ることを確認している。トレンチの南半では表土が厚く地山は検出できていない。南側トレンチ床面は平坦になる。トレンチの掘削位置は、トレンチ掘削位置は現在分布の確認ができている横穴墓よりも標高で下位であり未確認の横穴墓の可能性もあるものの、その後表土を除去し斜面の調査を行っている状況から横穴墓の痕跡は実際の開口部とかなりの標高差もある場合が確認されている。そのため、表土の除去を行わない場合横穴墓の特定は困難である。

丘陵斜面トレンチ２（平成 27 年度、図版７・８、第６・14 図）

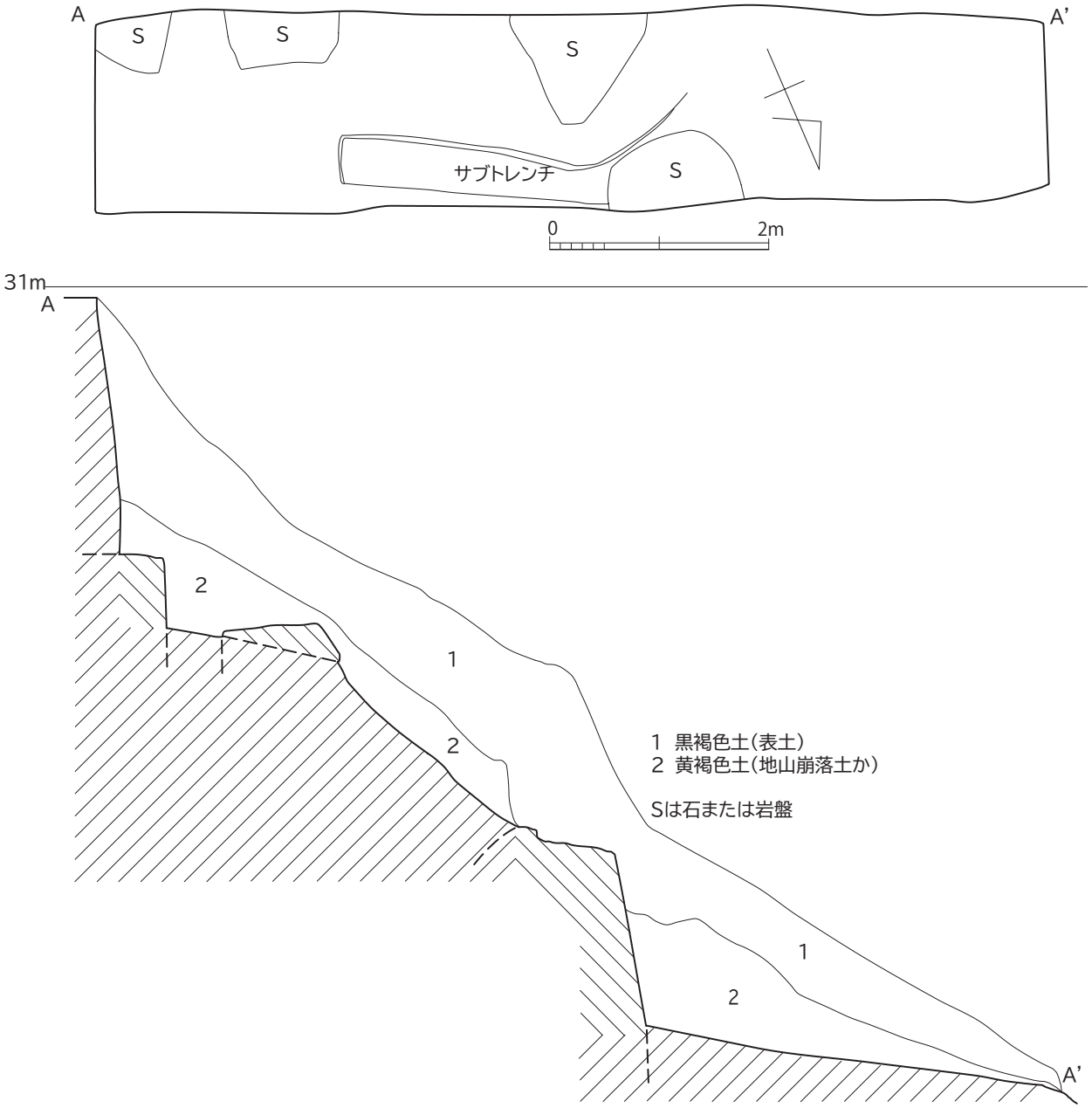
北側丘陵の中間付近で設定した。Y37、Y38 とした横穴墓のすぐ下である。表土を一部除去し内部に２本のトレンチを設定し掘削を行った。堆積状況は両トレンチとも１層は茶灰色土の表土であり、サブトレンチ１ではこの表土のみ堆積する。サブトレンチ２では表土層の下部には黄橙色土の地山崩落土と考えられる層が堆積する。サブトレンチ１東側で墓道と推定される床面を検出し、土層観察面でＵ字状の掘り込みを確認した。トレンチ掘削位置は現在分布の確認ができている横穴墓よりも標高で下位であり未確認の横穴墓の可能性もあるものの、その後表土を除去し斜面の調査を行っている状況から横穴墓の陥没は実際の開口部とかなりの標高差のある場合も確認されている。そのため、表土の除去を行わない場合横穴墓の特定は困難である。



第 14 図 丘陵斜面トレンチ２実測図（1/60）

丘陵斜面トレンチ３（平成 28 年度、図版８・9、第６・15 図）

北側丘陵の中間付近で丘陵斜面トレンチ２に直行する形で設定した。堆積状況であるが１層とした黒褐色土と２層の黄褐色土が堆積する。１層は遺物が混入し表土と考えられ、２層はややしまりがあり遺物も混入しないことから地山崩落土と考えられる。

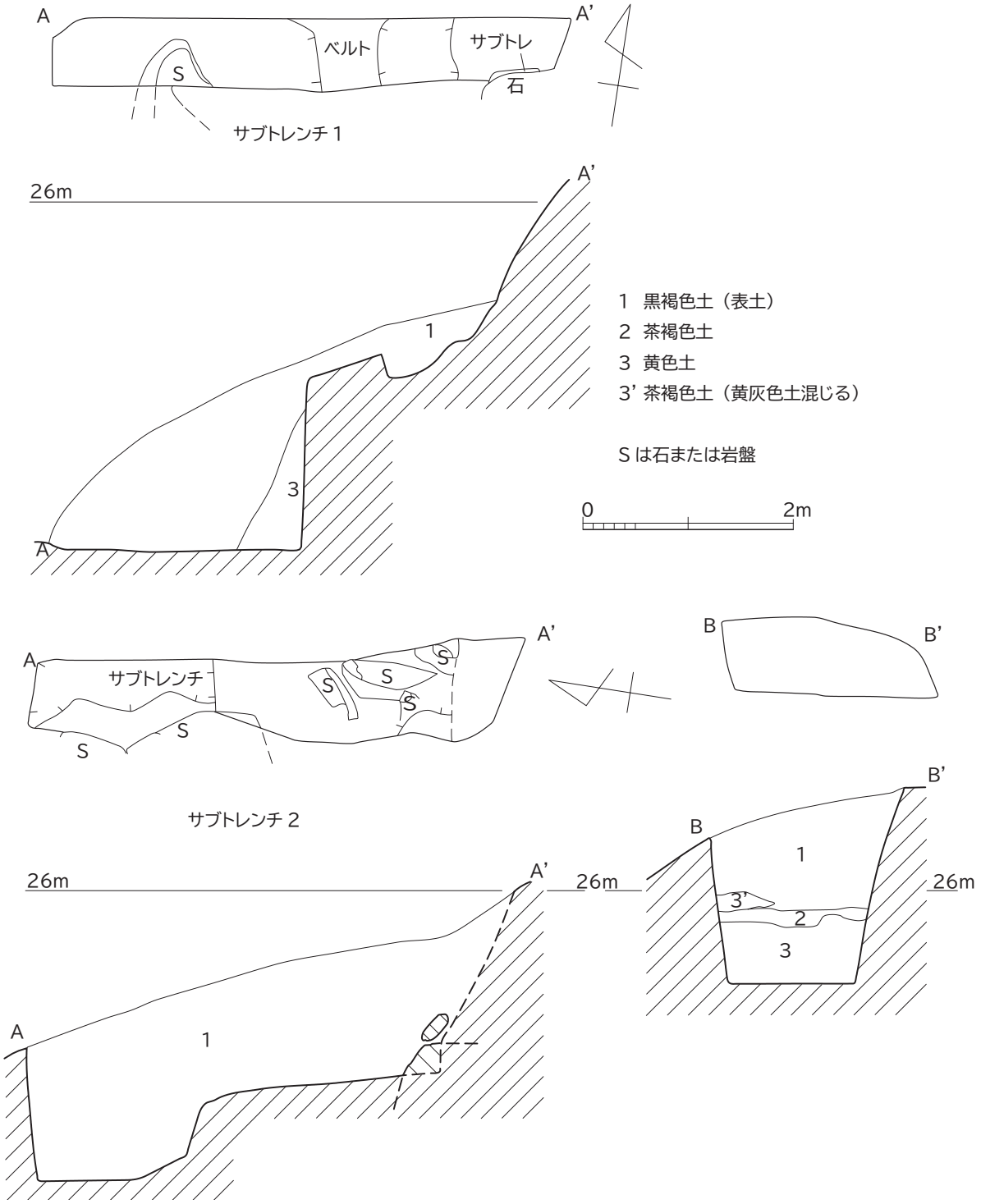


第 15 図　丘陵斜面トレンチ３実測図（1/60）

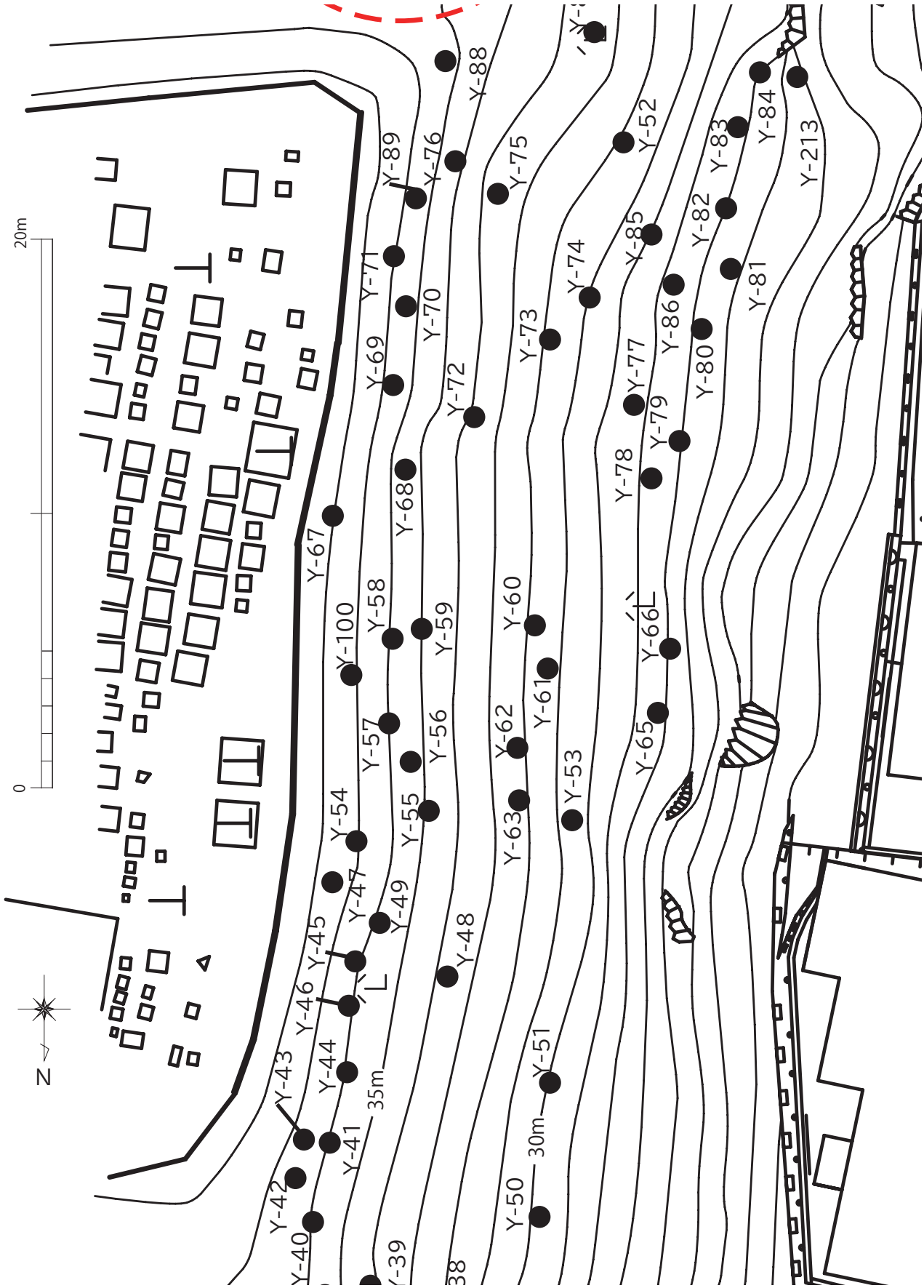
丘陵斜面トレンチ４（平成 28 年度、図版 10、第６・15 図）

北側丘陵の南端付近で設定した。直行するように２本のトレンチを設定し掘削を行った。堆積状況は両トレンチとも１層は黒褐色土の表土であり、東西に斜面に直行し設定したサブトレンチ１では１層の下部には３層とした黄色土が堆積し地山崩落土と考えられる。南北に斜面に並行したサブトレンチ２では１層中にブロック状の３’とした茶褐色土に黄灰色土の混じった層がブロック状に入り、その下部は茶褐色土、黄色土が堆積する。この黄色土はサブトレンチ１の地山崩落土と同一と考えられる。

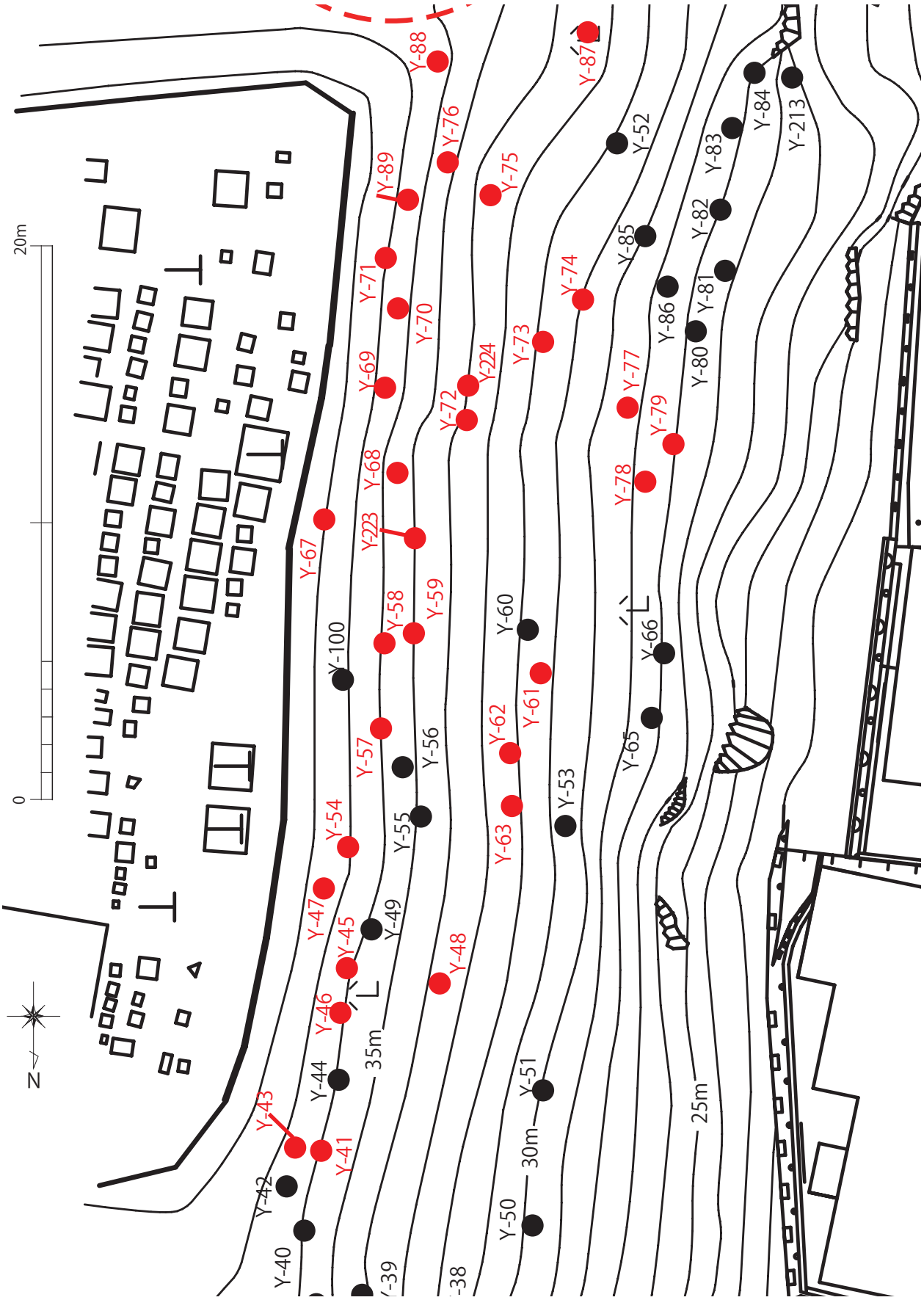
サブトレンチ２は前面に岩盤より崩落した巨岩があり、崩落した隙間に表土等が堆積したものと推定される。丘陵斜面トレンチ４では遺構、遺物は検出されていない。



第 16 図　丘陵斜面トレンチ４実測図（1/60）



第 17 図　調査区周辺の横穴墓分布状況（1/200）前回報告書時点



第 18 図　調査区周辺の横穴墓分布状況（1/200）調査後　赤は確定・黒は未確認

（3）横穴墓（第 17・18図）

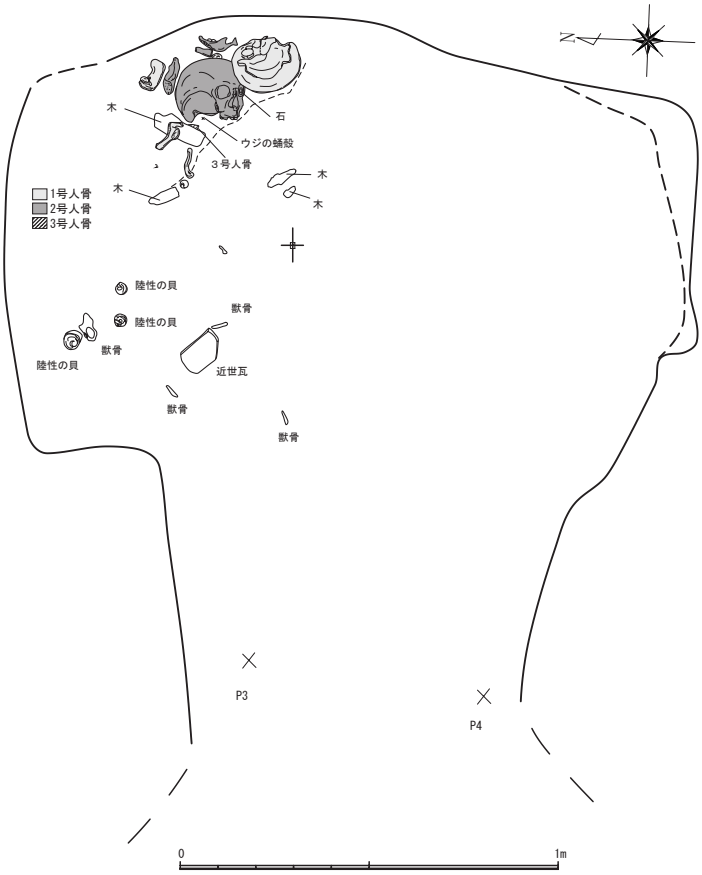
前回の調査時点において今回の調査範囲においては 53 基の横穴墓の存在を推定していた。表土除去後に遺構は位置図との対応作業を行った。結果、痕跡を含め 29 基の横穴墓を確定したが、24 基については確定できていない。また、前回調査時点では確認できなかった箇所で 2 基の横穴墓を新たに確認し計 31 基の横穴墓を検出した。

これは前回の調査時点では表土を除去せず地表面の痕跡をもとに横穴墓を検出した結果であり、今回は表土を除去し地山面の痕跡を基に横穴墓を検出た。今後の調査成果によりさらなる基数の増加や減少が起こる可能性もある。

Y73（図版 1・11、第 18・19 図）

今回の調査で一部内部を調査した唯一の横穴墓である。羨門部に崩落土の塊があり、それを除去し内部を確認した。崩落土により塞がれていたためか、左側壁付近で比較的残りの良い人骨を確認した。調査の性格上床面の精査等は行わなかったが、ただし露出している人骨については、劣化が懸念されるめ図化して取り上げを行うこととした。人骨の図化と取り上げは九州大学の協力により行った。

平面形は略測であるものの、中心部で幅約 1.75 m、長さは玄室約 1.2 m、羨道 0.8m を測る。



第 19 図 Y73 平面図及び人骨出土状況図（1/20） 九州大学作成

遺物（図版 15、第 20 図）

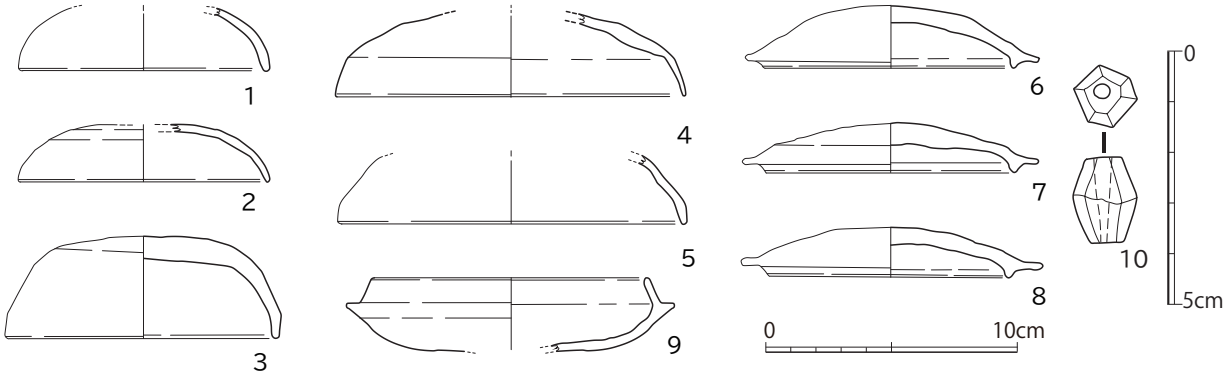
1 ～ 8 は須恵器坏蓋である。1 は体部から口縁部にかけて残存し、復元値で口径は 9.8 ㎝、残存高 2.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後のナデ、体部上半はナデ、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部から口縁にかけては横ナデである。焼成は不良であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰橙褐色を呈する。

2 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 9.8 ㎝、残存高 3.3 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 以上である。内面は天井部では不定方向のナデ、体部から口縁にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面、内面ともに暗灰色を呈する。　3 は墓道から出土し、口径 10.5 ㎝、器高 4.2 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後未調整であり、体部から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、1 ㎜程度の砂粒を多少含み微細砂粒を多く含むためやや粗い。外面、内面ともに暗褐色を呈する。　4 は口縁部から天井部の一部が 1/4 程残存し、口径は復元値で 13.8 ㎝、残存高 3.3 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後未調整であり、体部から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、1 ㎜程度の砂粒を多少含み微細砂粒を多く含むためやや粗い。5 は体部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 13.8 ㎝、残存高 2.7 ㎝を測る。外面、内面ともに確認できる部分では横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに暗灰色を呈する。外面、内面ともに暗褐色を呈する。6 は口径 9.9 ㎝、受部径 11.6 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部下半にかけて不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。返りは短く、三角形状を呈する。焼成はやや不良であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに橙灰褐色を呈し、外面天井部のみ灰色である。色調から見ても焼成温度が低く発色していないと考えられる。7 は口径 9.8 ㎝、受部径 11.8 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部下半にかけて不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。返りは短く、三角形状を呈する。焼成はやや不良であり、胎土は 1 ㎜に満たない砂粒を多く含み、2 ㎜程度の小礫も見られやや粗い。外面、内面ともに褐色を呈する。8 は口径 9.5 ㎝、受部径 12.0 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部下半にかけて不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。返りは短く、三角形状を呈する。焼成はやや不良であり、胎土は微細砂粒を多く含み、3 ～ 5 ㎜の小礫も見られやや粗い。外面、内面ともに灰褐色を呈し、外面はやや色調が暗い。

9 は須恵器坏身片である。底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 10.8 ㎝、受部径 13.0 ㎝、残存高 2.9 ㎝を測る。外面の調整は底部ではヘラ切後のナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面は体部から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は 1 ㎜程度の白色砂粒を含むものの精良である。外面は風化によるものか褐色で、内面は灰色を呈する。

10 は長さ 1.7 ㎝、最大幅 1.2 ㎝を図る水晶製の切子玉である。2 号人骨、頭蓋骨の中より出土している。頭部付近に副葬された玉が土砂の流入に伴い頭蓋骨の中へ入ったものと考えられる。穿孔は

先細りとなり片側穿孔に見えるが、反対側も一部剥離が見られ最終段階で反対側より貫通させたと考えられる。



第 20 図　Y73 出土遺物実測図（1/3・切子玉は 2/3）

その他の横穴墓出土遺物（図版 15・16、第 18・21・22 図）

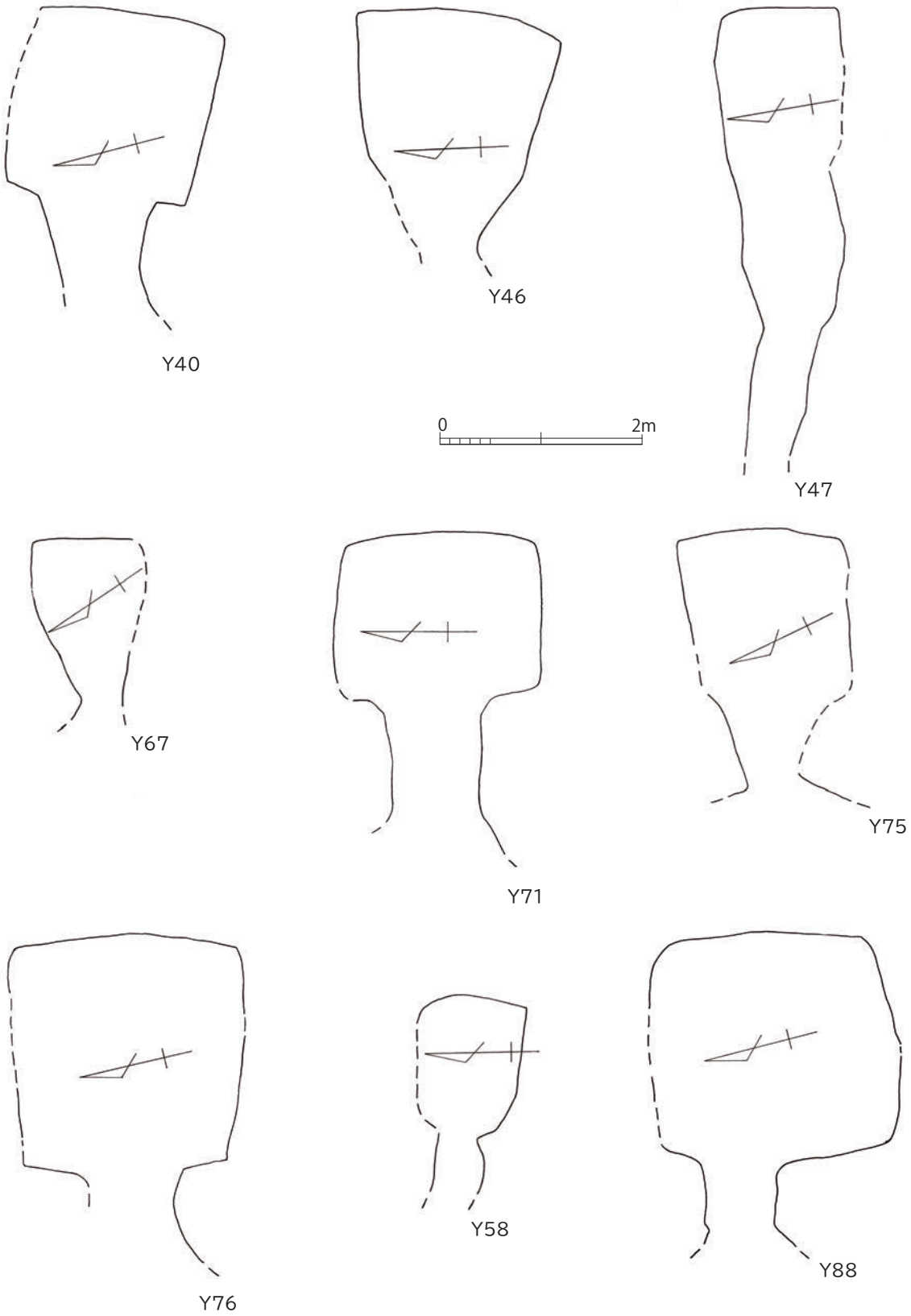
今回確認した横穴墓で出土した遺物である。横穴墓内部の精査は行っていないが、墓道部や羨門部付近で採集した遺物である。参考までに前回調査時の報告書に掲載した横穴平面図（第 21 図）を再掲する。

11 ～ 14 は須恵器坏蓋である。11 は Y68 から出土し、口縁部から体部の一部が 1/5 程残存、口径は復元値で 13.0 ㎝、残存高 3.3 ㎝を測る。外面の調整は体部上半で回転ヘラ削りであり、体部から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 2/3 程度であろう。内面は体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を含むものの精良である。外面、内面ともに暗褐色を呈する。12 は Y70 墓道より出土し、天井部から口縁部にかけて残存、残存部より復元値で残存高 3.3 ㎝を測る。外面の調整は天井部では回転ヘラ削り、体部から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度である。体部下半に 1 本の沈線が巡る。内面は天井部では不定方向のナデ、体部から口縁にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面は黒灰色、内面は暗灰色を呈する。13 は Y68 で出土し、口径 12.2 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部にかけては回転ヘラ削り、口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 2/3 程度である。内面は天井部から体部にかけて不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。内面天井部には一本線のヘラ記号を施す。口縁部は薄く、全体的につくりは良い。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多少含むものの比較的精良である。外面は暗灰褐色、内面は暗褐色を呈する。14 は Y67 から出土し、口径 13.6 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半にかけては回転ヘラ削り、体部下半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/2 程度である。内面は天井部の一部で不定方向のナデ、その他の部分は横ナデである。全体的につくりは厚い。焼成は良好であり、微細砂粒を含むものの胎土は比較的精良である。外面、内面ともに青灰色を呈する。

15 から 22 は須恵器坏身である。15 は Y43 の前面で採集した、体部から口縁部にかけての破片で、残存高 2.2 ㎝を測る。外面、内面ともに残存部の調整は横ナデである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を多く含むものの比較的精良である。外面は暗灰入色で

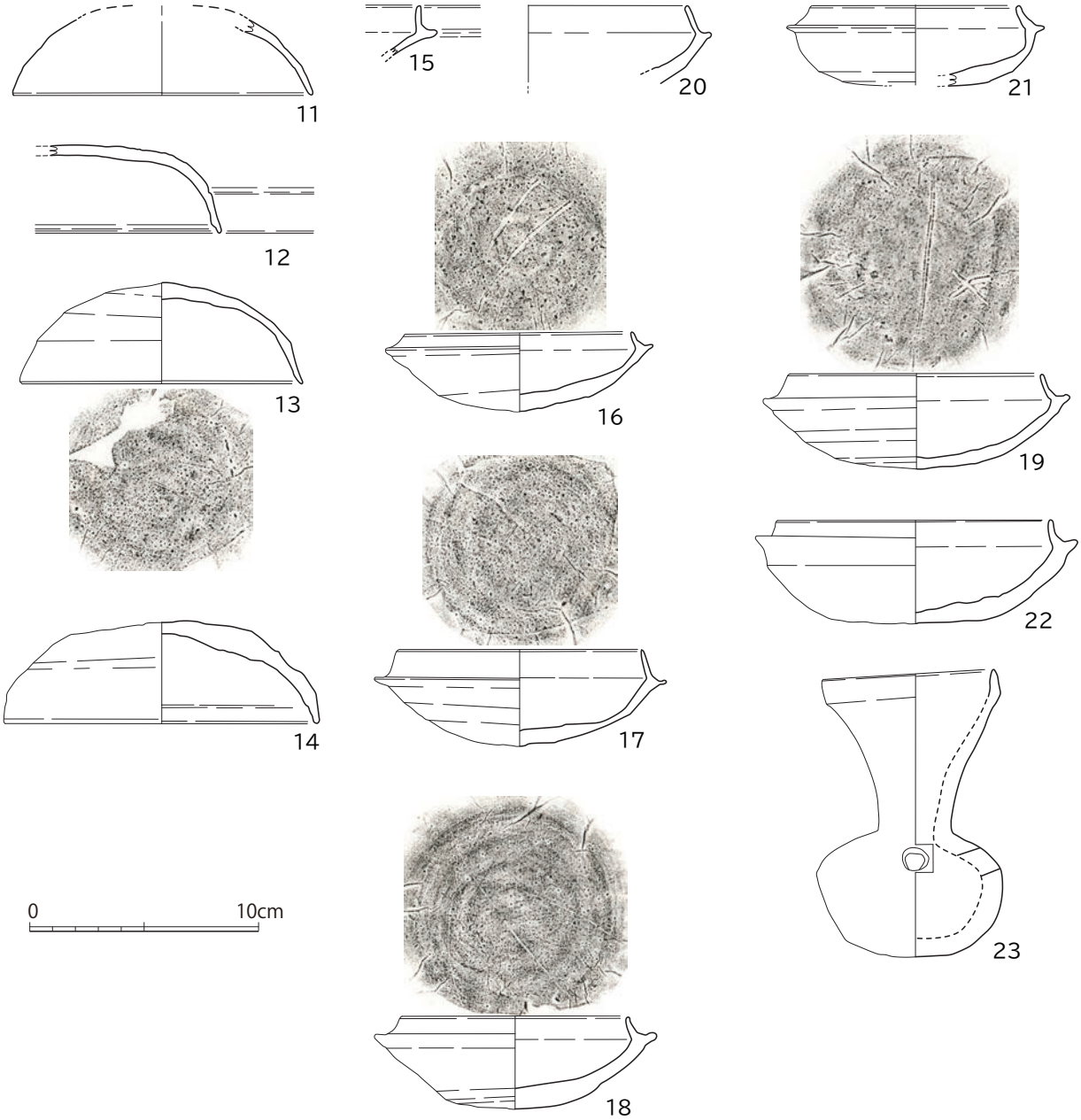
部分的に褐色、内面は暗灰色を呈する。16 はY 46 で出土し、口径 9.9 ㎝、受部径 11.7 ㎝、器高 3.5 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り、体部上半から口縁部にかけて横ナデである。内面は底部から体部にかけて不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。内面底部には二本線のヘラ記号を施す。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに暗灰色で一部灰褐色を呈する。17 は Y68 で出土し、口径 10.6 ㎝、受部径 12.7 ㎝、器高 4.3 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 2/3 程度である。内面は底部から体部下半にかけて不定方向のナデ、体部上半と口縁部は横ナデである。内面底部には一本線のヘラ記号を施す。口縁部は薄く、全体的につくりは良く、13 と似ており、セットになるものと考えられる。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多少含むものの比較的精良である。外面は暗灰色で口縁部は暗灰褐色、内面は暗灰褐色で一部黒灰色を呈する。18 は Y75 付近で出土し、口径 9.9 ㎝、受部径 12.4 ㎝、器高 4.0 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/2 程度である。内面は底部では不定方向のナデ、体部と口縁部は横ナデである。内面底部には鳥足状に広がる 4 本の線でヘラ記号を施す。焼成はやや悪く、胎土は精良である。外面は灰褐色で一部黒灰色、内面は褐色を呈する。19 は Y74 で出土し、口径 11 ㎝、受部径 13.4 ㎝、器高 4.2 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 2/3 以上である。内面は底部から体部下半にかけて不定方向のナデ、体部上半と口縁部は横ナデである。内面底部には一本線と×印のヘラ記号を施す。口縁部は薄く、全体的につくりは良い。焼成は良好であり、胎土は 2 ㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰色で一部褐色を呈する。20 はY68出土の須恵器坏身片である。口縁部から体部かけての一部が 1/4 程残存し、復元値で口径は 13.8 ㎝、受部径 16 ㎝、残存高 3.4 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 2/3 程度であろう。内面は体部と口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を含むものの精良である。外面、内面ともには灰色で一部褐色、外面受部より下部は一部黒灰色を呈する。蓋を重ねて焼成した痕跡であろう。21 は Y67 で出土し、底部から口縁かけて残存し、復元値で口径は 9.0 ㎝、受部径 11.2 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。外面は底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り、体部から口縁にかけて横ナデである。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多少含みやや粗い。外面、内面ともに灰色を呈する。22 は Y67 で出土し、口径 10.9 ㎝、受部径 14.1 ㎝、器高 4.5 ㎝を測る。外面の調整は自然釉が風化により剥げ落ちているため、不明瞭であるが底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/2 程度である。内面は底部は不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。全体的につくりは厚く、14 と似ており、セットになるものと考えられる。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面は暗灰色、一部茶褐色の自然釉がかかり自然釉が風化により剥げ落ちた部分は褐色、内面は青灰色を呈する。

23 はY74出土の須恵器瓲である、焼きひずみが見られるが図化した箇所で口径 7.4 ㎝、器高 12.4 ㎝、胴部最大径 8.1 ㎝を測る。頸部は細く締まり、底部はやや平たくなる。外面頸部から口縁部、内面の確認できる範囲まで横ナデ、外面体部から底部はナデである。焼成は良好であり、胎土



第 21 図　調査区周辺の横穴墓平面図（1/60）前回報告書より転載

は細砂粒を多く含みやや粗い。外面は黒灰色、図化した部分の左半部は自然釉が風化により器壁より剥げ落ち暗灰色、赤褐色を呈する。



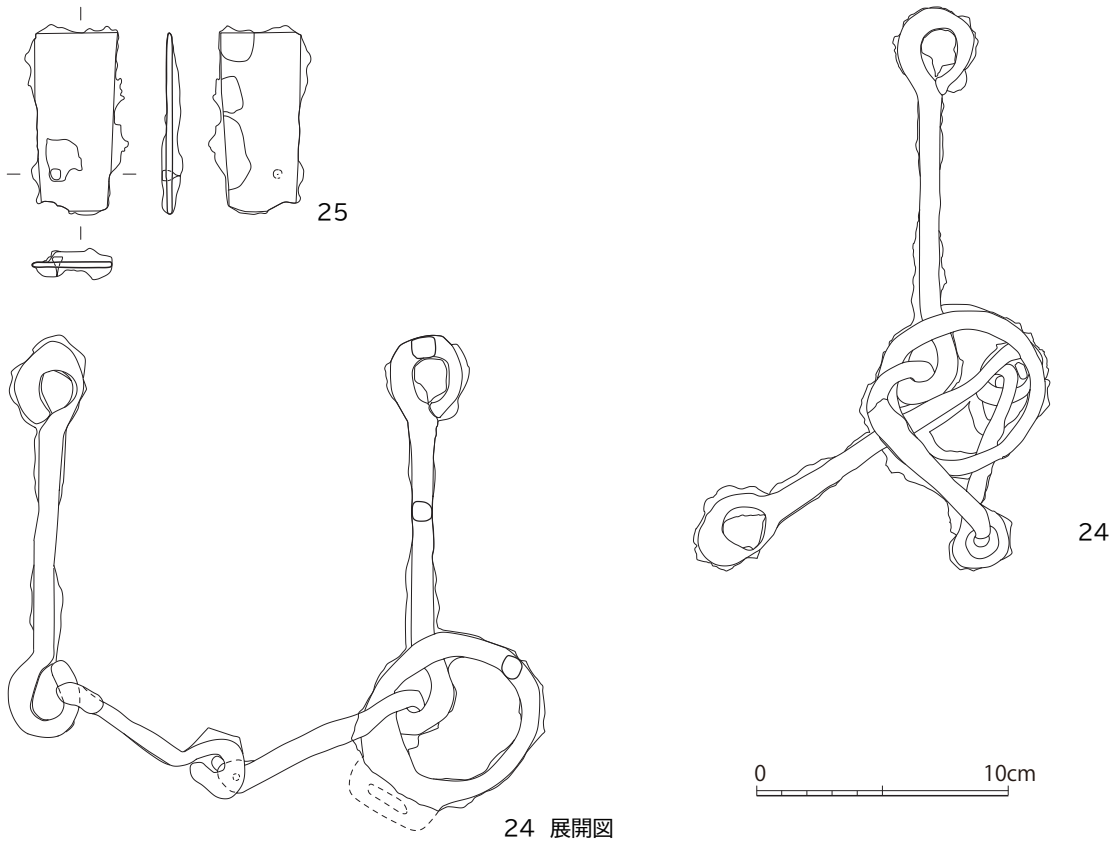
第 22 図　その他の横穴墓出土遺物実測図（1/3）

（4）表土層出土の古墳時代遺物（図版 16 ～ 20、第 23 ～ 28 図）

馬具（図版 16、第 23）

24 は Y63 付近で表採した鉄製素環の轡である。片側の環と立聞は欠失するものの銜、引手まで確認でき残存状況は良い。今回図化できていない環が表採遺物の中に確認でき、轡部分がセットで副葬されていたと考えられる。

25 は幅は約 3.0 ㎝、残存長約 7.0 ㎝を測る鉄製の板状の破片で当初不明金属器としていた。その後の観察で錆化が激しいものの鋲らしきものが 1 箇所確認でき、ほかに轡や前回の調査で無脚の雲珠等も出土していることから馬具の帯金具と考えられる。



第 23 図 表土層出土の古墳時代遺物実測図 1 馬具（1/3）

須恵器・土師器（図版 16 ～ 19、第 24 ～ 27 図）

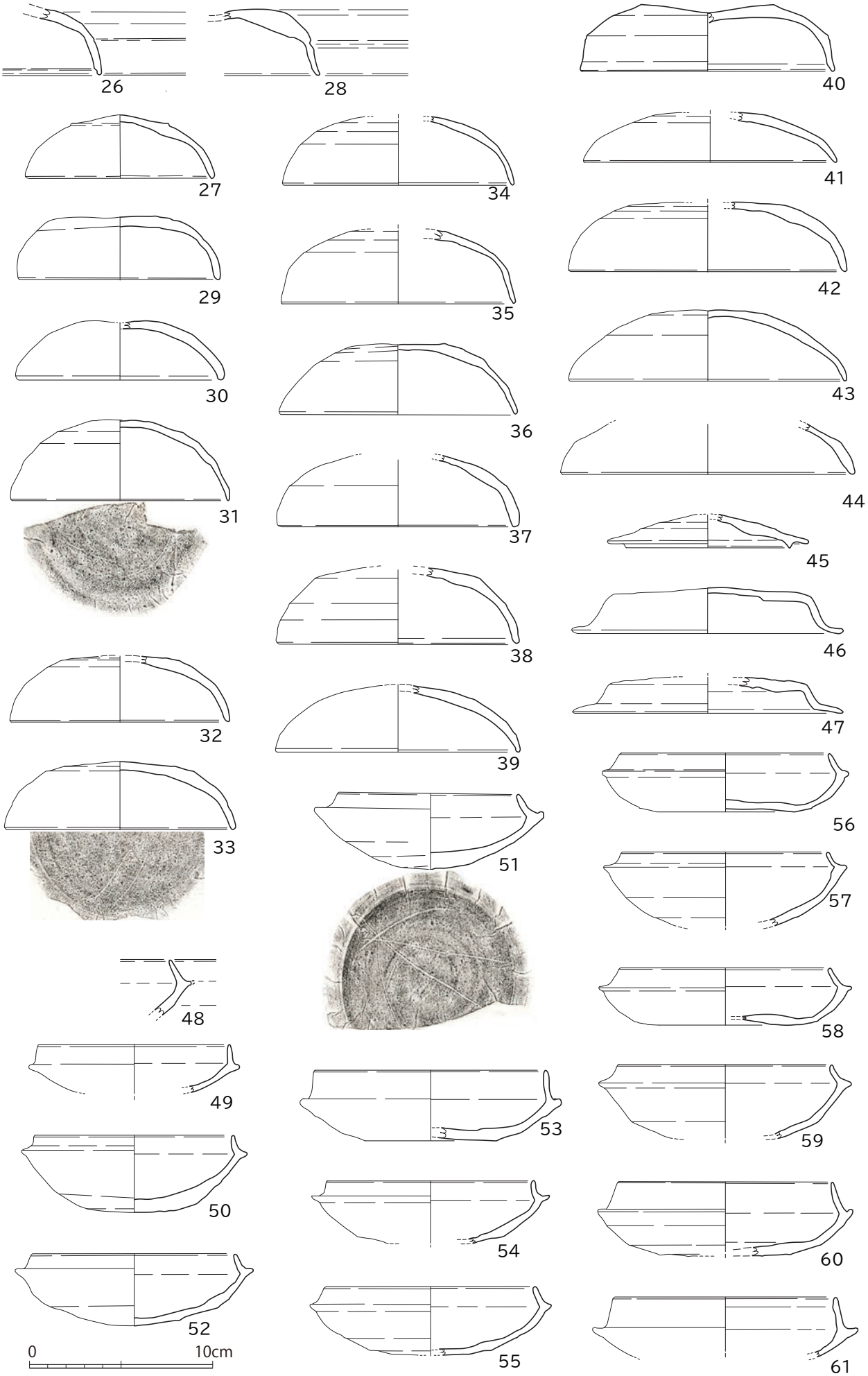
26 ～ 47 は須恵器坏蓋である。26 は口縁部から天井部の一部が残存し、口径は復元値で 10.6 ㎝残存高 3.6 ㎝を測る。外面の調整は天井部で回転ヘラ削り、体部から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 2/3 程度であろう。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面、内面ともに淡灰暗褐色を呈する。27 天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 10.0 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 以上である。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜前後の砂粒を含むものの比較的精良である。外面、内面ともに暗灰色を呈し、外面のほうがやや暗い。28 は天井部から口縁部にかけて 1/2 程残存し、残存部より復元値で口径 10.2 ㎝、器高 3.6 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半にかけては回転ヘラ削り、体部下半から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部上半にかけては不定方向のナデ、体部下半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、1 ㎜前後の白色砂粒を含みやや粗い。外面、内面ともに黒灰色を呈する。形態から坏蓋ではなく、壺等の蓋の可能性もある。29 は残存部より口径は 10.7 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は細砂粒を多く含みやや粗い。外面の一部が淡褐色、その他は外面、内面ともに橙褐色を呈する。30 は残存部より復元値で口径は 11.0 ㎝、残存高 3.2 ㎝を測る。外面の

調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は良好で、胎土は黒色粒を多く含むものの精良である。外面は灰色から部分的に黒灰色、内面は灰色を呈する。31 は残存部より復元値で口径は 11.8 ㎝、残存高 4.4 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 程度であろう。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。内面天井部に×字状の 2 本の沈線で表現されるヘラ記号を施す。焼成はやや不良であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰褐色を呈する。32 は須恵器坏蓋片である。天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 11.8 ㎝、器高 3.6 ㎝を測る。外面の調整は天井部では回転ヘラ削り、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部上半にかけて不定方向のナデ、体部下半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに暗灰色を呈し、外面は一部黒灰色、内面は部分的に褐色を呈する。33 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 12.4 ㎝、器高 3.7 ㎝を測る。外面の調整は天井部では回転ヘラ削り、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、体部下半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面は暗灰色、内面は灰褐色を呈する。34 は須恵器坏蓋片である。天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 12.4 ㎝、残存高 3.7 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 以上である。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は 1 ㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰茶色を呈する。35 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 12.6 ㎝、器高 4.0 ㎝を測る。外面の調整は天井部では回転ヘラ削り、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部上半にかけて不定方向のナデ、体部下半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに暗灰色を呈し、外面は一部黒灰色、内面は部分的に褐色を呈する。36 は口縁部から天井部はほぼ残存するものの口縁部は 1/3 程度しか残存していない。口径は復元値で 12.8 ㎝、残存高 4.3 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半は回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度であろう。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰褐色を呈する。37 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 12.8 ㎝、残存高 3.9 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 以上である。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は不良であり、胎土はやや粗い。外面、内面ともに灰白色を呈する。38 は口縁部から天井部にかけて残存し、口径は復元値で 13.0 ㎝、残存高 4.1 ㎝を測る。外面の調整は天井部で回転ヘラ削り、体部から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度であろう。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。外面、

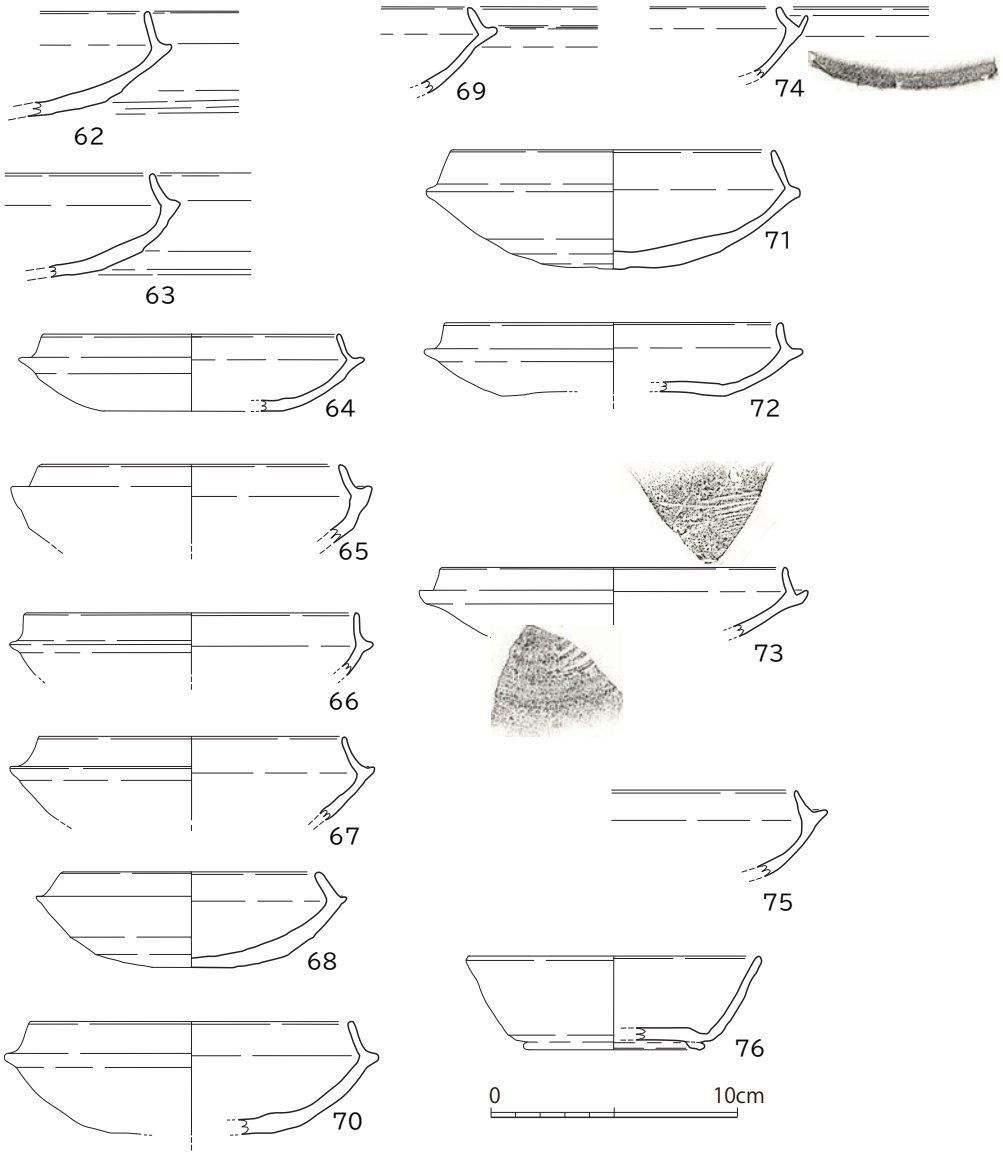
内面ともに暗褐色を呈する。39 は残存部より復元値で口径は 13.2 ㎝、残存高 3.6 ㎝を測る。外面の調整は天井部では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度であろう。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面内面ともに灰褐色を呈する。40 は残存部より復元値で口径は 13.4 ㎝、残存高 3.6 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部にかけては横ナデである。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は細砂粒を多く含みやや粗い。外面は黒灰色、一部が暗灰褐色、内面は暗灰色を呈する。41 は残存部より復元値で口径は 13.6 ㎝、残存高 2.2 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度であろう。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含むも比較的精良である。外面、内面ともに灰褐色を呈する。42 は残存部より復元値で口径は 15.0 ㎝、残存高 3.8 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 程度であろう。内面は天井部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は 1 ～ 2 ㎜程度の小礫と白色の微細砂粒、黒色の微細粒を含みやや粗い。外面の一部黒灰色、ほかは外面内面ともに灰褐色を呈する。43 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 15.0 ㎝、器高 3.9 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部は横ナデである。内面は天井部から体部上半にかけて不定方向のナデ、体部下半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜前後の砂粒を含むものの比較的精良である。外面は暗灰褐色、内面は灰褐色を呈する。44 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 8.0 ㎝、残存高 2.7 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部上半では回転ヘラ削り、体部下半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 以上である。内面は天井部から体部上半では不定方向のナデ、口縁から体部下半にかけては横ナデである。焼成は不良であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰褐色、外面は一部黒灰色を呈する。45 は須恵器坏蓋片である。天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 9.9 ㎝、受部径 11.0 ㎝、器高 1.8 ㎝を測る。外面の調整は天井部から体部中ほどにかけては回転ヘラ削り、体部下半から口縁部は横ナデである。内面は天井部から返りの内側にかけて不定方向のナデ、口縁部から受部は横ナデである。返りは短く、三角形状を呈し、全体的に扁平である。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜前後の砂粒を多く含みやや粗い。外面は暗灰褐色で一部黒灰色、内面は暗灰色を呈する。46 は須恵器坏蓋である。口径 14.3 ㎝、器高 2.5 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後未調整、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部では不定方向のナデ、体部から口縁部にかけては横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は微細砂粒を多く含むものの比較的精良である。外面、内面ともに暗灰色、部分的に灰褐色を呈する。47 は天井部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径 14.6 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。外面の調整は天井部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面は天井部中心付近で不定方向のナデ、天井部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面は黒灰色、内面は灰褐色を呈

する。形態から坏蓋ではなく、壺等の蓋の可能性もある。

48 ～ 75 は須恵器の坏身である。48 は体部から口縁にかけて残存し、残存高 3.9 ㎝を測る。外面、内面ともには体部から口縁にかけて横ナデである。焼成は良好であり、胎土は 1 ㎜前後の白色砂粒を多く含みやや粗い。外面は灰色から灰褐色、内面は灰褐色を呈する。49 は体部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 10.4 ㎝、受部径 11.6 ㎝、残存高 2.6 ㎝を測る。外面、内面ともに体部から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は表面に 1 ㎜程度の白色砂粒が目立ちやや粗い。外面、内面ともに淡灰褐色を呈する。50 は口縁部を一部欠失するがほぼ完存する。口径は 10.8 ㎝、受部径 12.4 ㎝、残存高 4.2 ㎝を測る。外面の調整は底部では回転ヘラ削り、体部から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度である。内面は底部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を多く含みやや粗い。外面は暗灰色、内面は青灰色、一部褐色を呈する。51 は口縁部から底部の 2/3 程残存し、口径は 10.75 ㎝、受部径 12.5 ㎝、器高 4.15 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 2/3 程度である。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。内面底部には鳥足状に広がる 4 本の線でヘラ記号を施す。焼成は比較的良好であり、胎土は黒色の砂粒を多く含むも比較的精良である。外面は灰色、内面は灰褐色を呈する。52 は口径 11.0 ㎝、受部径 13.0 ㎝、器高 3.9 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半はヘラ切後ナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。砂粒が流れておらず回転ヘラ削りは施されていない。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。全体的につくりは薄く、扁平である。焼成は良好であり、胎土は 3 ㎜程度の砂粒を含みやや粗い。外面は灰色、内面は暗灰色を呈する。53 は底部から口縁部にかけて残存し、復元値で口径は 12.6 ㎝、受部径 14.2 ㎝、残存高 4.8 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/3 程度であろう。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成は内面の焼成が悪くやや不良であり、胎土は精良である。外面は暗灰色で、内面は褐色を呈する。54 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.2 ㎝、受部径 13.0 ㎝、残存高 3.4 ㎝を測る。外面は底部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁にかけて横ナデである。内面は確認できる範囲では横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに黒灰色を呈する。55 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.4 ㎝、受部径 13.2、残存高 3.7 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。残存部分から見て回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/2 程度であろう。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。内面底部に二本の並行の沈線で表現されるヘラ記号を施す。焼成は良好であり、胎土は比較的精良である。外面は暗灰色で部分的に暗灰褐色、内面は灰色、部分的に灰褐色を呈する。立ち上がり部分がやや焼成が悪く、重ね焼きの痕跡であろうか。56 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.4 ㎝、受部径 13.4 ㎝、残存高 3.2 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。残存部分から見て回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/2 程度であろう。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面底部には当て具の痕跡が残る。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含み 5 ㎜程度の小礫を少量含みやや粗い。外面は



第 24 図　表土層出土の古墳時代遺物実測図 2（須恵器 1）（1/3）



第 25 図　表土層出土の古墳時代遺物実測図 3 （須恵器 2）(1/3)

灰褐色で部分的に暗灰色、内面は灰褐色を呈する。57 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.2 ㎝、受部径 13.4 ㎝、残存高 4.0 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を含むものの比較的精良である。外面は、内面ともに暗灰褐色を呈する。58 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.4 ㎝、受部径 13.8 ㎝、残存高 3.1 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。残存部分から見て回転ヘラ削りの範囲は外面の 2/3 程度であろう。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。内面底部には当て具の痕跡が残る。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含むものの比較的精良である。外面内面ともに暗灰褐色を呈する。59 は体部下半から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.6 ㎝、受部径 14.0 ㎝、残存高 4.0 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。残存部分から見て回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/3 から 1/2 程度であろう。内面は体部下半では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含み 5 ㎜程度の小礫を少量含みやや粗い。外面は暗灰色、内面は灰褐色を

呈する。60 は口縁部から体部の一部にかけて 1/4 程残存し、復元値で口径は 11.8 ㎝、受部径 14 ㎝、残存高 4.0 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は外面の 1/3 程度である。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。口縁部は薄く、全体的につくりは良い。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面は黒灰色、内面は灰色を呈し、内外面ともに一部褐色である。61 は口縁部から体部にかけて残存し、復元値で口径は 12.0 ㎝、受部径 14.4 ㎝、残存高 3.3 ㎝を測る。外面の調整は体部上半から口縁部は横ナデである。内面は体部上半から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は精良である。外面、内面ともに暗灰色を呈する。62 は口縁部から底部にかけて残存し、復元値で口径は 10.6 ㎝、受部径 12.6 ㎝、器高 4.3 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 3/4 程度である。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は精良である。外面は黒灰色で一部灰褐色、内面は灰褐色を呈する。63 は口縁部から底部にかけて残存し、復元値で口径は 12.0 ㎝、受部径 14.2 ㎝、残存高 4.2 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半から口縁部は横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 2/3 程度である。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は 3 ㎜程度の黒色粒を含むものの精良である。外面は黒灰色で、内面は暗灰褐色を呈する。64 は底部から口縁にかて残存し、復元値で口径は 11.4 ㎝、受部径 13.2 ㎝、残存高 3.7 ㎝を測る。外面は底部ではヘラ切後ナデ、体部から口縁にかけて横ナデである。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面は自然釉がかかり風化し自然釉が剥げ落ちた部分では灰色で一部黒灰色、底部は灰褐色、内面は暗灰褐色を呈する。65 は体部上半から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 12.2 ㎝、受部径 14.4 ㎝、残存高 3.2 ㎝を測る。残存部では外面、内面ともに調整は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面、内面ともに暗灰色を呈する。66 は体部から口縁が残存し、復元値で口径は 13.4 ㎝、受部径 6.8 ㎝、残存高 2.5 ㎝を測る。外面は体部から口縁にかけて横ナデである。内面は体部では不定方向のナデ、口縁部は横ナデで調整である。焼成はやや不良であり、胎土は比較的精良である。外面、内面ともに灰褐色、外面は部分的に黒灰色を呈する。67 は体部から口縁が残存し、復元値で口径は 12.4 ㎝、受部径 14.8 ㎝、残存高 .32 ㎝を測る。残存部では外面、内面ともに調整は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は黒色と白色の微細砂粒を含むものの精良である。外面は灰色で部分的に黒灰色、内面は灰褐色を呈する。68 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 10.4 ㎝、受部径 12.6 ㎝、残存高 3.9 ㎝を測る。外面は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 2/3 程度であろう。内面は底部から体部下半では不定方向のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。焼成は不良であり、胎土は 1 ㎜前後の砂粒を多く含みやや粗い。外面は、内面ともに灰褐色、外面は部分的に黒灰色を呈する。69 は口縁部から体部にかけて残存し、復元値で口径は 12.6 ㎝、受部径 14.8 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。外面の調整は体部下半ではヘラ切後のナデ、体部上半から口縁部は横ナデである。内面は体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は精良である。外面は灰褐色、内面は暗灰色を呈する。70 は底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 13.0 ㎝、受部径 15.2、残存高 4.6 ㎝を測る。

外面は底部では回転ヘラ削り、体部から口縁にかけて横ナデである。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は１～２㎜の砂粒を多少含み、白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面は暗灰褐色、内面は灰褐色を呈する。71 は底部から口縁部にかけて残存し、残存部より復元値で口径は 13.0 ㎝、受部径 15.2 ㎝、残存高 4.8 ㎝を測る。外面の調整は底部から体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁部にかけては横ナデである。回転ヘラ削りの範囲は残存部分から見て外面の 1/2 程度である。内面は底部では不定方向のナデ、口縁から体部にかけては横ナデである。焼成は良好であり、胎土は５㎜前後の小礫を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰色を呈する。72 は体部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 13.6 ㎝、受部径 15.7 ㎝、残存高 3.0 ㎝を測る。外面は底部にはタタキ痕が残り、体部から口縁にかけて横ナデである。内面は底部には当て具痕が残り、体部から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面は灰褐色で部分的に暗灰色、内面は暗灰色から灰褐色を呈する。73 は体部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 14.0 ㎝、受部径 15.8 ㎝、残存高 2.8 ㎝を測る。外面は体部から口縁にかけて横ナデである。内面は体部では不定方向のナデ、口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は比較的精良である。外面、内面ともに淡灰褐色、外面は部分的に黒灰色を呈する。74 は体部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 14.0 ㎝、受部径 16.2 ㎝、残存高 2.9 ㎝を測る。外面、内面ともに体部から口縁部は横ナデである。受部外面に３本セットのカキメ状の文様を施す。焼成はやや不良であり、胎土は１㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともには灰褐色を呈する。75 は体部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 15.0 ㎝、受部径 17.6 ㎝、残存高 3.5 ㎝を測る。外面は体部下半では回転ヘラ削り、体部上半から口縁にかけて横ナデである。内面は体部から口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は１～２㎜の小礫を少量含むものの比較的精良である。外面、内面ともには暗灰色を呈し、部分的に黒灰色となる。

76 は高台付の須恵器坏身片である。底部から口縁にかけて残存し、復元値で口径は 11.8 ㎝、高台径 6.8 ㎝、残存高 3.9 ㎝を測る。外面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部にかけて横ナデである。高台は貼り付け、その後貼り付け痕をナデ消す。内面は底部では不定方向のナデ、体部から口縁部は横ナデである。焼成はやや不良であり、胎土は白色の細砂粒を多く含みやや粗い。外面は底部付近では暗灰色、体部から口縁にかけては灰褐色、内面は灰色を呈する。

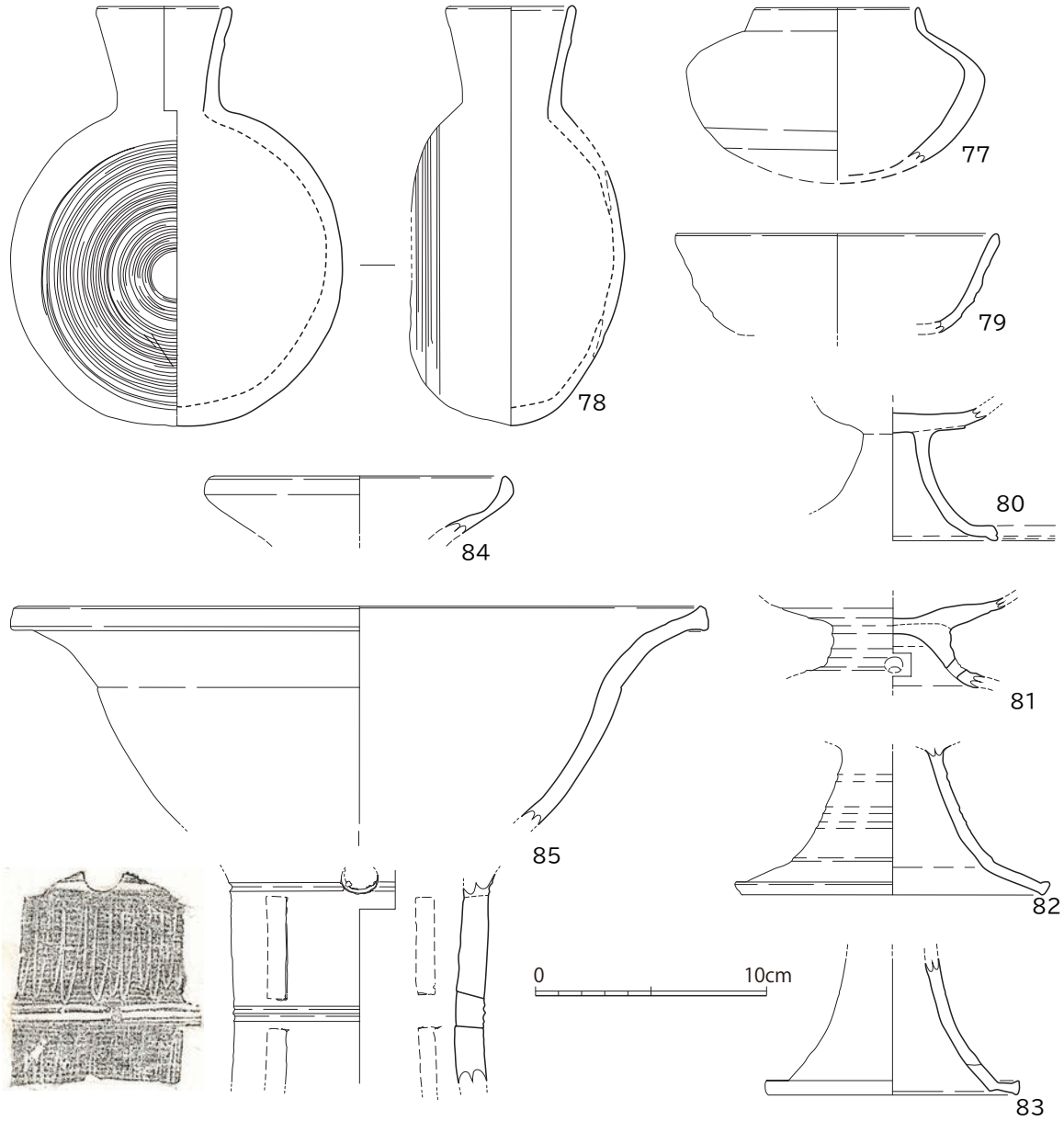
77 は須恵器短頸壺である。底部を欠失するものの残存状態は良く、口径 7.2 ㎝、残存高 7.2 ㎝、胴部径 12.9 ㎝を測る。外面の調整は体部下半まで回転ヘラ削り、内面は底部から胴部は不定方向のナデ、肩部と口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は１～２㎜程度の砂粒を多少含みやや粗い。外面、内面ともに暗灰色を呈する。

78 は須恵器提瓶である、焼きひずみが見られるが口径 5.2 ～ 5.6 ㎝、器高 18.1 ㎝、胴部最大径 14.3 ㎝を測る。頸部はやや偏りが見られ、胴部の中心よりずれる。外面頸部から口縁部、内面の確認できる範囲まで横ナデ、外面体部から底部はカキメ調整である。焼成は良好であり、胎土は黒色と白色の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに灰色を呈し、やや褐色を呈する。

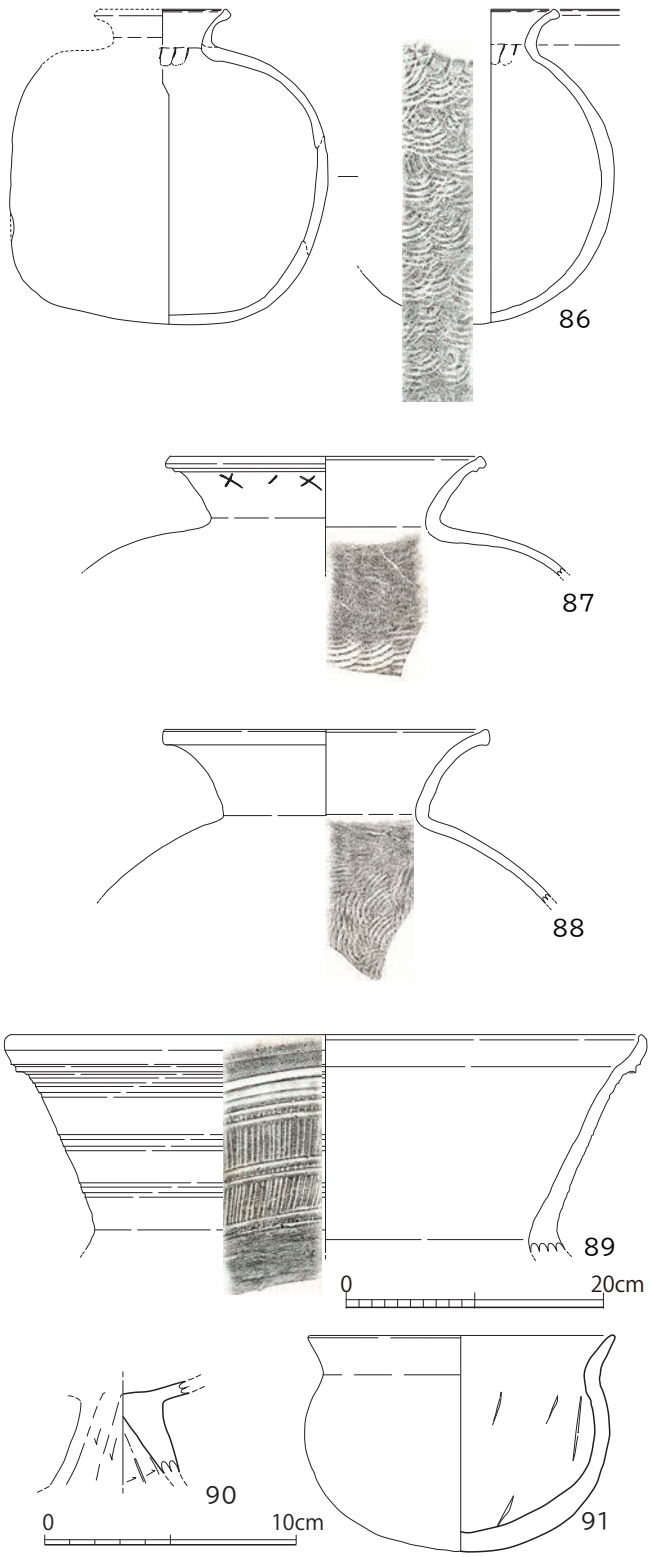
79 は須恵器無蓋高坏の坏身片である。残存部分から復元値で口径 13.8 ㎝、残存高 4.2 ㎝を測る。復元値より比較的大形になると考えられ、長脚の高坏であろう。調整は確認できる部分では外面、内面ともに横ナデである。焼成は良好であり、胎土は黒色粒を若干含むものの精良である。外面は暗

灰色で部分的に黒灰色、内面は暗灰色を呈する。

80 ～ 83 は須恵器の高坏である。80 は坏部の下部から脚部にかけての破片である、残存部分から復元値で底径 8.8 ㎝、残存高 4.7 ㎝測る。調整は確認できる部分では外面、内面ともにナデである。坏部と脚部の境には接合痕が残る。焼成はやや不良であり、胎土は黒色の粒が目立つものの比較的精良である。外、内面ともに白灰色を呈する。81 は脚部片である。脚部の上部と坏部の底面にかけて残存し、残存部より残存高 3.9 ㎝を測る。外面の調整は坏部底面では回転ヘラ削り、その他の部分は横ナデである。内面は残存部では横ナデである。焼成は良好であり、白色の微細砂粒を多少含むも比較的精良である。外面、内面ともに暗灰色を呈する。82 は脚部片である。脚部が残存し、残存部より復元値で底径 13.0 ㎝、器高 3.9 ㎝を測る。外面、内面ともに残存部分では横ナデを施す。焼成はやや不良であり、白色の微細砂粒を含むも精良である。外面、内面ともに灰褐色を呈する。83 は脚部片である、残存部分から復元値で底径 10.8 ㎝、残存高 5.9 ㎝を測る。復元値より考えると、長脚の高坏であろう。調整は確認できる部分では外面、内面ともに横ナデである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒が目立つものの比較的精良である。外面、内面ともに黒灰色を呈する。



第 26 図　表土層出土の古墳時代遺物実測図 4（須恵器 3）(1/3)



第 27 図　表土層出土の古墳時代遺物実測図 5
（須恵器 4・土師器 1）（1/6・1/3）

84 は鉢形土器である。残存部より復元値で口径 12.6 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。焼成はやや不良であり、胎土は精良である。外面、内面ともに灰褐色を呈する。

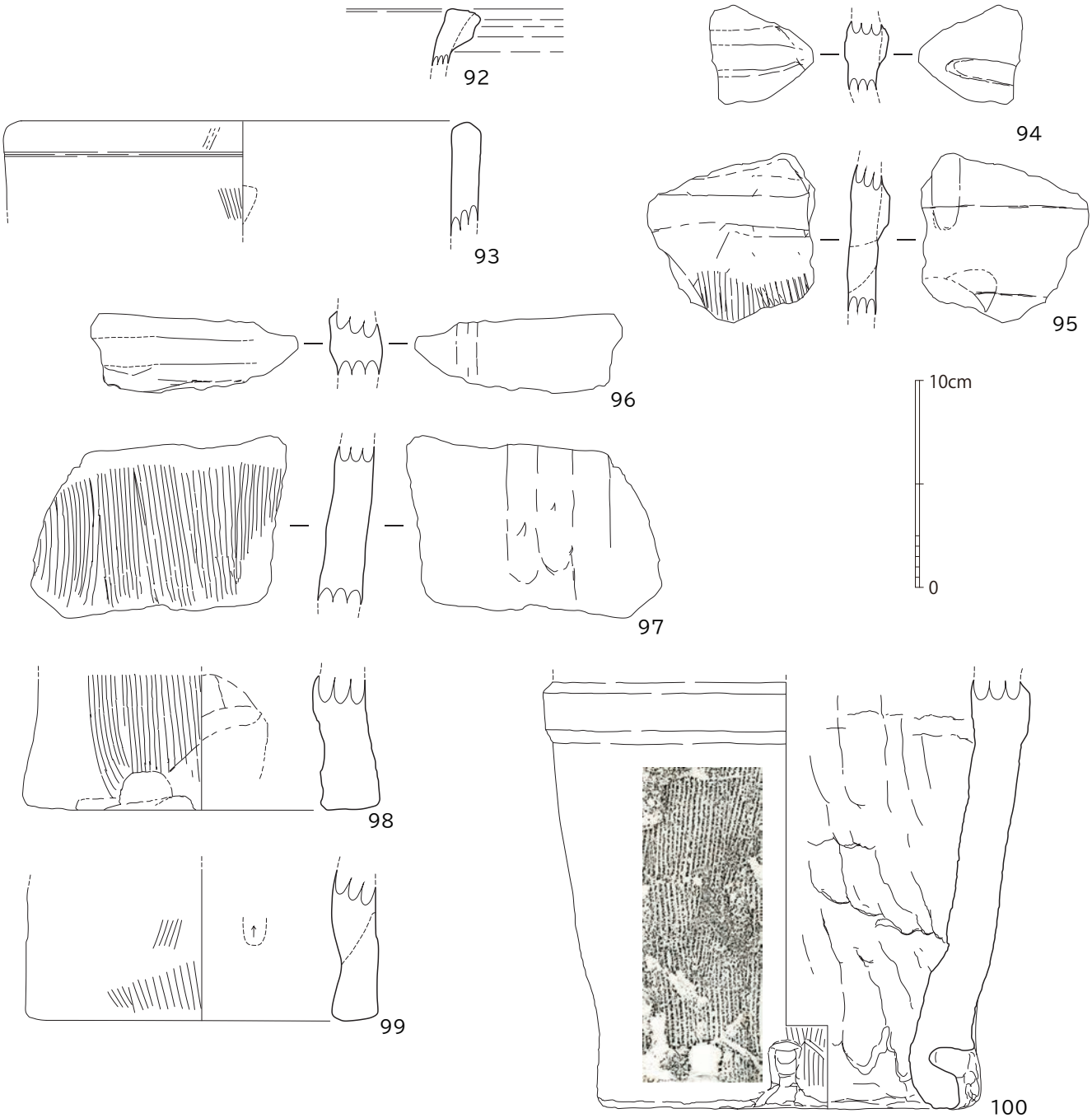
85 は須恵器器台の坏部と脚部の破片である。坏部は体部から口縁部にかけての破片で坏部の 1/3 ほど残存する。復元値で口径 29.4 ㎝、残存高 9.4 ㎝である。外面の調整は体部では格子状のタタキ、口縁部は横ナデ、内面は体部では当て具の痕跡を丁寧にナデ消し、口縁部では横ナデを施す。脚部は残存高 9.0 ㎝、残存部の復元径 10.9 ㎝を測る。2 段の長方形透かし孔、接合部付近に円形の透かし孔が残る。調整は粗いカキメ調整を施し、上部には波状文を施す。坏部、脚部ともに焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含み小礫も少量含むためやや粗い。坏部では外面は黒灰色、内面は暗灰色、脚部では内外面ともに黒灰色を呈する。

86 は須恵器横瓶である。口縁部と体部を欠失するものの、全体の 1/2 以上残存する。残存部より復元値で口径は 10.0 ㎝、残存高 24.5 ㎝を測る。外面の調整は口縁部では横ナデ、体部はタタキ整形後、浅いカキメを施す。底部付近はタタキの痕跡をナデ消している。内面は口縁部で横ナデ、体部はタタキの当て具痕が残る。頸部とタブの境目には接合後の整形であろうかナデ状の痕跡が確認できる。焼成は良好であり、胎土はやや粗い。外面は暗灰色で一部黒灰色、内面は青灰色を呈する。

87 から 89 は須恵器甕である。87 は須恵器甕の口縁部片である。残存部より復元値で口径は 24.0 ㎝、器高 9.3 ㎝を測る。外面は体部ではタタキ、頸部から口縁部は横ナデ、内面の口縁部から頸部ではナデ、体部には当て具痕が残る。焼成は良好であり、1 から 2 ㎜の白色の砂粒を含むも比較的精良である。外面、内面ともに黒灰色を呈する。88 は須恵器甕の口縁部片である。残存部より復元値で口径は 25.0 ㎝、器高 13.5 ㎝を測る。外面は体部ではタタキ、頸部か

ら口縁部は横ナデ、内面の口縁部から頸部ではナデ、体部には当て具痕が残る。焼成は良好であり、微細砂粒を多く含むも比較的精良である。外面は頸部から口縁部では暗灰褐色、体部には茶褐色の自然釉がかかり自然釉がはげた部分は灰褐色、内面は口縁部から頸部では茶褐色、体部は灰褐色を呈する。89 は須恵器甕の口縁部片である。残存部より復元値で口径は 49.0 ㎝、器高 17.0 ㎝を測る。外面は 2 段の櫛描きによる斜文、頸部下部にはカキメ調整を施し、ほかの部分は横ナデである。内面は残存部では横ナデである。焼成は不良であり、小礫を多少含みやや粗い。外面は暗灰褐色、内面は灰茶褐色を呈する。

90 は土師器の高坏脚部片である。口径は残存高 4.1 ㎝を測る。外面、内面ともに調整はケズリである。焼成は良好であり、胎土は白色の微細砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに橙色を呈する。



第 28 図　表土層出土の遺物実測図 6（埴輪）(1/3)

91は土師器の壺である。底部は丸底であり、口縁部を一部欠失するものの残存状態は良い。口径は復元値で12.1㎝器高8.4㎝、胴部最大径12.1㎝を測る。外面の調整は底部から体部にかけてケズリ、口縁部は横ナデである。内面は底部から体部にかけてケズリ、口縁部は横ナデである。焼成は良好であり、胎土は1㎜程度の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに橙褐色を呈する。

埴輪（図版20、第28図）

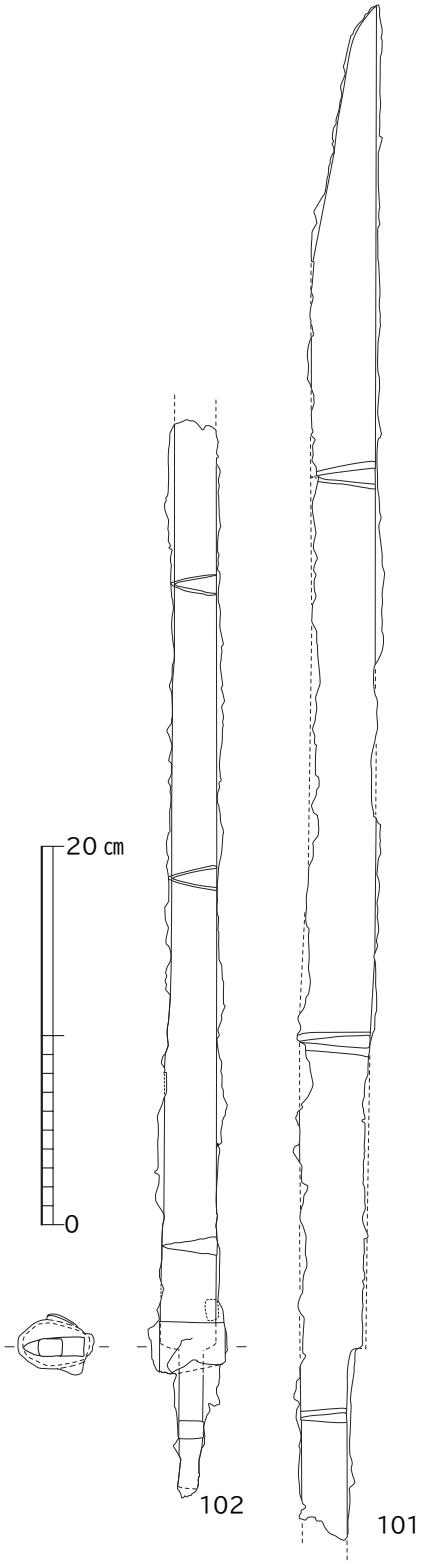
92～100は埴輪片である。98～100は底部片、92・93は口縁部片、ほかはすべて体部片である。以前の調査の際に墳丘9付近で採取した円筒埴輪と同様の型式のものと考えられるが、100のみ明らかにつくりが異なり、器壁が厚く、底径は17.2㎝であり、1段目の突帯まで17.4㎝を測る。調整は共通して、外面は縦方向の粗いハケメ、突帯はナデを行い、貼り付け後に上下接合部に横ナデを施す。内面は確認出来るものでは縦方向の指ナデの痕跡が残る。

（5）城山横穴群採集の古墳時代遺物（図版20、第29図）

今回紹介する2点の資料は、かつて地元中学校の郷土クラブが発見し、九州歴史資料館に処理を依頼していたものである。当時の発見ものの方より話を聞くことができ、九州歴史資料館で現物を確認できたため掲載した。ラベルには方城町城山古墳との記載があったが、これは持ち込んだ方が方城中学校の教員であったためと考えられる。

101は残存長81.5㎝、刃長71㎝の大刀である。茎の一部を欠失するが残存状況は良い。102は残存長58.7㎝を図る鉄刀である。切先と茎の一部を欠失する。鏃部分が残存する。鏃付近には有機質らしきものが付着するようにも見えるが断定はできない。

2点とも錆化が激しく、目釘等は確認できない。



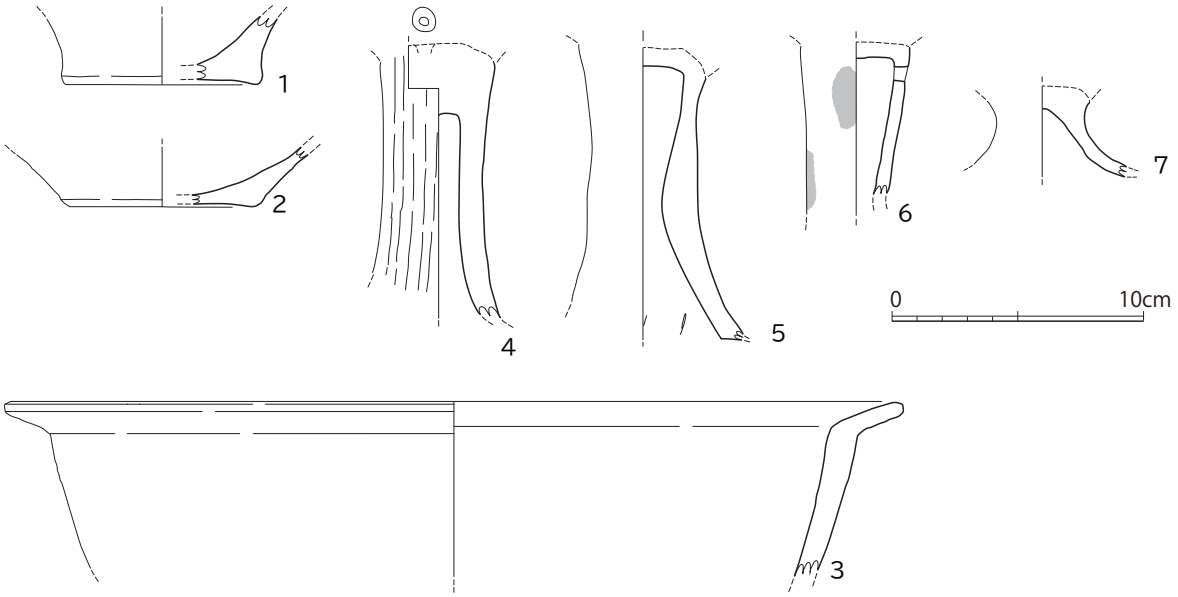
第29図
城山横穴群採集の古墳時代遺物（1/4）

（6）表土層出土の弥生土器（図版 20、第 30 図）

1、2は弥生土器の底部片である。1は甕の底部であろう。復元値で底径7.3㎝、残存高2.7㎝を測る。調整は外面、内面ともにナデを施す。焼成はやや不良であり、胎土は1㎜前後の砂粒を多く含みやや粗い。外面、内面ともに橙褐色を呈する。2は壺の底部であろう。復元値で底径 9.4 ㎝、残存高 2.4 ㎝を測る。調整は外面、内面ともにナデを施す。焼成は良好であり、胎土は1㎜前後の砂粒を多く含みやや粗い。外面は灰黄色、内面は橙褐色を呈する。外面、内面ともにすすが付着し一部黒灰色となる。1、2ともに底部外面中央がへこみ上げ底状となる。

3は鉢の体部上半から口縁部の破片であろう。復元値で口径 35.8 ㎝、残存高 6.9 ㎝を測る。調整は外面、内面ともにナデ、外面の体部はハケメ調整を施す。焼成は良好であり、胎土は1～2㎜前後の砂粒を多く含みやや粗い。外面は灰黄色、内面は橙褐色、一部灰黄色を呈する。

4～7は弥生土器の高坏脚部片である。4は残存高 10.9 ㎝、5は残存高 12.0 ㎝、6は残存高 6.9 ㎝、7は残存高 3.6 ㎝を測る。調整は外面、内面の確認できる部分はほぼケズリである。5（弥⑦）の接合部付近と7の脚部内面ではナデが残る。4の焼成は良好であり、胎土は雲母片が多く見られるが比較的精良である。外面、内面ともに橙褐色、外面の一部はすすが付着し一部黒灰色を呈する。脚部と坏部の接合部には焼成前に施された穿孔がある。5の焼成は良好であり、胎土は1～2㎜の白色砂粒を多量に含みやや粗い。外面、内面ともに橙褐色を呈する。6の焼成は良好であり、胎土は精良である。外面、内面ともに黄白色を呈する。焼成前に施された、外面から内面へ貫通する穿孔がある。外面に赤色顔料が残ることから祭祀用の可能性もある。7の焼成は良好であり、胎土は微細砂粒を含むものの比較的精良である。外面、内面ともに灰橙色を呈する。4、5、7に関しては接合部の痕跡も確認でき高坏で間違いないと思われるが、6に関しては現状で高坏と判断したものの、脚部上端は丁寧に仕上げられ、単体で完結する印象も受ける。



第 30 図　表土層出土の弥生土器実測図（1/3）

（7）表土層出土の中世遺物（図版 21 ～ 26、第 31 ～ 36 図）

表土層に含まれていた遺物を洗浄後、横穴墓に関連する古墳時代以前のものを除いた古代以後の遺物はパンコンテナ 30 箱、総重量で 185 kgに達する。上部にある近世墓地に伴う可能性が高い近現代の遺物は 5.3 kgで一部ガラス瓶を含む。また石器、石製品は約 1 kgである。土器類約 178 kgの内訳は、古代末～中世に含まれる土師器（127.3 kg）、瓦器・須恵質（40.9 kg）、磁器（8.7 kg）、陶器（1.1 kg）である。このうち、磁器・陶器以外で口縁部などの特徴からで器種が判断できたものは、瓦器椀 3.2 kg、瓦器小皿 1.2kg、土師器坏 24.3 kg、土師器小皿 10.8 kgなどである。

なお、小皿以外に完形資料はないが、完形に近い資料からみて白磁碗は 300g 前後、白磁皿は 100g 前後、瓦器椀は 250 ～ 350g、土師器坏は 200g 前後、瓦器・土師器小皿は 60g 前後である。中世期の曲輪と考えられる平坦面と堀切が上部にあるため、これらの遺物は曲輪から招来したと考えられる。

磁器（図版 21 ～ 23、第 31・32 図）

白磁碗、小碗、皿、同安窯系・龍泉窯系青磁碗、陶器盤などの器種があり、破片資料の量では白磁碗が目立つ。器種分類は大宰府出土土器の分類に従った。

白磁碗Ⅳ－ 1a 類（1 ～ 4） わずかに外底面が凹む厚い底部から直線的に口縁部が開き、口縁部が外膨らみになるもの。内底面に低い段がある。復元口径 15.0 ～ 16.5 ㎝、器高 6.4 ～ 6.5 ㎝、高台外径 6.0 ～ 7.0 ㎝の大きさ。3 はやや黄色味のある灰白色だが他は灰白色の胎土で、淡灰色の釉が掛かり外底部は露胎である。なお図示しないがこれ以外に 10 個体以上の口縁部破片がある。

白磁碗Ｖ－ 4a 類（5 ～ 8） 高めの高台からやや内湾気味に口縁部が開き、口縁端部が外反して内底部に低い段がある。灰白色の胎土で淡い灰白色の釉が掛かり、外底部は露胎である。5 ～ 7 は復元口径 16.2 ～ 16.6 ㎝、器高 6.0 ㎝前後で、高台外径は 5・6 が約 6.0 ㎝に比して 7 では 5.0 ㎝弱と小さく高台が高めである。また 8 は口径 18.0 ㎝、器高 6.8 ㎝、高台外径 6.4 ㎝の大きさ。

白磁碗Ｖ－ 4c 類（9） 底部を欠くが内湾気味に口縁部が開き口唇部は外反する。内面では内底部に低い段があり口縁部下に巡る沈線との間に櫛目文様が、体部外面に縦方向の沈線文様がある。淡い灰白色の胎土で釉も淡い灰白色を呈する。復元口径 16.5 ㎝の大きさ。

なお、図示しない資料でＶ－ 4 類とみられる口縁部破片が 10 余個体、Ｖ－4b 類に分類できる底部破片が2個体分ある。

白磁碗Ⅶ－ b 類（10） 底部破片で、高台から内湾気味に体部が開く。内底見込みに直径約 3 ㎝の沈線がありその上方に櫛目文様が配されている。灰白色の胎土で灰白色の釉が掛かり、外底部は露胎。高台外径 6.0 ㎝の大きさ。

白磁碗Ⅷ－ 2 類（11 ～ 15） 高台から直線的に口縁部が開く器形で、口径 14.7 ～ 16.0 ㎝、器高 5.4 ～ 6.0 ㎝のやや小振りな碗である。灰白色の胎土で灰白色の釉が掛かり、外底部は露胎。内底面で蛇の目状の釉掻き取りがある。

なお、図示しない資料でⅧ－2類の底部破片と、内底部に段のないⅧ－1類の底部破片も各々2個体分あり、内面に縦白堆線がみられるⅧ－4類が1点ある。

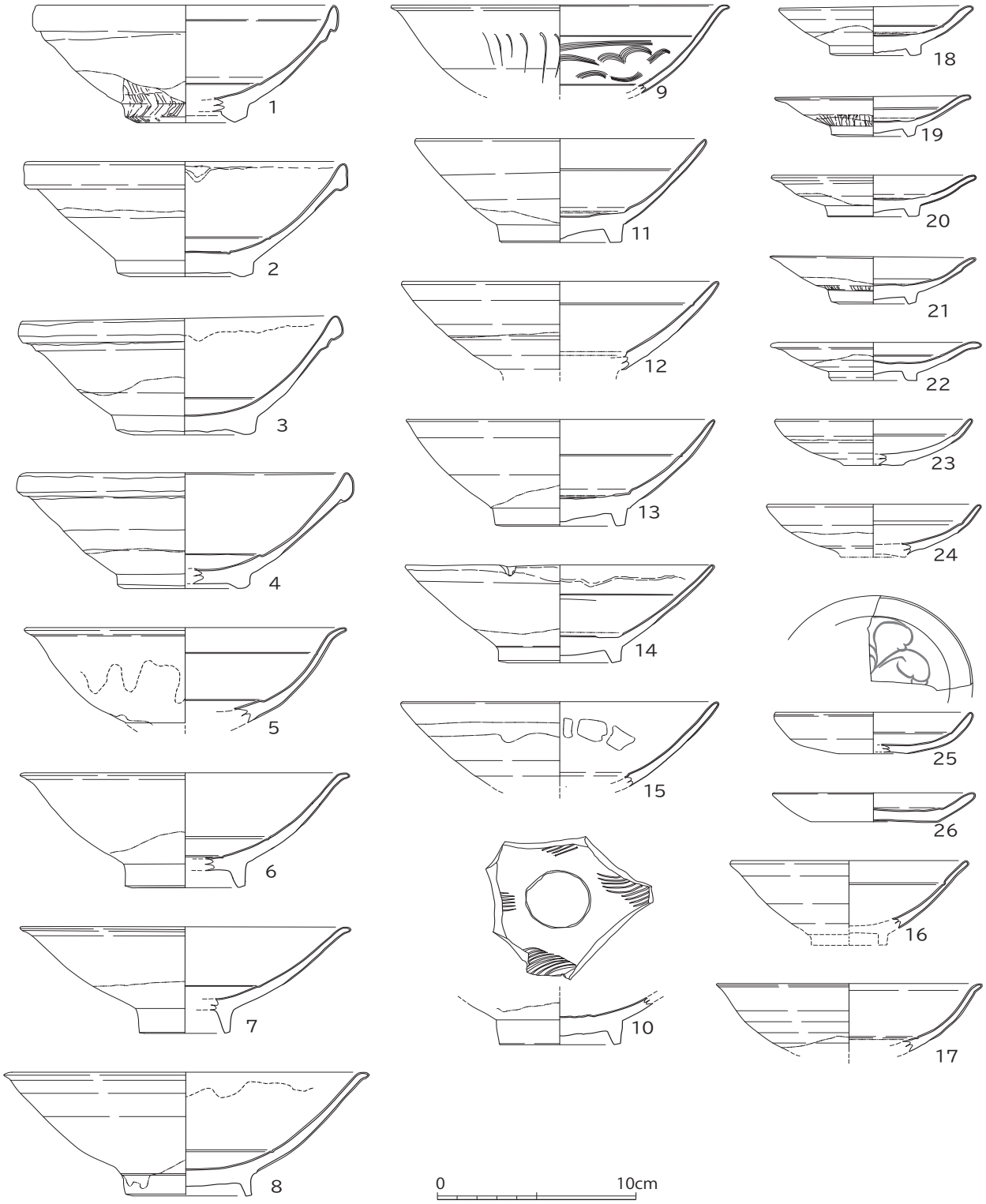
白磁小碗Ｖ類（16） 底部を欠くが口縁部が直線的に開く器形で、口縁内面に沈線が巡る。黄灰色の胎土で淡灰白色の釉がかかる。復元口径 11.8 ㎝、残存器高 3.7 ㎝の大きさ。

白磁小碗Ⅷ－ 1 類（17） 底部を欠くが内湾気味に口縁部が開き口縁端部は外反する。灰白色の胎

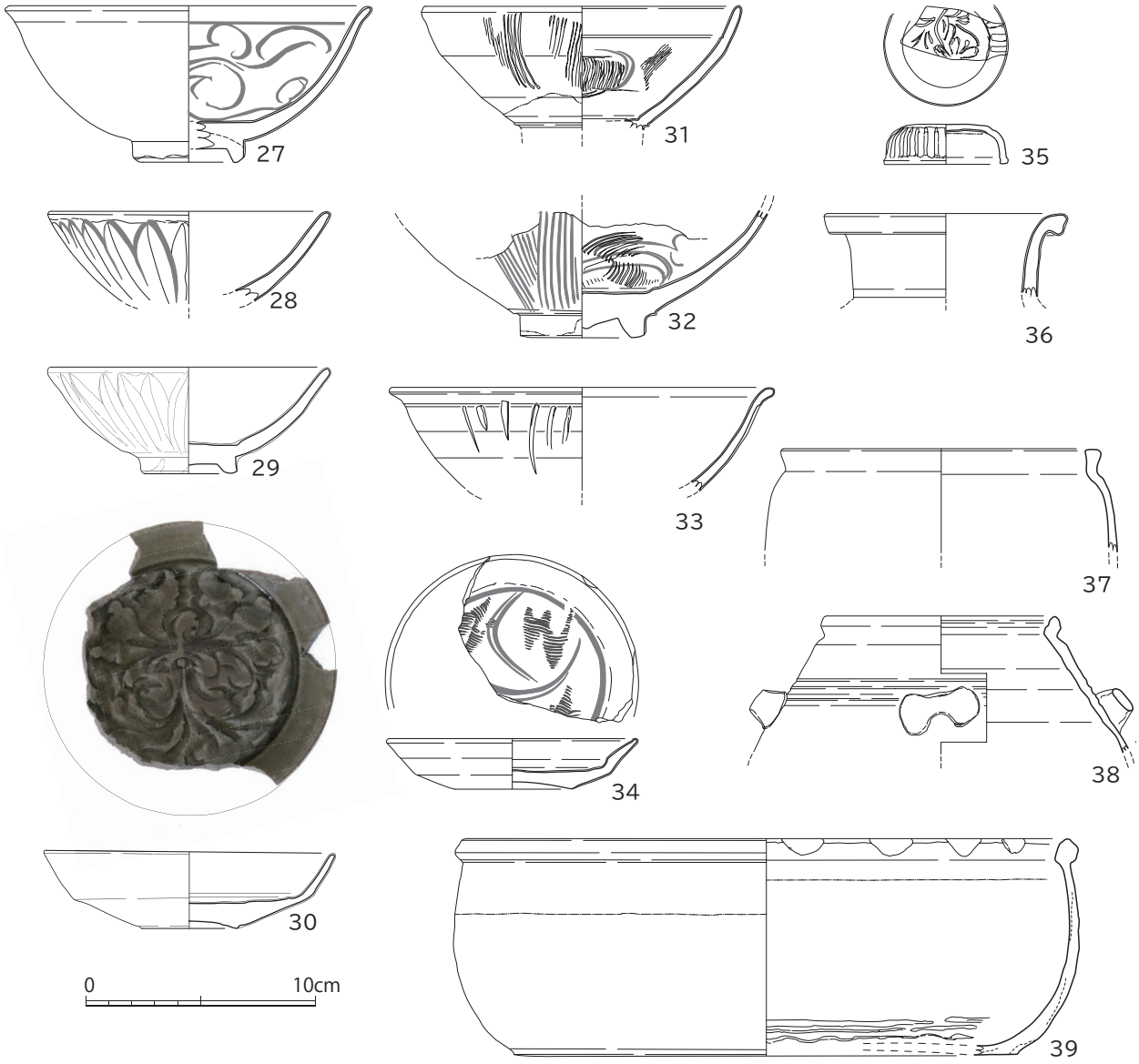
土で灰白色の釉が掛かり、外底部は露胎。内底面に蛇の目状の釉掻き取りがある。

白磁皿Ⅲ－１類（18 ～ 21） 口径約 10 ㎝、器高 2.3 ～ 2.7 ㎝、高台外径 4.5 ～ 5.0 ㎝の大きさで口縁端部は緩やかに外反する。淡灰白色の胎土で外底部を除いて淡灰白色の釉が掛かり、内底面に蛇の目状の掻き取りがある。図示しない資料で４個体分の底部片がある。

白磁皿Ⅲ－２類（22） Ⅲ－１類に似るが器高は 2.1 ㎝と低めで、内底面に釉の掻き取りがみられ



第 31 図 表土層出土の中世遺物１（陶磁器実測図１）(1/3)



第 32 図　表土層出土の中世遺物 2（陶磁器実測図 2）(1/3)

ないもの。

白磁皿Ⅳ－ 1a 類（23・24）外底面が内凹みの小さな底部から内湾気味に口縁部が開き、口縁部内面に低い段がある。23 は復元口径 10.0 ㎝、器高 2.6 ㎝とやや小振りで、24 は一回り大きい。23 は灰黄褐色、24 は灰白色の胎土で、黄色味がかった灰白色の釉薬が掛かる。

白磁皿Ⅳ－ 1b 類（25）内湾する口縁部内面に低い段が巡る皿で、内底面に花文上のヘラ描き文様がある。灰白色の釉が掛かり、外底面は直径約 3.5 ㎝に掻き取られている。復元口径 9.8 ㎝、器高 2.3 ㎝の大きさ。なお、図示しないⅣ－ 1 類の破片が数点ある。

白磁皿Ⅸ類（26）平底の底部から口縁部が直線的に開く皿で、内底面に段状の沈線が巡る。灰白色の胎土で灰白色の釉が掛かるも口禿である。底部外面に板目圧痕が残る。復元口径 10.0 ㎝、器高 1.6 ㎝の大きさ。

龍泉窯系青磁碗（27 ～ 29）やや黄色味のある灰白色の胎土に青味のある緑褐色の釉が掛かる。27 は内面に片切彫りの花文を描くⅠ -2 類碗で、復元口径 16.0 ㎝、器高 6.8 ㎝の大きさ。28・

29 は接合しないが同一個体の可能性もある。29 は復元口径 12.2 ㎝、器高 4.6 ㎝の大きさ。内底面に僅かな段がみられ、体部外面に片切彫りの蓮弁文様が描かれるⅡ -b 類小碗。なお、図示しない資料にⅠ類に含まれる破片が数点ある。

龍泉窯系青磁皿（30） 厚めの底部から直線的に口縁部が開くⅠ c 類皿で、外底面に直径 4.0 ㎝の釉掻き取りがある。内底面に片切彫りの花文と櫛目文様が描かれる。復元口径 12.2 ㎝、器高 3.3 ㎝の大きさ。図示しない資料にもこの類が 1 点ある。

同安窯系青磁碗（31 ～ 33） 灰色基調の胎土にやや黄色味のある釉が掛かる。31・32 は高台から口縁部に向かって内湾気味に開く器形で、内底部に段のある碗Ⅰ b 類。内面にヘラ描き沈線の花文と櫛目点描文が、外面に縦の櫛目文がある。33 は底部を欠くが内湾気味に開いた口縁部先端が外反する器形で、外面に粗い縦方向の片切彫り、内面が無文の碗Ⅲ -1a 類であろうか。碗Ⅰ b 類は図示しない資料に 4 個体分以上の破片がある。

同安窯系青磁皿（34） 復元口径 10.8 ㎝、器高 2.2 ㎝の大きさで、底部から口縁部が外反気味に開き、内底面にヘラ描き沈線と櫛目点描文を描く。全体に緑褐色気味の釉が掛かり、外底面の釉は掻き取られる。皿Ⅰ -2b 類。図示しない資料がさらに 2 個体分ある。

青白磁合子（35） 蓋の破片資料。外天井に草花文が描かれ、外面に縦方向刻み目が並ぶ。精白な胎土で青味のある灰白色の釉が掛かり、内面で身の蓋受けと重なる部分は露胎。復元蓋外径 5.4 ㎝、器高 1.7 ㎝の大きさ。

白磁水注（36） 直立する頸部から口縁部が開いて端部外面が肥厚する口頸部破片で、くびれ部外径が 8.0 ㎝の大きさ。灰白色の胎土で透明度のある淡い灰白色の釉が掛かる。

白磁壺（37） 胴最大径が 15.4 ㎝の大きさの直口縁壺で、黄色味のある灰色の胎土に淡い黄灰色の釉が掛かり、口唇部上面は口禿。

陶器四耳壺（38） 淡い茶褐色の胎土に緑味のある茶褐色釉が掛かる。四耳壺Ⅴ -2 類であろう。

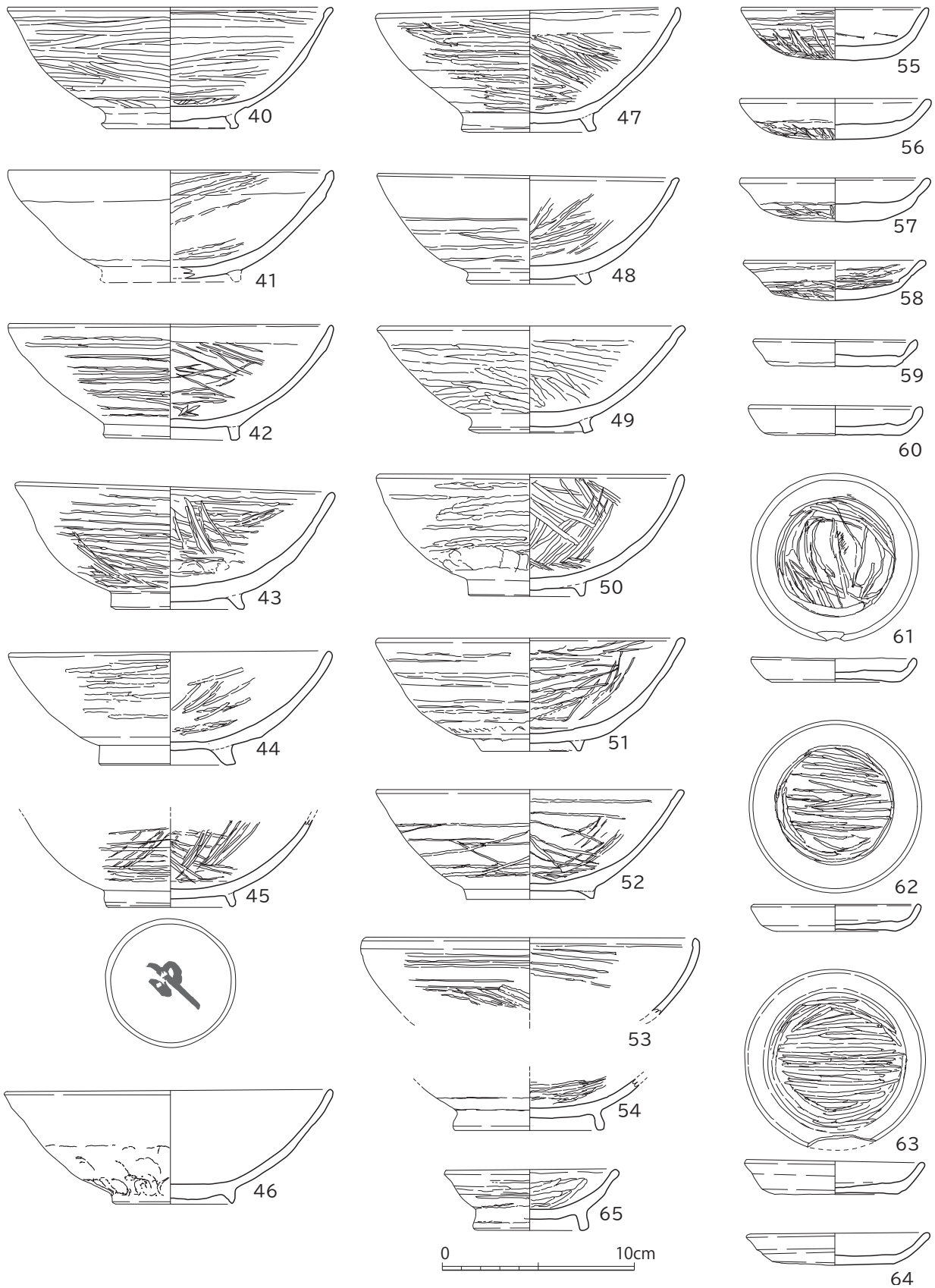
陶器盤（39） やや凹み気味の平底から胴が僅かに膨らみ、口縁部は四角く肥厚する。胴最大径 27.4 ㎝、器高 9.4 ㎝の大きさ。細砂粒を含む茶褐色の粗い胎土に化粧土と灰黄褐色の釉が、口縁部には茶褐色の鉄釉が掛かり、内面胴下部に横線の鉄釉文様が描かれる。また口縁部には目跡もみられる。

白磁碗Ⅳ類やⅤ－4類は 12 世紀前半～ 12 世紀後半、Ⅶ類・Ⅷ類も 12 世紀中頃～後半、皿もほぼこの時期に該当する。同安窯系青磁碗や皿、龍泉窯系青磁碗・皿ともに 12 世紀中頃～後半代に含まれる。一部の陶器などで 12 世紀前半に含まれるものの 12 世紀中頃～後半が主体と言えよう。また、36・37 は、かなり下降する時期のものかもしれないが、陶器盤や四耳壺などは 11 世紀後半～ 12 世紀前半代に該当する。

瓦器・土師器（図版 23 ～ 26 、第 33 ～ 35 図）

瓦器椀（40 ～ 54） 口径の分かる口縁部資料が破片資料を含めて約 300 点ある。復元口径は 13 ～ 20 ㎝の幅があるものの 16 ～ 18 ㎝のものが多く、16 ～ 17 ㎝に集中する。高台外径の分かる資料も約 300 点あり、高台外径 5 ～ 9 ㎝のうち 6 ～ 7.5 ㎝が 200 点以上と多い。器高は概ね 6 ～ 6.5 ㎝で、このうち体部内面の深さは 5 ㎝前後がほとんどである。

胴下半部に指頭圧痕を残す和泉型瓦器椀の形態に近いもの（43・46・50・51）もあるが、内外面ともにミガキ調整痕の残るものが多く、高台の貼り付け時のヨコナデ調整痕が底部付近に残るもの



第 33 図　表土層出土の中世遺物 3（瓦器・土師器等実測図 1）(1/3)

も多い。高台内に糸切痕や、糸切痕をナデ消した痕跡も多くみられる。

40 ～ 46 は口径 17 ㎝前後、器高 6 ～ 6.5 ㎝、高台外径 7 ～ 7.5 ㎝の大きさ、47 ～ 52 は口径 16 ㎝前後、器高 5.5 ～ 6.5 ㎝、高台外径 6 ㎝前後の大きさで、53 は口径 17 ㎝以上、54 は高台外径 8 ㎝のもの。

半球形の体部に高台を貼り付け、底部から口縁部に内湾しながら立ち上がる器形が大半ながらも、49・52 のように湾曲が少なく直線的に開く器形もある。口縁端部では 40・43 のように外反気味のもの、41・42・46 のように肥厚気味のもの、44・47・50・53 のように内湾気味などのバリエーションがある。外面は横方向、内面は放射状など斜め上方にミガキ調整するものが多い。

高台は、直立あるいは踏ん張る形状、あるいは断面三角形（46・50 ～ 52）に貼り付けられている。な お、51 の内底面には重ねられた際に生じたと考えられる高台外径の押捺痕が残り、内底面に直径 7 ～ 8 ㎝ほどの範囲が白っぽく焼成された例も多数あり、これも重ねの痕跡だろう。また、45 の高台内には「中」とみられる墨書が観察された。

焼成では、44・48・51 は燻した痕跡がみられず須恵質にも近いもので瓦器よりむしろ土師器椀とするのが適切だろう。

瓦器小皿（55 ～ 64） 口径の分かる資料が破片資料を含めて 110 点あり、このうち 10 点は外底面が膨らむ器形（a類）で、口径 9 ～ 10 ㎝、器高 1.6 ㎝以上の大きさである。それ以外のもの（b類）は口径 7.7 ～ 10.8 ㎝、器高 1 ～ 2 ㎝の幅があり口径 8.5 ～ 9.5 ㎝、器高 1.3 ～ 1.7 ㎝に集中する。

図示した資料は a 類が 55 ～ 58、59 ～ 64 が b 類である。いずれも口縁部内外面ともにヨコナデ調整され、前者では外底面をヘラミガキ調整、後者は糸切痕を残して 60 のように外底面に板目圧痕が残る例もみられる。60 ～ 62 は底面から口縁部の立ち上がりで内面側に指先によるナデのため内湾する器形になるが、他は直線的に開く。内底面に一方向とその外側を巡るミガキ調整痕の残る例として 58・61 ～ 63 があり、55 の内面には板小口痕がみられる。器面風化で観察できない資料もあるが大半の資料で内底面にミガキ調整痕が観察できる。

また、大半の資料で外底面と内底面が白っぽく焼成され、重ね焼きと判断される。

瓦器台付小皿（65） 1 点のみで、a 類小皿に高台が付く器形。口径 9 ㎝、器高 3.1 ㎝、高台外径 6 ㎝の大きさ。体部内外面ともにミガキ調整痕が観察され、他の瓦器に比して色調が淡く、灰色ないし灰褐色に焼成されている。

土師器坏（66 ～ 74） 口径・器高が分かる資料は破片を含めて 145 点ある。口径 13 ～ 17 ㎝、器高 2.5 ～ 4 ㎝の幅があり、口径 14.5 ～ 16.5 ㎝に集中する。いずれも体部内外面ともにヨコナデ調整され、底部は糸切りによる糸切痕が残り、71 ～ 73 には板目圧痕が付く。

このうち、底径が 6 ㎝前後で口径の半分以下になる 1 類の 66・67・71 では、体部が内湾気味に開いて端部で外反気味に転ずる 66 と直線的に伸びる 67・71 に分かれる。

底径が 8 ～ 9 ㎝で口径の半分強で体部が内湾気味に長く伸びる 2 類の 68・69・72 では、72 が端部で外反気味になる。また、底径が口径の 2/3 以上を占める 3 類（70・73・74）では、体部で口縁部が内湾で開く 70、直線的に開く 73、外反して開く 74 の 3 種類に分かれる。

土師器鉢（75） 完形に復元可能な資料が 1 点あり、口径 17.5 ㎝、器高 5.7 ㎝、底径 6.6 ㎝の大きさ。底部から体部が直線的に開き口縁部は内湾気味に肥厚する。体部内外面はヨコナデ調整らしい。外底面は糸切り離しのあと部分的にナデ消しが加わる。全体的に灰茶褐色に焼成され口縁部外

面は帯状に黒っぽい色調である。

土師器台付坏（76） 74 のような 3 類坏に踏ん張るような形状の台が付くもの。復元口径 17 ㎝、器高 3.5 ㎝の大きさで台部の高さ 2 ㎝弱、裾外径 8.5 ㎝。器面が風化して調整手法は不明。

土師器台付小皿（77・78） 蓋の可能性もあるが、器高の低い小皿 1 類に外径 5.5 ㎝ほどの台が付くもの。77 では台部の高さが 0.6 ㎝と低く、78 では約 1.5 ㎝と高い。

土師器小皿（79 ～ 90） 口径･器高が分かる資料は破片を含めて 1350 点ある。口径 7 ～ 12 ㎝、器高 0.7 ～ 3.4 ㎝の幅があり、口径 8 ～ 10 ㎝、器高 0.8 ～ 1.5 ㎝に集中する小皿 1 類（83 ～ 90）と、口径 10 ～ 12 ㎝、器高 2.2 ～ 3.4 ㎝の小形坏のような小皿 2 類（79 ～ 82）に分かれるが、2 類は 10 点程度で、他はすべて 1 類である。

1 類では 83・84・86・87、90 で口縁部が直線的に立ち上がり、85・88・89 ではヨコナデ時に指先で抑えた窪みが内面で一周して内湾気味に立ち上がる。外底面は糸切りで 88 ～ 90 に板目圧痕がみられ、内底面に一方向のナデ痕が確認される。なお、86 の外底面の糸切痕には幅 0.1 ㎝の糸圧痕もみられる。

2 類の体部で器壁の薄い 79 ～ 81 と器壁の厚い 82 があり、外底面は糸切りで 80 に板目圧痕がある。

土師器の坏、小皿ともにすべて糸切底で、坏は口径 14.5 ～ 16.5 ㎝、器高 2.5 ～ 4 ㎝に、小皿は口径 8 ～ 10 ㎝、器高 0.8 ～ 1.5 ㎝に集中するので、大宰府の土器との比較では SD1330 ないし SK1204 段階～ SK1085 段階に近い。時期的には 12 世紀初～ 13 世紀初頃とされる。

擂鉢（91 ～ 93） いずれも土師質だが 91 はやや須恵質の焼成で、91・92 は片口部分が確認できる破片資料。ナデ調整された内面に間隔をあけて 91 には 2 条単位の、92・93 では 4 ～ 6 条単位の目が刻まれる。91・93 は口縁部外径約 29 ㎝、92 は約 35 ㎝の大きさで、93 の口縁は内側に肥厚し、92・93 の外面にヘラ削り痕がみられる。

須恵質捏鉢（94） 口径 30 ㎝、器高 11.3 ㎝、底径 9.5 ㎝の大きさの鉢で、糸切底の底部から口縁部にかけて直線的に開き、口唇部は内側に肥厚する。体部はナデ調整されるが、外面は帯状の凹凸、内面下半部は使用のための摩耗痕が顕著である。

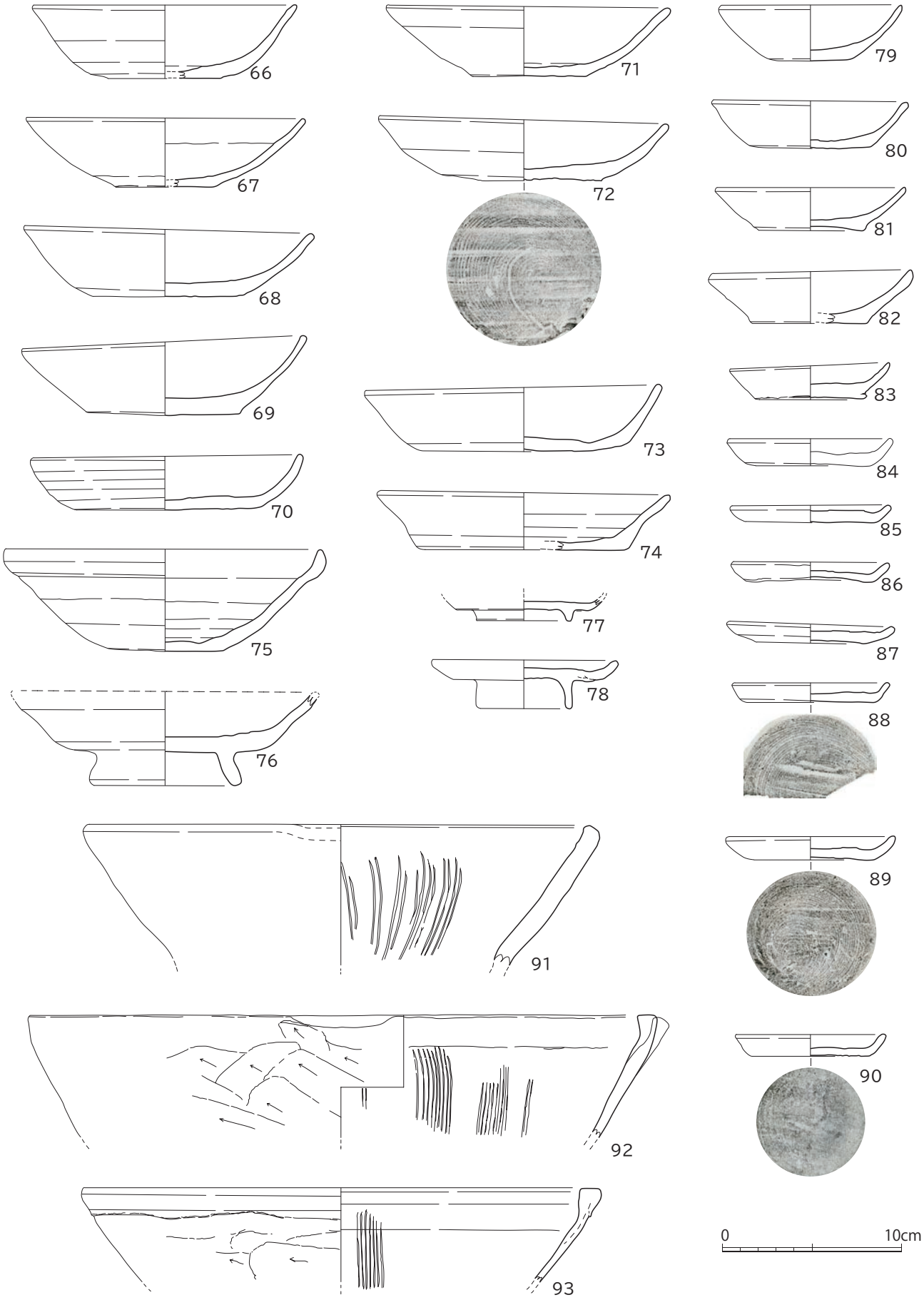
陶器鉢（95） 復元外径 32 ㎝、器高 12.7 ㎝の大きさで、内湾気味に立ち上がる口縁部は端部内側が肥厚して指先による横方法ナデで 2 条の突帯を巡らせたような形状になる。内外面の調整は全体に雑なナデ調整で砂粒の移動痕を含めて気泡が目立ち、無釉。

土師器鍋（96 ～ 99） いずれも破片で全体の器形は不明ながら口縁端部は外反する。96 は胴部から口縁部が直に立ち上がり、97 ～ 99 は開きながら立ち上がり、内面調整では前者が縦方向、後者は横方向のハケ目がみられる。胴部外面で煤の付着が顕著。96 の口縁部上面には口縁に直交する指頭ナデが並ぶ。

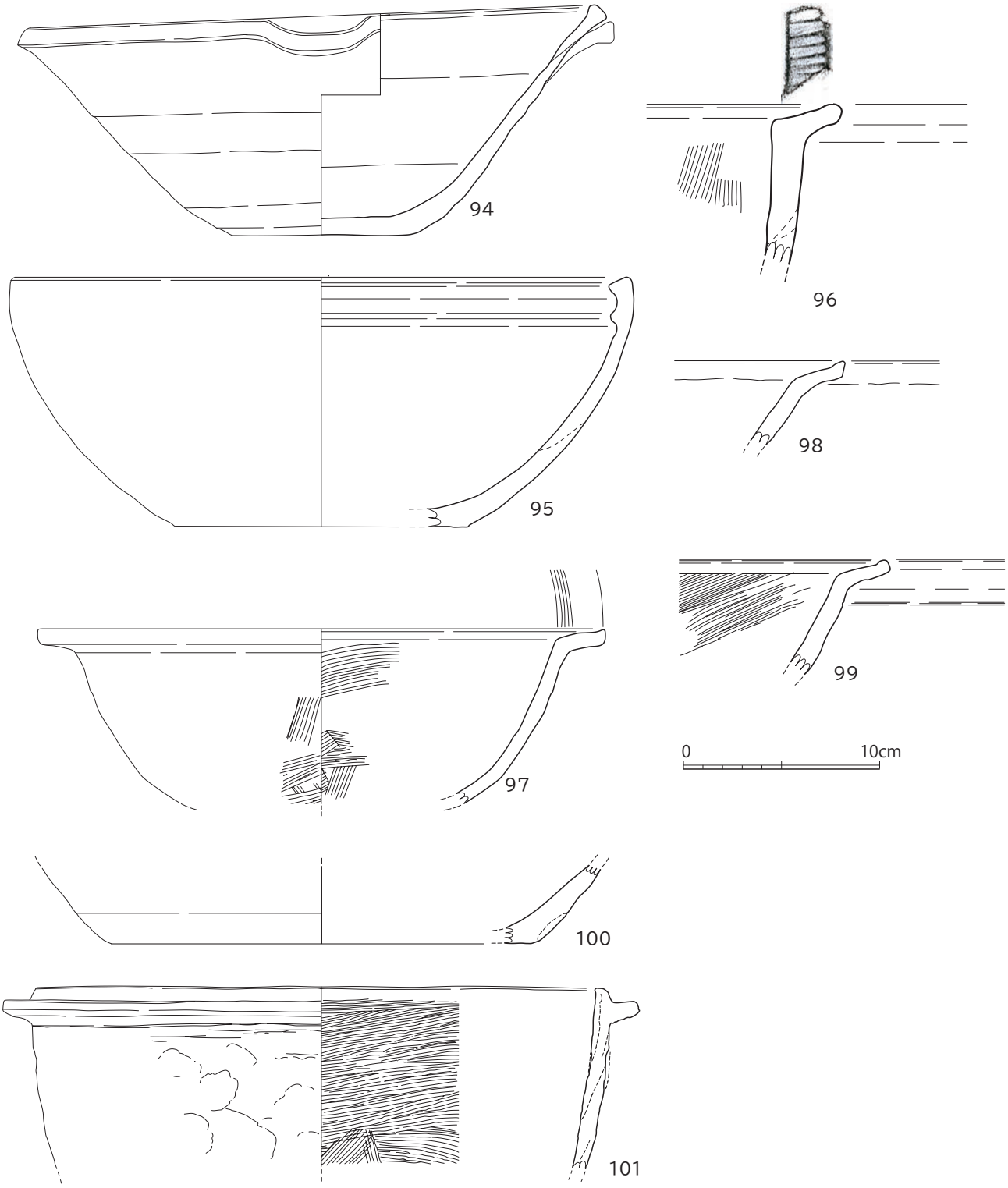
底部（100） 土師器鉢か焼成不良の須恵質甕の底部破片。内外面ともに雑なナデ調整で、底面外側に補強とみられる突帯状の貼り付け痕がみえる

土師器羽釜（101）羽の外径 44.5 ㎝の大きさで、内面はハケ目調整、外面は指頭圧痕の残るナデ調整で、内外面ともに被熱による器壁面の剥落が、羽の下面に煤の付着が顕著にみられる。

北九州市域資料と比較すると、小倉北区の愛宕遺跡土器窯跡では、下層で土師器椀、坏、小皿が出土し、和泉型瓦器椀を伴うことから 12 世紀第 1 四半期とされるが、上層には瓦器椀があり、城



第 34 図　表土層出土の中世遺物 4（瓦器・土師器等実測図 2）(1/3)



第 35 図　表土層出土の中世遺物 5（瓦器・土師器等実測図 3）(1/3)

山横穴群のａ類瓦器小皿も出土していて、この地域ではこの段階で瓦器椀生産が始まっている。下層の土師器椀は平均値で 1 類が口径 15.7 ㎝・器高 5.3 ㎝、2 類は口径 15.8 ㎝・器高 5.7 ㎝、瓦器椀は口径 15.7 ～ 16.4 ㎝、器高 5.2 ～ 6.2 ㎝、高台外径 5.7 ～ 6 ㎝である。土師器小皿は口径 8.4 ～ 9 ㎝、器高 1.3 ～ 2 ㎝、坏は口径 15 ～ 15.8 ㎝、器高 2.5 ～ 4.4 ㎝。上層では土師器椀は口径 15.5 ～ 18.0 ㎝、器高 5.3 ～ 5.8 ㎝、瓦器小皿は口径 10.5 ㎝、器高 2.4 ㎝で底部が膨らむタイプである。

12 世紀後半～ 13 世紀前半とされる小倉南区の長野小西田遺跡 1 号溝では、土師器小皿の口径 7.9 ～ 10.7 ㎝、器高で 2 タイプがあって 1.6 ㎝以上の例があること、坏では口径 13.6 ～ 15 ㎝で 15.8 ㎝を超すものがあること、器高が平均 3.16 ㎝である。瓦器椀は口径 15 ～ 18 ㎝で平均 16.35 ㎝、器高は平均 5.94 ㎝で 5.5 ㎝以下の浅いタイプと 6 ㎝以上の深いタイプがある。高台外径は 6 ～ 8 ㎝の幅があるようである。瓦器小皿では平均口径 9.5 ㎝で器高 1.9 ～ 2.1 ㎝の深いタイプは城山横穴群の a 類に対比できる。

土師器坏、小皿では時期が下るにつれて小型化する傾向があり、長野小西田遺跡 1 号溝の前に愛宕遺跡土器窯跡の上層期を想定することも可能である。土師器、瓦器では城山横穴群は北九州市域の小倉北・南区とは少し離れるが、概ね愛宕遺跡土器窯跡の上層段階から長野小西田遺跡 1 号溝の段階に対比させうるだろう。

膨らんだ底部をヘラミガキ調整する瓦器小皿 a 類は、築上町小山田・スルメ田遺跡の瓦器焼成関連遺構、1 号集石遺構にもみられる。この遺構では、瓦器椀は口径 14.8 ～ 18.3 ㎝、器高 5.1 ～ 7.1 ㎝、高台外径 4.8 ～ 7.2 ㎝。土師器坏・瓦器坏は口径 12.8 ～ 17.3 ㎝、器高 2.2 ～ 3.8 ㎝、土師器小皿・瓦器小皿は口径 8.2 ～ 10 ㎝、器高 1 ～ 2.5 ㎝を測る。この数値は概ね城山横穴群の土器に近いが瓦器坏はない。小山田・スルメ田遺跡の瓦器椀第Ⅰ類～第Ⅲ類について概ね 12 世紀後半に考えられている。瓦器椀の体部調整は同じだが、城山の例では高台は断面方形・逆三角形ともにナデ調整で貼り付けられてヘラ削りはみられない。

また、みやこ町自在丸遺跡の 1 号溝では、13 世紀前半頃とされる土師器小皿の口径 7 ～ 9.1 ㎝、器高 1.1 ～ 2.1 ㎝、坏は平均で口径 13.5 ㎝、器高 3.4 ㎝、瓦器小皿の口径は 8.2 ～ 9.8 ㎝、器高が 1.5 ㎝である。瓦器椀は平均で口径 15.9 ㎝、器高 6.1 ㎝、高台外径 6.8 ㎝で、高台が逆三角形、体部の深い碗が多い。この遺跡では瓦器碗の外面や白磁碗の高台内の墨書事例がある。

なお、土師器鍋では口縁部が L 字状に外反して上面が刻み目状になる例は朝倉市志波桑ノ本遺跡の通路遺構などに類例がある。

石器・石製品（図版 26 、第 36 図）

砥石（1･2） 1 は粘板岩、2 は硬質砂岩を素材にする、肌理の細かな仕上げ砥石である。1 は長さ 7.6 ㎝、幅 4 ㎝、厚さ 1.9 ㎝の大きさで 83g を測る。表裏と側面の一方が砥面に利用され、剥離痕が大きく残る面には突出した部分に切削痕とその横に狭い砥面がある。

2 は下端側を欠失するが、残存長 6.8 ㎝、幅 2.3 ㎝、厚さ 2.4 ㎝の断面方形に近い棒状で 66g を測る。上端部に孔径 0.4 ㎝の穿孔がある。棒状の 4 面ともに砥面に利用されており、穴に紐を通して吊るす携行用の砥石であろう。

硯（3） 赤色頁岩の赤間石に似た石材で作られ、3 方を欠失するが陸部と海部の境目部分の破片。上面の縁が僅かに残り、裏面には僅かな上げ底状の凹みがみられる。なお、上面の陸部には敲打による剥落がみられる。残存値で重量 58g を測る。

石鍋（4） 滑石製の石鍋の口縁に近い部分の厚さが 2.2 ～ 2.5 ㎝ある破片で、縦長の耳部分が幅 2 ～ 4 ㎝、厚さ 2 ㎝ほどの突起に削り出される。内外面の弧からみて外径で約 32 ㎝の大きさと考えられ、残存重量 351g を測る。内外面ともに削り調整痕が残り、煤の付着も内外面に残る。縦長の耳が設けられる石鍋は 10 ～ 11 世紀に流行した、石鍋としては古いタイプである。

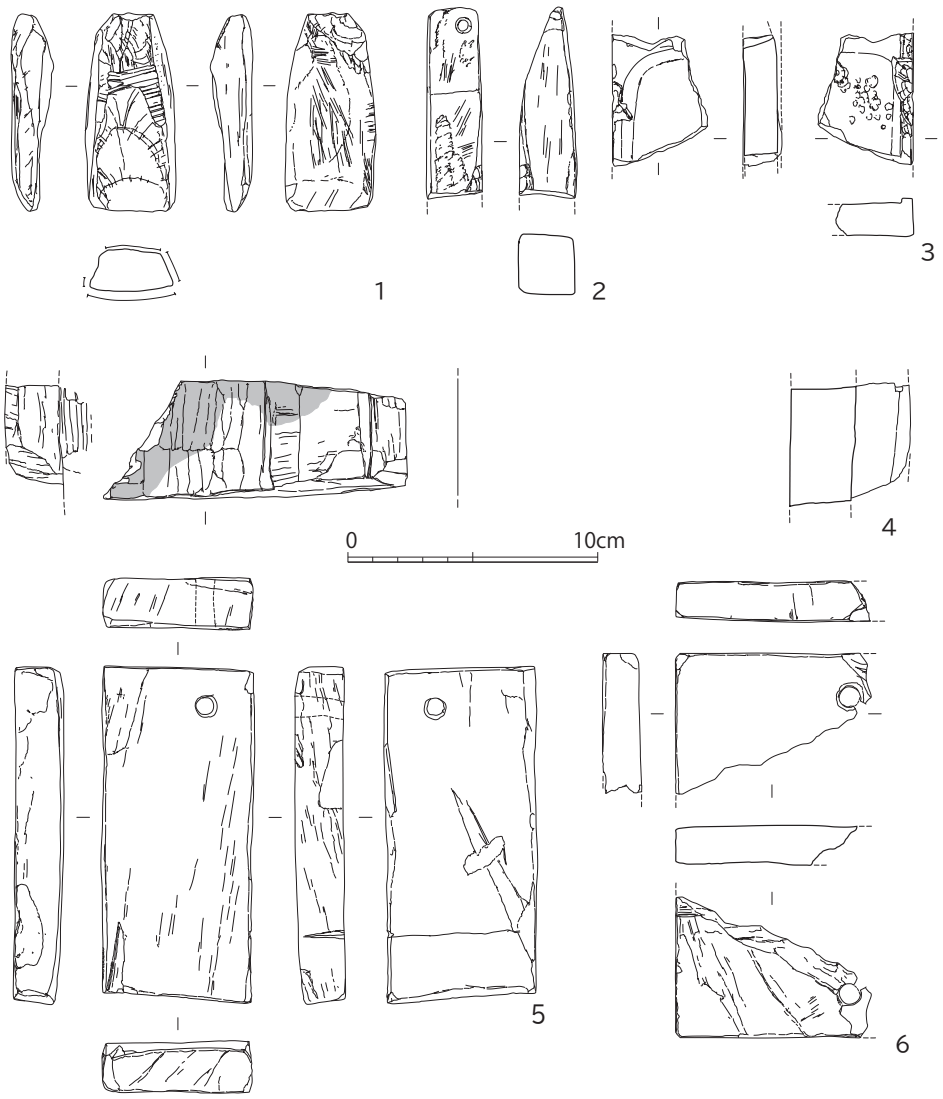
石鍋片転用懐炉？（5・6） 滑石製石鍋の破損によって生じた厚さ 1.5 ㎝前後と 2 ㎝前後の破片を

長方形に整えたもの。5 は完形品で重量 365g を測る。長さ 13.4 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 2 ㎝の大きさに研磨で整えられ、上端部に孔径 0.7 ㎝の穴が穿たれている。

6 は破片資料だが残存値で 8.1 ㎝× 5.8 ㎝、厚さ 1.6 ㎝の大きさ、重量 119g を測る。端部近くに孔径 0.8 ㎝の穿孔がある。2 点ともに滑石の保温性を利用した携行用の懐炉の可能性が高い。

石鍋片転用の懐炉では、本遺跡の例と酷似する小倉北区愛宕遺跡の集石遺構出土例や、行橋市高来井正丸遺跡 1 号井戸に類例があり、大宰府観世音寺などでもみられる。

北九州市埋蔵文化財調査室、1986『愛宕遺跡Ⅱ－北九州市小倉北区菜園場所在－』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 46 集
北九州市埋蔵文化財調査室、2010『長野小西田遺跡3－長野緑地整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 11 －』北九州市埋蔵文化財調査報告書第 435 集
築城町教育委員会、2003『小山田・スルメ田遺跡』築城町文化財調査報告書第 9 集
犀川町教育委員会、1992『城井遺跡群』犀川町文化財調査報告書第 3 集
行橋市教育委員会、2011『高来小月堂遺跡・高来井正丸遺跡・高来殿屋敷遺跡』行橋市文化財調査報告書第 38 集
福岡県教育委員会、1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－ 45 －上巻、志波桑ノ本遺跡



第 36 図　表土層出土の中世遺物 6（石器・石製品実測図）(1/3)

5.Y133 横穴墓

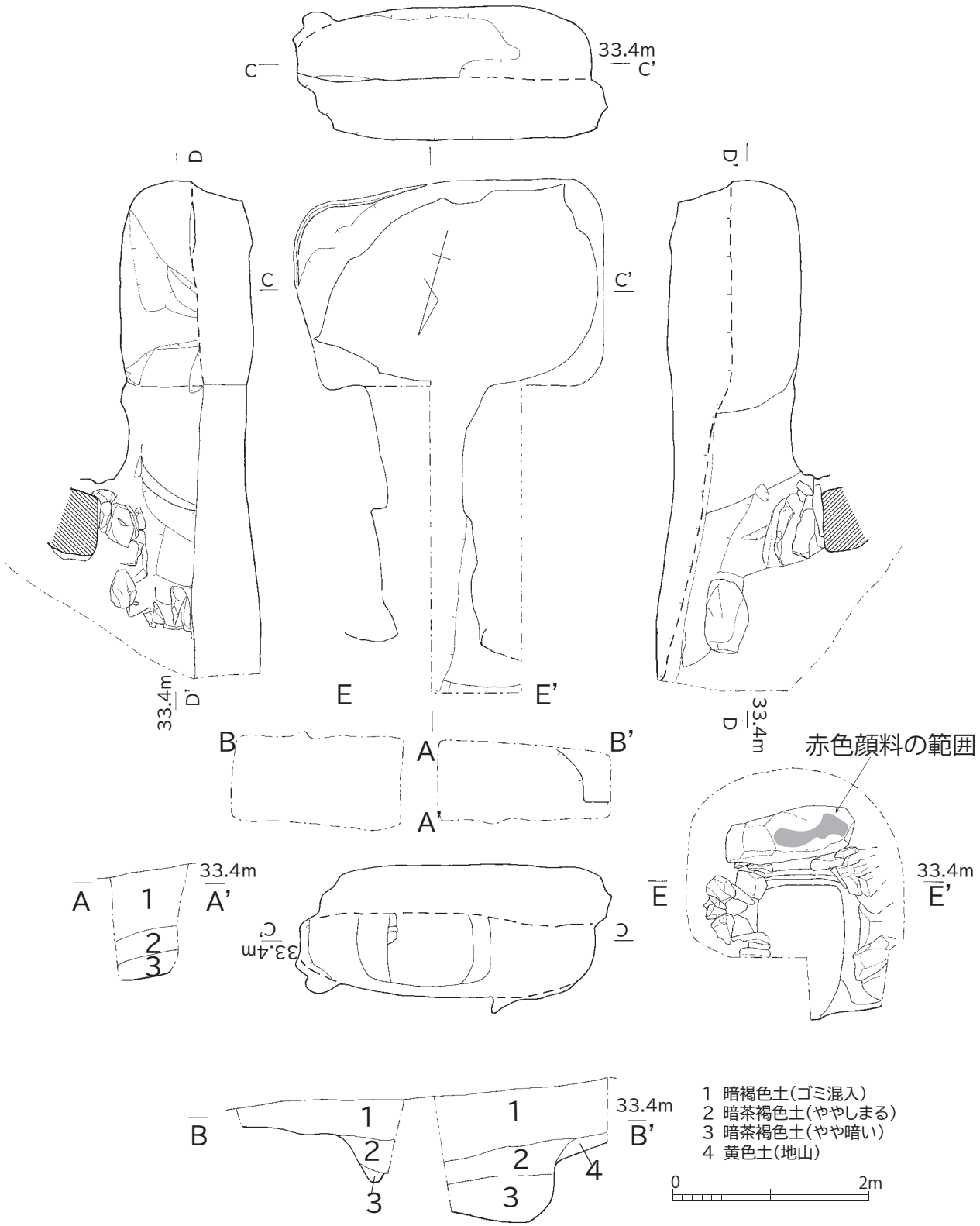
Y133（図版 11、第 37・38 図）

今回の調査範囲より外れるが、保存整備工事においてレプリカ作成のモデルとなった横穴墓である。南側丘陵の北端に位置し、前回調査時に内部の調査と横穴墓前面の墓道部分のトレンチ調査を行っていた。羨門部の石組が良好に残存し、横穴墓の構造解説のモデルとして最良であると判断しレプリカ作成の対象とした。

レプリカ作成に伴い、現地での型取り及び測量、写真撮影などの作業の必要性から横穴墓を埋め戻していた土嚢を一部除去し清掃を行った。清掃の際羨門石組の上部、庇石前面に赤色の付着物が確認できた。この横穴墓は、金田町史編纂の際に赤色顔料の存在が指摘されていたこともあり、周辺を精査し剥落していた付着物の分析を行った。分析は九州歴史資料館保存科学室に依頼し、蛍光 X 線分析装置を用いて付着物の成分分析を行った。結果、水銀は検出されず鉄分が検出され赤色顔料（ベンガラ）であることが判明した。簡易な赤外線カメラ等を用いて撮影を試みたが、明確な文様等は確認できなかった。

赤色顔料は庇石前面のみであり、羨道から玄室内部にかけて赤色顔料は確認できていない。

第 37 図　Y133 庇石　赤色顔料の状況



第 38 図　Y133 実測図　前回報告書より転載加筆（1/60）

6. 城山横穴群 Y73 号墓出土人骨について

蓮田賀子[1)]・米元史織[2)・3)]・足達悠紀[1)]・小髙蒼大[4)]・舟橋京子[3)・5)]

1：九州大学大学院地球社会統合科学府
2：九州大学総合研究博物館
3：九州大学アジア埋蔵文化財センター
4：九州大学共創学部
5：九州大学比較社会文化研究院

(1) はじめに

2019 年、福岡県福智町城山横穴群の史跡整備の際に、Y73 号墓において人骨が出土した。九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに福智町教育委員会から人骨調査の依頼があり、田尻義了、舟橋京子、米元史織が現地で調査・取り上げを行った。出土した人骨は、同教育委員会から九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院に移設され、整理・分析が行われた。

分析にあたって、人骨の性別判定は、頭蓋・骨盤について Buikstra and Ubelaker（1994）の方法を用い、年齢推定は、耳状面は Lovejoy（1985）、咬耗は栃原（1957）を用いた。計測は Martin-Saller（1957）、馬場（1991）に従った。以下にその結果を報告する。

なお、人骨は現在、アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

(2) 出土状況（図版 2・11、第 39 図）

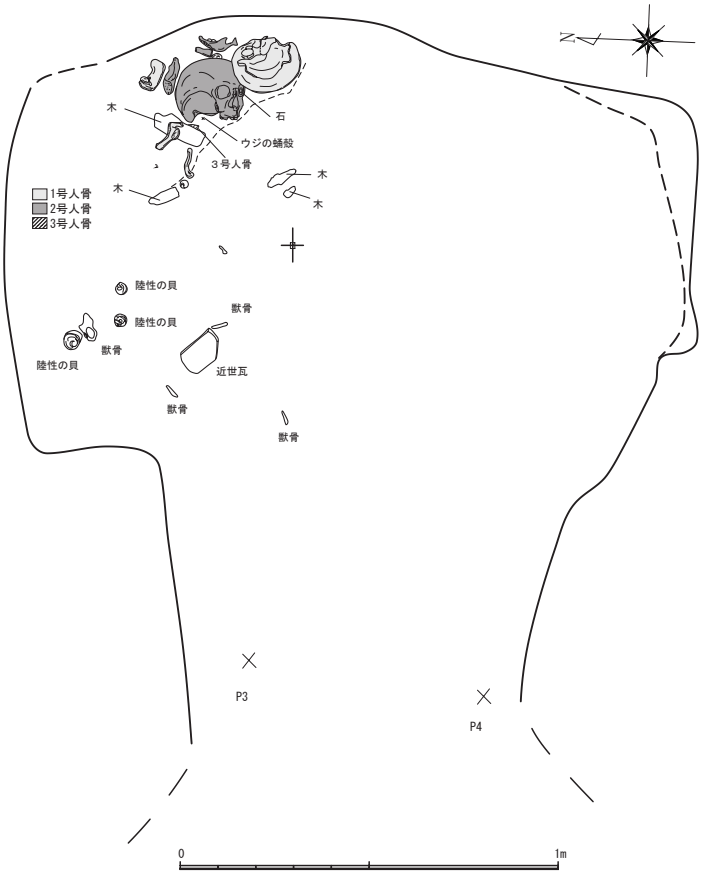
本横穴の人骨出土状況は史跡整備に伴い玄室内を確認した際、横穴墓内の奥壁際で土砂の流入を免れ露出していた部位に関してのみである。したがって、玄室内全体の人骨の出土状況を明らかにしているものではなく限定的な情報にはなるが、以下にその出土状況を詳述する。

Y73 号墓からは、流入土と奥壁の間から成人2体、未成人1体の合計3体の人骨が出土している（第 39 図）。出土した人骨には成人2体分の頭蓋・歯牙、椎骨などの躯幹骨、鎖骨、肩甲骨、未成人1人分の頭蓋片が含まれており、頭蓋骨の左後頭顆が重複していたため、これらを別個体のものと考え、南から1号人骨、2号人骨、3号人骨とする。上記の人骨の出土状態を説明する。

奥壁側中央部付近から1号人骨の頭蓋骨が顔面を南東に向け、頭頂部を南西側に向け出土している。1号人骨の北西から2号人骨の頭蓋骨が顔面を南西に、頭頂部を東に向け出土している。2号人骨の頭蓋骨の東から左側下顎体が歯冠の咬合面を南西に向けて出土している。2号人骨の頭蓋骨と下顎骨の間から左上腕骨の一部が出土している。2号人骨の頭蓋骨の北側から2号人骨の右寛骨が大坐骨切痕を上に向けた状態で出土している。その北側から1号人骨の左寛骨が大坐骨切痕を北東に向けて出土している。2号人骨の頭蓋骨の北西から1号人骨の左肩甲骨が肩甲窩を上にした状態で出土し、1号人骨の左肩甲骨の南西から1号人骨の左鎖骨が下面を上に向けた状態で出土している。1号人骨の頭蓋骨の下から帰属不明の椎体と2号人骨の上腕骨遠位、2号人骨の歯牙が出土している。2号人骨の頭蓋骨の北西にある木片の下から3号人骨の後頭顆部分が出土している。

1号人骨の頭蓋骨の頭蓋腔から切子玉が出土している。2号人骨の頭蓋骨の西側から囲蛹殻が10～

20個ほど散乱している。1号人骨の左鎖骨の北西から獣骨が数点出土しており、流入土上にのって流されて移動したと考えられる。流入土を考慮すると、獣骨や囲蛹殻は後世に混入した可能性もあることから、これらの意味付けに関する積極的な検討は行わないものとする。



第 39 図　Y73 号墓人骨出土状況図（1/20）

（3）人骨所見（図版 12 ～ 14）

①1号人骨

【保存状態】

人骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋は前頭骨の一部、右側頭骨、左側頭骨の一部、後頭骨のみが遺存している。蝶後頭軟骨結合、前後頭軟骨結合、蝶後頭軟骨結合は癒合している。

四肢骨は、左鎖骨と左肩甲骨、および左寛骨の腸骨体の一部が遺存している。

【性別・年齢】

性別は寛骨の大坐骨切痕角が大きいため、女性と判定される。

年齢は寛骨耳状面が phase 6-7（45―59 歳）（Lovejoy 1985）であることから熟年と推定される。

【形質的特徴】

計測可能部位は Ba-Br 高 149 ㎜のみであった。

【特記事項】

前耳状溝がある。

②2号人骨

【保存状態】

人骨の残存部位は少ないが保存状態は良好である。頭蓋は左右の頬骨弓以外が遺存している。蝶後頭軟骨結合、後後頭軟骨結合、前後頭軟骨結合は癒合している。下顎骨は左下顎枝と下顎体の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

○	M^2	△	P^2	P^1	C	○	I^1	I^1	I^2	C	P^1	○	M^1	M^2	M^3
/	/	/	/	/	/	/	/	/					×	M_2	M_3

（○歯槽開放、×歯槽閉鎖、／欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c 齲歯 ）

歯牙咬耗度は栃原（栃原 1957）の2°b である。

四肢骨は上腕骨の一部、右寛骨の腸骨体の一部が遺存している。

【性別・年齢】

性別は寛骨の大坐骨切痕角が小さいこと、眼窩上隆起・外後頭隆起・乳様突起が発達していることから男性と判定される。

歯牙咬耗度は栃原（栃原 1957）の 2°b（60 －歳）であり、寛骨耳状面が phase 8（60―歳）（Lovejoy 1985）であり、老年と推定される。

【形質的特徴】

2号人骨の計測値（第 1 表）は、頭蓋最大長 202 ㎜、頭蓋基底長 107 ㎜、頭蓋最大 145 ㎜、最小前頭幅 100 ㎜、Ba-Br 高 148 ㎜、頭蓋水平周 573 ㎜、横弧長 337 ㎜、正中矢状弧長 414 ㎜、顔長 106 ㎜、上顔幅 115 ㎜、両眼窩幅 106 ㎜、中顔幅 113 ㎜、上顔高 84 ㎜、眼窩幅左 44 ㎜・右 43 ㎜、眼窩高左 38 ㎜・右 37 ㎜、鼻幅 27 ㎜、鼻高 57 ㎜、前眼窩間幅 28 ㎜、鼻根横弧長 36 ㎜である。また全側面角 79°、鼻側面角 82°、歯槽側面角 78°で、過突顎を示す。

これらの計測値から算出された各示数は次の通りである。頭長幅示数は 71.8 で長頭である。 頭長高示数 73.3 で中頭である。頭幅高示数は 102 で狭頭である。ウィルヒョウ上顔示数は 74.3 で低顔である。眼窩示数（左）は 86 で高眼窩である。鼻示数は 43.7 で狭鼻である。

【特記事項】

歯牙と歯槽骨から、う蝕と歯周炎があったとされることが推定される。上顎の右第1大臼歯は頬側遠心根と口蓋側が残存しており、頬側近心根は欠損している。頬側遠心根の根尖部、口蓋根の根尖部、第1小臼歯の根尖部の周囲の歯槽骨には骨欠損があり、それぞれ根尖病巣があったと考えられる。上顎の右第2小臼歯は欠損しているが、歯槽窩は開放しており、先述の第1大臼歯口蓋根根尖部相当から第1小臼歯根尖部まで連続して骨欠損が存在する。なお、上顎の右第1小臼歯の歯冠部にはう蝕による欠損は認められない。以上より、上顎の右第2小臼歯もしくは第1大臼歯の歯冠部う蝕により歯冠崩壊を起こし、第1大臼歯歯髄に感染が波及し、第1大臼歯口蓋根と頬側遠心根、頬側近親根それぞれの根尖を通り、歯槽骨を通じて第1小臼歯に根尖病巣を生じさせたと考えられる。

また、城山2号人骨の歯牙には、う蝕に加えて歯周炎も認められる。古人骨における歯周炎の重症度を CEJ（セメント－エナメル境）と AC（歯槽骨縁）との間の距離から読み取ることことの有効性

が Lavigne and Molto（1995）により示されている（Lavigne and Molto 1995）ことから、歯牙ごとの CEJ―AC 間距離を計測した。Lavigne and Molto（1995）は、デンタルプローブを用いた計測法を行っているが、今回の2号人骨についてはデジタルノギスを用いて計測を行った。以下に歯牙ごとの CEJ―AC 間距離の最大長（㎜）を示す。

	4.4			3.3	3.1		3.1	7.3	3.6	6.9	5		6.4	4.5	4
○	M^2	△	P^2	P^1	C	○	I^1	I^1	I^2	C	P^1	○	M^1	M^2	M^3
/	/	/	/	/	/	/	/	/					×	M_2	M_3
														5	2

（値：各歯牙における CEJ-AC 間距離の最大長（㎜）空白は測定不可能部位）

Modified Ramfjord index を引用して、以下に各歯牙における CEJ-AC 間距離から歯牙ごとの歯周炎の重症度のコード化を記載する。（Ramfjord 1967; Lavigne and Molto 1995）
ただし Modified Ramfjord index はデンタルプローブを用いた計測を前提にしたコードであり、今回の計測ではノギスが用いられたことを考慮すると、以下のコードは参考値として参照いただきたい。

	2			1	1		1	3	1	3	2		3	2	2.0
○	M^2	△	P^2	P^1	C	○	I^1	I^1	I^2	C	P^1	○	M^1	M^2	M^3
/	/	/	/	/	/	/	/	/					×	M_2	M_3
														2	1

（0: 正常 /1: 初期の歯周炎 /2: 中等度の歯周炎 /3: 重度の歯周炎空白は歯牙の喪失部位）

上顎の左犬歯から第3大臼歯の範囲に歯槽骨吸収が認められ、歯周炎が起きていたと考えられる。左第2小臼歯が喪失しているが、歯槽窩は治癒過程にあることや周囲の歯周炎による歯槽骨吸収を考慮すると歯周炎により生前喪失したと考えられる。喪失している第2小臼歯の隣在歯である第1小臼歯と第1大臼歯が第2小臼歯相当部にかけて倒れ込んでいないこと、治癒過程にある歯槽窩を考慮すると、第1小臼歯を喪失してから亡くなるまでに数ヶ月程しか経過していないと推定できる。

上顎左右の第2―3大臼歯の頬側、口蓋側の歯槽骨には骨増生が認められる。

上顎の右第1小臼歯は頬側咬頭の頬側がかなり咬耗しており、対咬歯牙との接触により生じた咬耗だと考えられる。

③3号人骨

【保存状態】

人骨の保存状態は良好ではない。頭蓋は後頭骨の左後頭顆付近のみ遺存している。

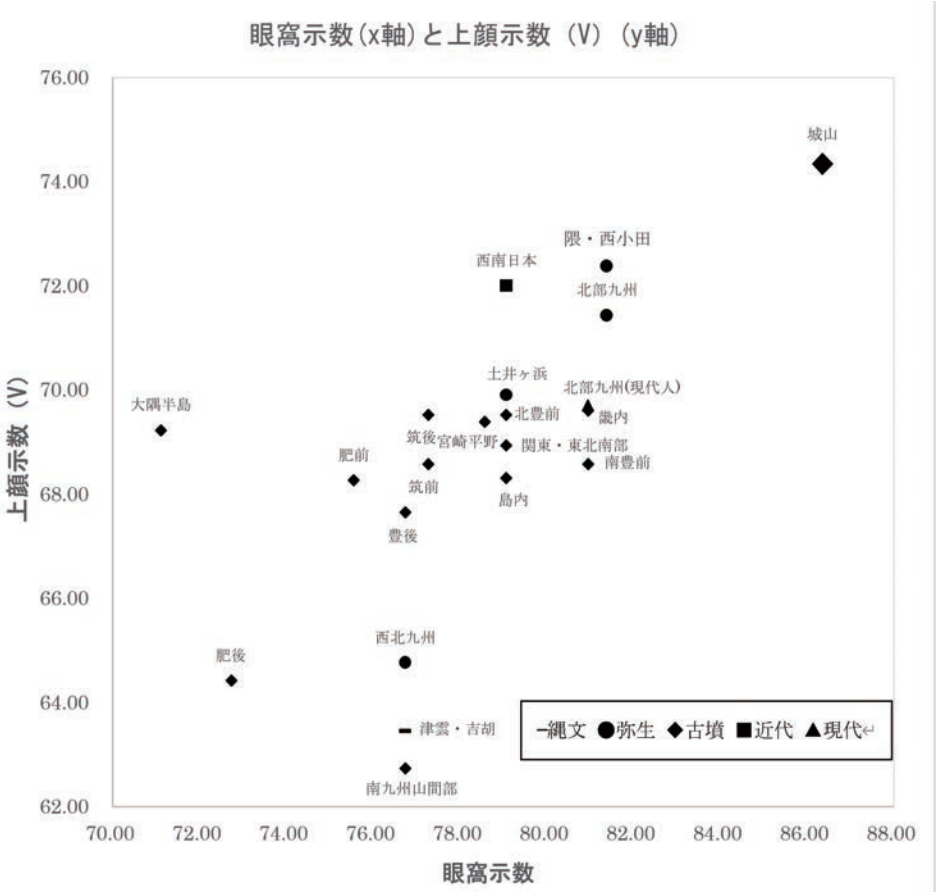
【年 齢・性別】

年齢は、蝶後頭軟骨結合は完全には癒合していないことから、若年と考えられる。

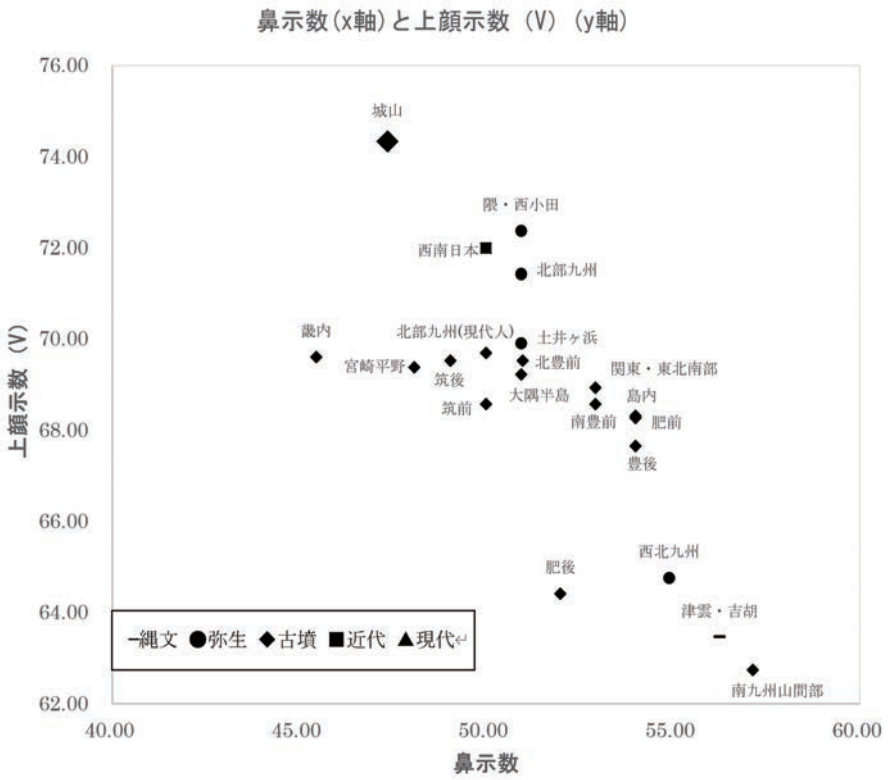
（4）考察

形質的特徴

先述のとおり、城山横穴群 Y73 号墓から出土した人骨3体のうち計測可能であったのは2号人骨の



第 40 図　眼窩示数と上顔示数（Ｖ）の関係（男性）



第 41 図　鼻示数と上顔示数（Ｖ）の関係（男性）

みであった。本来形質的特徴の比較分析は、集団を代表させうるに足る個体数を用いた平均値によって行うべきである。しかし、当該地域の資料は少なく、その形質的特徴を明らかにするために、この1個体を現時点でどのように位置づけることができるかを検討する意味はあると考える。したがって、以下本遺跡出土人骨と比較群の平均値との比較を行っていく。

まず、城山2号人骨の特徴として、頭蓋の最大長・最大幅・Ba-Br 高・中顔幅が全比較集団よりきわめて大きく、脳頭蓋のサイズそのものが大きい。頭長幅示数は比較集団よりも小さく、長頭傾向である。眼窩高の値をみるといわゆる渡来的形質を強く示す北部九州の弥生時代各地域集団よりも高い値を示し、高眼窩傾向を示す。鼻高と鼻幅も比較集団の中で大きい値をとることがわかる。鼻示数は鼻高の値が大きいため北部九州の弥生時代各集団よりも低い値を示し、狭鼻傾向である。

九州東部の古墳時代人骨の形質は北豊前では高顔・高眼窩であり、南下するにつれ低顔・低眼窩、広顔傾向が強くなるという地理勾配の中に位置づけられると指摘されている（Doi and Tanaka 1987）。第 40 図では横軸で大きい値を示すほど高い眼窩を示し、縦軸で大きい値を示すほど、ウィルヒョウ上顔示数が高いことを示す。第 41 図では横軸で大きい値を示すほど鼻幅が鼻高に比して大きく、鼻腔が狭いことを示し、縦軸で大きい値を示すほど、ウィルヒョウ上顔示数が高いことを示す。上顔、眼窩、鼻の高さの関係を示す第 40 図と第 41 図では、これまで指摘されたように（永井 1985, Doi and Tanaka1987）、筑前・筑後・北豊前が高顔・高眼窩・狭鼻という形質を示し、北部九州・土井ヶ浜・隈西小田の各弥生時代集団が示すいわゆる渡来的な形質に近い傾向をもち、豊後・肥後が低顔・低眼窩・広鼻といった「在来的」な形質を有することが示されている。その中で、城山は、1 個体の値であり、頭蓋全体のサイズが大きいため第 40 図と第 41 図において極端な位置にプロットされるが、概して高顔・高眼窩、狭鼻であり、いわゆる渡来的形質に類する形質を有することがわかる。

（5）おわりに

城山遺跡の横穴群 Y73 号墓から計3体の人骨が出土した。1号人骨は熟年の女性、2号人骨は老年の男性、3号人骨は若年で性別は不明であり、頭蓋骨の詳細な検討を行うことができたのは2号人骨のみであった。人骨の形質的特徴としては頭蓋全体のサイズが大きく、高顔・高眼窩・狭鼻傾向を示す。北豊前地域は概して高顔・高眼窩を示し、いわゆる渡来的形質が強く、弥生時代の北部九州の人々の形質に類似することが指摘されており（Doi and Tanaka 1987; 田中 2006）、本分析の結果、城山2号人骨も高顔・高眼窩・狭鼻という同様の傾向を示すことが明らかとなった。また、歯周炎やう蝕により生前に歯を喪失していたと考えられる。

末筆ながら、人骨調査の機会を与えていただいた福智町教育委員会諸氏に感謝申し上げたい。

参考文献

馬場悠男（1991）人体計測法 Ⅱ人骨計測法．人類学講座別巻 1，雄山閣出版．
Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. eds. (1994) Standards for data collection from human skeletal remains. Arkansas Archaeological Survey Research Series, no. 44. Arkansas Archaeological Survey, Fayetteville, Arkansas.
Doi N. and Tanaka Y. (1987) A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. Anthropological Science, 95:325-343

埴原和郎（1981）現代日本人頭骨の地理的変異に関する総合調査報告　現代日本人頭骨研究班編　文科省科学研究費補助金（総合研究 A　課題番号 43048）
池田次郎（1985b）シンポジウム : 国家成立前後の日本人 - 古墳時代人骨を中心にして一 : 総合比較とまとめ . 季刊人類学 , 16-3:82-95
金高勘次（1928）吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究 . 人類学雑誌 , 43
原田忠昭（1954）現代西南日本人頭骨の人類学的研究 . 人類学研究 , 1
清野謙次・宮本博人（1926）津雲貝塚人人骨の人類学的研究 . 第 2 部 頭蓋骨の研究 , 人類学雑誌 , 41
Lovejoy, C. Owen,R. S.Meindl,R.Mensforth,andT.J.Barton（1985）Multifactorial determination of Skeletal age at Death.American Journal of Physical Anthropology 68:1-14
松下孝幸（1990）南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究 . 長崎医学会雑誌 , 65:781-804.
Martin-Saller（1957）Lehrbuch der Anthropologie.Bd.I.Gustav Fischer Verlag.Stuttgart
内藤芳篤（1971）西北九州出土の弥生時代人骨 . 人類学雑誌 ,79
中橋孝博（1993）附編Ⅰ　福岡県筑紫野市, 隈･西小田地区遺跡群出土の弥生時代人骨　筑紫野市教育委員会編、隈･西小田地区遺跡群―隈･西小田地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 . 筑紫野市教育委員会、筑紫野市、pp.1 － 47.
中橋孝博・永井昌文（1989）弥生人の形質、男女差、寿命　弥生文化の研究 1. 雄山閣出版
永井昌文（1985）Ⅲ . 北部九州・山口地方 . 池田次郎編 , シンポジウム : 国家成立前後の日本人 - 古墳時代人骨を中心にして一 , 季刊人類学 ,16-3:47-57.
Lavigne, S.E. and Molto, J.E.（1995）System of measurement of the severity of periodontal disease in past populations. Int. J. Osteoarchaeol., 5: 265-273.
Ramfjord, S.P.（1967), The Periodontal Disease Index（PDI). The Journal of Periodontology, 38: 602-610.
Saso A. and Kondo O.（2019）Periodontal disease in the Neolithic Jomon:inter-site comparisons of inland and coastal areas in central Honshu, Japan. Anthropological Science, 127:13-25
竹中正巳・柄本優子・下野真理子（2010）宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨―100 号墓～ 112 号墓、116 号墓、125 号墓～ 127 号墓から出土した人骨―　島内地下式横穴墓群Ⅱ　えびの市埋蔵文化財調査報告書第 49 集 pp.121-207 えびの市教育委員会
田中良之（2006）一 豊前の弥生人・古墳人 .　行橋市史編纂委員会編、行橋市史　資料編　原始・古代 :817-830
栃原博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究 . 熊本医学会雑誌 , 31:607-656.

第１表 頭蓋計測値（男性）

		城山Y73号横穴墓	筑前[1]		筑後[1]		豊前[1]		豊後[1]		肥前[1]		肥後[1]		島内[2]		南九州 山間部[2]		宮崎平野[2]		大隅半島[3]		山陽[4]	
		(古墳)	(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(古墳)	
		2号人骨	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	202	21	183.0	8	181.4	30	180.6	22	181.8	5	184.6	6	179.8	20	181.8	15	181.1	4	176.8	4	186.3	44	180.8
8	頭蓋最大幅	148	23	141.3	9	144.1	35	140.7	24	138.6	4	139.5	6	143.2	22	143.9	24	141.3	5	142.0	5	148.4	46	141.6
17	Ba-Br高	148	17	135.7	7	135.9	23	134.9	23	135.0	6	132.3	7	135.3	27	137.4	22	135.8	5	136.2	4	134.5	35	134.0
8/1	頭長幅示数	73.3	18	77.5	7	78.1	30	77.5	20	76.3	3	75.7	4	78.8	13	78.4	9	77.2	4	80.9	2	79.2	39	78.8
17/1	頭長高示数	73.3	15	73.8	6	74.6	20	74.4	20	73.7	5	72.0	5	76.6	17	75.8	12	75.0	4	76.5	2	72.6	31	74.2
17/8	頭幅高示数	100	16	95.4	7	96.6	23	96.3	20	97.6	4	95.1	5	94.7	20	96.2	14	96.1	4	94.6	3	89.2	34	94.5
45	頬骨弓幅	-	19	139.7	6	139.2	19	137.4	17	138.6	6	138.7	5	141.4	10	139.8	10	139.8	1	138.0	4	144.0	32	136.6
46	中顔幅	113	23	105.3	8	105.0	29	103.9	31	100.9	9	104.0	8	103.6	20	101.1	19	101.9	1	98.0	4	104.0	44	102.1
47	顔高	-	12	121.2	6	119.5	12	121.8	19	117.9	5	119.2	7	113.9	24	116.8	22	114.2	2	120.5	5	121.8	27	115.8
48	上顔高	84	22	71.9	8	73.1	28	71.0	31	68.8	6	71.0	6	66.5	28	69.3	29	64.0	5	68.0	7	71.7	49	68.8
47/45	顔示数（K）	-	10	85.2	5	84.9	9	90.1	12	83.7	3	85.5	4	82.1	5	86.9	8	81.3	1	89.1	3	84.1	21	84.9
47/46	顔示数（V）	-	11	113.9	6	114.8	12	116.2	18	115.4	5	115.3	6	111.2	14	116.5	15	112.0	1	125.5	3	115.7	26	112.8
48/45	上顔示数（K）	-	17	51.1	6	51.9	18	49.5	17	49.1	5	52.2	4	47.5	6	51.2	8	45.3	1	47.8	4	49.7	29	50.7
48/46	上顔示数（V）	74	21	68.3	8	69.8	29	63.7	30	68.2	5	69.4	6	64.3	17	69.1	15	62.6	1	67.4	4	68.7	41	67.5
51(L)	眼窩幅	44	24	43.7	9	43.9	30	42.6	33	42.8	7	44.7	7	43.6	27	42.5	25	43.0	4	42.0	4	44.5	46	43.0
52(L)	眼窩高	38	25	34.0	9	34.3	31	33.8	32	33.3	7	33.9	6	32.2	26	33.7	33	32.6	4	33.3	4	32.0	43	34.1
52/51(L)	眼窩示数	86	24	77.9	9	78.3	30	79.3	32	77.8	7	75.9	6	73.1	21	79.2	25	76.4	2	77.3	4	72.0	43	79.4
54	鼻幅	27	22	26.5	9	26.3	28	26.4	31	26.1	9	26.9	6	26.3	28	27.3	34	27.5	5	25.4	7	26.9	53	26.4
55	鼻高	57	22	51.7	9	52.7	29	50.6	32	50.1	10	50.2	8	49.8	30	49.8	36	49.4	6	52.0	7	53.0	53	51.8
54/55	鼻示数	43.7	22	51.3	9	50.1	28	52.2	30	52.6	9	54.2	6	52.6	22	55.0	32	55.7	5	49.6	7	50.8	50	51.2
72	全側面角	79	13	83.9	6	83.5	19	85.4	6	85.3	4	83.3	5	81.2	-	-	-	-	-	-	-	-	37	82.6
74	歯槽側面角	78.0	11.0	71.9	6.0	69.7	###	70.9	13.0	68.1	4.0	67.8	5.0	71.6	-	-	-	-	-	-	-	-	32.0	66.3

		四国[4]		畿内[4]		関東・東北南部[4]		隈・西小田[5]		北部九州[6]		土井ヶ浜[6]		西北九州[7]		津雲・吉胡[8]		西南日本[9]		北部九州[10]	
		(古墳)		(古墳)		(古墳)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(弥生)		(縄文)		(近代)		(現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	17	180.6	10	178.7	33	182.7	56	183.0	118	183.7	52	182.8	21	182.8	26	184.2	108	181.4	95	180.0
8	頭蓋最大幅	21	139.4	7	142.0	23	142.4	49	142.2	117	142.4	54	142.6	20	144.9	25	144.9	108	139.3	95	138.9
17	Ba-Br高	12	134.4	8	135.3	22	137.0	46	138.0	101	137.7	43	134.7	15	134.6	17	135.5	108	139.3	95	137.8
8/1	頭長幅示数	14	76.6	6	80.3	19	78.4	47	77.6	104	77.7	48	78.1	20	79.2	25	78.7	108	76.6	95	77.2
17/1	頭長高示数	9	74.2	7	76.3	21	75.4	43	75.2	91	75.3	42	73.7	15	74.2	17	73.3	108	76.9	95	76.6
17/8	頭幅高示数	10	93.9	7	94.7	16	96.1	38	97.2	91	97.0	43	94.3	14	93.1	17	93.6	108	100.1	95	99.2
45	頬骨弓幅	16	135.6	2	135.0	14	141.4	38	141.2	103	140.0	27	139.4	12	138.4	7	141.0	106	134.5	95	133.4
46	中顔幅	18	102.7	7	101.9	14	102.5	35	105.1	114	104.7	37	103.4	17	105.0	10	103.8	107	99.9	95	99.2
47	顔高	15	118.2	3	121.7	9	117.6	32	124.3	80	123.8	36	123.4	14	117.1	11	115.7	66	122.2	95	-
48	上顔高	17	70.1	6	70.8	18	70.8	48	75.5	114	74.8	35	72.4	17	68.1	12	66.3	92	71.8	94	68.9
47/45	顔示数（K）	10	86.6	-	-	17	85.4	25	88.3	71	88.4	24	88.5	12	84.6	7	80.4	64	91.4	95	-
47/46	顔示数（V）	8	115.7	3	124.5	16	114.8	25	119.3	74	118.4	34	119.3	14	111.8	9	110.4	65	122.2	94	-
48/45	上顔示数（K）	8	52.7	2	5.4	11	50.8	35	53.7	95	53.3	21	51.9	12	49.3	7	47.0	90	53.5	94	51.6
48/46	上顔示数（V）	10	69.3	5	70.6	11	69.3	33	72.6	105	71.5	31	70.0	17	64.8	10	63.1	91	71.8	94	69.5
51(L)	眼窩幅	13	42.8	5	42.4	25	43.0	39	43.0	89	43.2	38	42.7	15	43.1	9	43.2	108	43.0	95	42.3
52(L)	眼窩高	13	33.1	5	34.2	25	34.4	39	35.2	93	34.5	40	34.2	15	32.8	9	33.2	108	34.4	95	34.3
52/51(L)	眼窩示数	13	77.3	5	80.6	25	80.1	38	81.8	86	79.9	38	80.1	15	76.2	8	77.5	108	80.2	95	81.1
54	鼻幅	23	26.2	8	25.4	24	27.2	48	26.8	117	27.1	38	27.1	16	27.8	12	26.5	108	25.9	95	25.5
55	鼻高	21	51.6	7	54.7	23	51.2	50	53.1	116	52.8	39	53.1	16	51.0	12	48.1	108	52.2	95	52.3
54/55	鼻示数	21	50.9	7	46.5	22	53.4	47	50.6	113	51.4	37	51.0	16	54.4	11	54.7	108	49.8	95	48.8
72	全側面角	-	-	-	-	-	-	31	84.0	85	84.5	34	83.6	15	82.0	7	81.5	92	83.8	-	-
74	歯槽側面角	14.0	69.9	4.0	72.5	15	64.4	29	72.3	83	69.8	35	71	-	-	6	70.1	107	70.7	-	-

Ⅳ おわりに

（1）旧宅地の調査

前回の調査時点において丘陵西側の宅地部分では、既設の住宅があり遺構や旧地形の残存状況は確認できていなかった。城山横穴群の主要な活用部分となる部分でもあり、公有地化と住宅の移転が完了した部分から順次トレンチによる確認調査を行った。

合計 5 本のトレンチを掘削し、遺構の残存状況の確認、旧地形の復元を試みた。結果、遺構の残存は確認できず、宅地部分は一部丘陵を削平しながら造成されたことが判明した。なお、丘陵の西側は低湿地状となる様子が推定され、中元寺川の流路が現在より東側を流れていたとも考えられる。

（2）丘陵斜面の調査

当初丘陵斜面においてもトレンチを主体とした遺構の残存状況の調査を行うこととして、平成 27 年度と 28 年度は宅地トレンチと並行して、斜面に足場を組み斜面のトレンチ調査を行った。

実際にトレンチ調査で丘陵斜面の表土を除去した結果、1m 以上の表土の堆積が認められた。トレンチの数箇所で墓道と推定されるテラスや墓道状の堆積を確認した。しかしながら、このような状態では遺構の分布状況の把握は部分的にしか行えないと判断し、平成 30 年度からは今後の保存整備工事を見据え範囲を限定し、斜面上の表土を重機を用いて除去することとした。

指定前の調査では、表土上の痕跡により横穴墓を確認していった。今回の調査成果より、表土上の横穴墓の痕跡は、地山上に残る痕跡とは標高差で 1m 以上のずれが生じ横穴墓の特定は困難であった。また、前回の調査時点で横穴墓と判断した地点において横穴墓が検出できないこともあった。反対に表土を丹念に除去した結果、新たな横穴墓の発見もあった。

今回の調査では丘陵斜面の調査範囲では 31 基の横穴墓を確認し、うち 2 基は新規発見であった。現在確認している横穴墓の基数は、あくまでも現状のもので今後の調査等で増減する可能性がある。

（3）出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、横穴墓に付随する須恵器、土師器、鉄器、装身具、そして表土層中より多量に出土する陶磁器、瓦器、石器、石製品などである。時期的には大きく二つに分かれる。表土層より多量に出土する古代以後の遺物と横穴墓周辺で出土する城山横穴群に付随する古墳時代の遺物である。古墳時代の遺物は横穴墓周辺の地山に近い部分でしか出土していない。

古墳時代の遺物

主に須恵器で、時期的には 6 世紀の後半から末を中心とする。今回の調査範囲で出土する古墳時代の遺物はほぼこの時期に集中する。一部 7 世紀の後半の遺物も見られるがわずか数点である。今回調査した横穴墓はほぼこの時期に築造、または使用されたと考えられ、ほとんどの遺物が 6 世紀の第三四半期頃に比定される。前回の調査報告書では、6 世紀末頃から築造のピークを迎えると推定したことを裏付ける調査成果となった。

前回の調査で、墳丘 9 に樹立されたと考えられる埴輪片が墳丘東側で出土していた。今回の調査でも埴輪片がパンコンテナ約 1 箱分出土しており、ほとんどの資料が形態的にみて前回調査の遺物と同種のものと考えられる。墳丘 9 に樹立されたと考えられる埴輪が墳丘の東西に広がり転落していること

が確認できた。

特徴的な遺物として切子玉、須恵器の器台、馬具などがある。切子玉はY73出土であり、九州大学で人骨を分析中に2号人骨の頭蓋より採取されたものである。頭蓋付近に副葬されていたものが流入土により移動し、頭蓋の中に入ったのであろう。城山横穴群では現在まで玉類の副葬は確認されていない。切子玉であるが、福岡県下での水晶製の切子玉は168箇所、398点が古代歴史文化協議会により集成されている。福岡県下で玉類は4,459か所、98,276点が集成されていることから見ると切子玉はか所では3%、点数では0.1%の割合である。出土か所、玉類に占める割合からも希少な例といえる。

須恵器の器台であるが、周辺での出土例は少ないものの、みやこ町橘塚古墳や飯塚市の井手ヶ浦窯跡等で出土例がある。前者は地域首長墓、後者は生産遺跡と性格に違いがあるが、両遺跡とも6世紀後半頃の時期が考えられており、この時期が器台の下限であると考えられる。城山横穴群の器台は坏部のつくりなどに差異があるものの、脚部の透かし孔等には類似も見られ時期的には近いと考えられる。

Y73で出土した人骨であるが、これまで周辺地域での人骨の出土例は少いとされ、残存状態の良い人骨資料が確認できた意味は大きい。

今回の報告では以前採集された遺物を掲載することができた。大刀と鉄刀である。採集された方より「刀が二本でた。九州歴史資料館に持って行った。」との話を伺っていた。前回の調査後その遺物が方城町城山古墳とラベルが貼られ九州歴史資料館に保管されていることがわかり、資料を確認し福智町へ引き取り今回報告を行った。前回の調査でも大刀の一部が出土しており、城山横穴群では大刀、鉄刀、鉄鏃、馬具、器台など群集墳研究において階層差を示す資料が確認されている。

古代以後の遺物

今回の調査では表土の除去を行ったが、この表土層からは古墳時代以降の主に古代末から中世の遺物が多量に出土する。以前の調査でも墓道部の埋土などで出土している。これらの遺物はパンコンテナ30箱、総重量で185㎏と膨大な量である。この量は今回出土した古墳時代の遺物量より多い。調査の内容でもふれたが丘陵頂部には中世の城郭遺構が残り、それに由来する遺物と考えられた。

今回出土した遺物であるが、種類別に見ると土師器が最も多く、出土量の順に瓦器・須恵質、磁器、陶器である。磁器には輸入磁器で白磁碗が目立つ。ほかに同安窯系・龍泉窯系青磁等も出土している。土師器、瓦器が多くみられ、器種的には小皿、椀が多く、中には土師器の羽釜や須恵質の捏鉢、土師質の擂鉢等も見られる。明確な遺構については、未調査であり不明な点が多い。ただ生活にかかわる器種も多く、居館的な性格の遺構の存在が推定される。

丘陵頂部に中世の城郭遺構があるが、縄張り等から見て戦国期のものと考えられている。出土する遺物ととは時期差があり、最終的に残る中世城郭以前に別の遺構が存在した可能性もある。

（4）まとめ

今回の調査では、前回の調査では不十分であった地山上に残る横穴墓の痕跡を確認することができた。斜面の表土を除去し横穴墓の分布確認を行った結果、表土上の痕跡のみでは困難である横穴墓の残存状況の把握や墓道の残存状況の把握等より正確な成果を出すことができた。

また、群集墳内における階層差などを示すとされる鉄製武器や馬具の資料が増加したことは、他の

群集墳との比較も可能となる。横穴墓を群集墳の中心墓制として採用する遠賀川流域における群集墳のあり方を考えるうえでもこれらの資料は重要である。

表土層中より出土した 12 ～ 13 世紀を中心とする古墳時代以後の遺物であるが、丘陵の頂部は未調査であるため遺構等の性格は不明である。しかしながら、周辺地域でこれほどまとまって出土した事例は少なく貴重な資料である。今後同様な資料を出土する遺跡の調査等が進めば、城山横穴群に存在する当該期の遺構の性格も見えてくるであろう。

史跡の調査であり、保存のため必要最小限の調査しか行っておらず不明な点も多い。今回出土した資料の分析や 12 ～ 13 世紀を中心とする遺構の性格付けなどは周辺の調査を待って再検討したい。

平成 26 年の史跡指定後、本年度まで基礎資料の蓄積を目的として範囲・内容確認調査を行ってきた。その間保存整備においては、保存活用計画の策定、整備基本計画の策定、整備基本設計、保存整備工事を行ってきた。発掘調査、保存整備ともに本年度で終了する。平成 20 年の田川土木事務所（現田川県土整備事務所）との連絡会議で西金田地区急傾斜地崩壊対策事業が提示され 13 年が経過した。その間、開発行為に対する事前調査から保存目的への調査方針の転換、史跡指定、保存整備と歩んできた。

今後は史跡城山横穴群を後世に伝え、活用を図っていくことで地域の誇りとなるよう歩んでいきたい。

末筆ながら、これまで協力いただいた皆様に感謝いたします。あわせて、今後とも史跡城山横穴群を見守っていただきたいと思います。

表２ 確認遺構一覧表

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
１号墳	約 2.6	約 2.2		－	－	－	－	○	－	須恵器、鉄器、装身具	６世紀後半頃	羨道部埋没、墳丘 10 前回報告書遺構配置図中 Y122（1 号墳）

横穴墓　前回の報告書で Y122 とした遺構は 1 号墳と改め、Y122 を欠番とした。報告書作成中の混乱により、前回報告書の一覧表より漏れていた Y223 を Y225 と改め掲載し、今回新規確認の横穴墓を Y223、Y224 とした。

遺構名	規模					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y1	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y2	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y3	1.55	1.5	1.2+	0.40	1.18	ドーム	×	－	平面不整形	－	－	大半が埋没　西に開口
Y4	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y5	2.4	2.4	1.25+	0.80	0.82	ドーム	×	－	平面方形	－	－	大半が埋没、西に開口
Y6	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y7	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y8	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y9	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y10	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y11	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y12	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y13	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y14	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y15	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y16	1.53	1.5	0.85+	－	0.80	－	×	－	平面小型不整形	－	－	大半が埋没、西に開口
Y17	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y18	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y19	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y20	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y21	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y22	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y23	1.60	2.15	0.65+	0.60	0.80	ドーム	×	−	平面横長方形板石閉塞	−	−	大半が埋没、西に開口
Y24	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y25	−	−	−	−	−	−	×	−	塊石閉塞	須恵器・土師器	6 世紀中～後半頃	墓道を検出長 1.6 m以上、幅 0.8 m、深 1.2 m、西に開口
Y26	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y27	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y28	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y29	−	−	−	−	−	−	×	−	−	土師皿	−	埋没
Y30	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y31	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y32	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y33	1.80	1.96	−	1.20	1.14	−	×	−	平面方形	−	−	大半が埋没、西に開口
Y34	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y35	0.56	1.70	0.23+	0.96	1.32	−	×	−	袋状の小型横穴	−	−	大半が埋没、西に開口
Y36	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y37	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y38	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y39	−	−	−	−	−	−	×	−	−	−	−	埋没
Y40	1.83	1.89	0.65+	1.20	1.32	−	×	−	−	−	−	大半が埋没、西に開口
Y41	1.72	1.84	0.62+	0.65	1.17	家形	○	−	軒先線が巡る	須恵器・土師器・瓦器陶磁器	6 世紀末～7 世紀初頭頃	墓道を検出深さ 1.2 m、端部は一段下がり階段状になる。西に開口

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y42	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y43	–	–	–	–	–	–	×	–	–	須恵器	–	埋没
Y44	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y45	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y46	2.36	2.04	0.68	1.00	–	–	×	–	羨門部に横長の板石、平面逆台形	須恵器	–	大半が埋没、西に開口
Y47	1.40	1.02	0.50	1.55	0.95	–	×	–	–	須恵器、土師皿、瓦器	6 世紀後半～末頃	大半が埋没、西に開口
Y48	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y49	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y50	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y51	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y52	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y53	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y54	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y55	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y56	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y57	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y58	1.64	1.24	0.50	1.55	1.50	–	×	–	平面縦長方形	–	–	大半が埋没、西に開口
Y59	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y60	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y61	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y62	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y63	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y64	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y65	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y66	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y67	1.10	1.05	0.50	0.70	－	－	×	－	平面不整形	須恵器	－	大半が埋没
Y68	－	－	－	－	－	－	○	－	－	大刀・須恵器	－	埋没
Y69	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y70	－	－	－	－	－	－	×	－	－	須恵器	－	埋没
Y71	1.65	2.04	0.68	1.15	1.36	－	×	－	平面横長方形	－	－	大半が埋没、西に開口
Y72	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y73	－	－	－	－	－	－	×	－	平面横長方形	水晶製切子玉・須恵器	－	3体分の人骨出土
Y74	－	－	－	－	－	－	×	－	－	須恵器	－	埋没
Y75	1.72	1.58	0.80	0.73	1.20	ドーム	×	－	平面縦長方形	須恵器	－	大半が埋没、西に開口
Y76	2.44	2.32	1.04	－	0.97	ドーム	×	－	平面方形	－	－	大半が埋没、西に開口
Y77	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y78	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y79	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y80	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y81	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y82	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y83	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y84	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y85	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y86	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y87	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y88	2.32	2.53	–	0.80	–	–	○	–	平面方形	金銅装馬具・鉄鏃	6 世紀後半～	大半が埋没、西に開口
Y89	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y90	1.92	2.06	–	0.3	0.76	ドーム	×	–	平面方形 板石閉塞	–	–	大半が埋没、西に開口
Y91	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y92	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y93	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y94	2.26	2.39	0.93	1.17	–	ドーム	○	–	平面方形	–	–	大半が埋没、西に開口
Y95	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y96	–	–	–	–	–	–	○	–	–	–	–	埋没
Y97	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y98	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y99	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y100	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y101	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y102	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y103	0.94	1.41	–	–	–	–	×	–	平面袋状	–	–	埋没、東に開口
Y104	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y105	1.46	0.80	0.5	–	–	ドーム	×	–	平面不整形	須恵器	–	大半が埋没、東に開口
Y106	–	–	–	–	0.60	–	×	–	平面不整形	–	–	天井崩落
Y107	1.95	1.84	–	0.90	0.91	ドーム	×	–	平面方形	–	–	大半が埋没、南に開口
Y108	0.75	0.85	0.50	0.40	0.80	–	×	–	平面不整形	–	–	天井崩落
Y109	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	Y181Y109 とテラスは墓道非共有
Y110	–	–	–	–	–	–	×	–	–	須恵器、特殊器台	–	Y181Y109 とテラスは墓道非共有

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y111	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	
Y112	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y113	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y114	2.6	2.5	–	–	–	家形	–	–	–	–	–	入口不明
Y115	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y116	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y117	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y118	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y119	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y120	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y121	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y123	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y124	2.00	2.07	(1.10)	1.00	0.40	ドーム	×	○	平面方形 板石と塊石の閉塞	須恵器・土師器 陶磁器・石鍋	6 世紀前半～ 中頃	墓道幅 2.0 ～ 2.6、深 0.8 m、東に開口、 墳丘 5 主体部
Y125	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y126	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y127	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y128	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y129	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y130	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y131	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y132	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y133	2.11	3.15	0.75	1.27	1.43	ドーム	○	–	平面横長方形	須恵器	6 世紀後半	羨門外の石組までで 2.35 m 後世の改変が著しい
Y134	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y135	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y136	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y137	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y138	－	－	－	－	－	－	×	－	－	須恵器	－	墓道長 1.7 m ＋、幅 0.60 ～ 1.0 m、深 1.2 m、南東方向に開口
Y139	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	墓道長 1.75 m ＋、幅 0.4 ～ 0.6 m、深 1.00 m、南東に開口
Y140	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y141	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y142	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y143	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y144	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y145	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y146	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y147	－	－	－	－	－	－	○	－	－	須恵器	6 世紀末～7 世紀初頭	墓道長 1.85 m、幅 0.5 m、深 0.3 m 北側で横方向の墓道へ接続、南東に開口
Y148	－	－	－	－	－	－	○	－	－	鉄刀	－	大半が埋没、南方向に開口
Y149	－	－	－	－	－	－	×	－	－	須恵器・土師器	－	墓道幅 1.40 m、深 0.30 m端部は階段状、横方向の墓道へ接続、南東に開口、Y220 に隣接
Y150	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y151	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y152	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y153	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y154	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y155	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y156	2.12	2.36	－	0.79	0.91	ドーム	×	－	敷石、平面横長方形	鉄鏃	－	
Y157	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y158	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y159	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y160	–	–	–	–	–	–	○	–	板石閉塞	–	–	墓道長さ 1.6 m、幅 0.50 m、深 1.00 m、西に開口
Y161	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y162	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y163	–	–	–	–	–	–	○	–	–	–	–	埋没
Y164	1.43	1.84	0.80	1.05	1.29	ドーム	×	–	–	–	–	西に開口
Y165	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y166	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y167	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y168	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y169	–	–	–	–	–	–	○	–	–	–	–	埋没
Y170	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y171	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y172	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y173	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y174	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y175	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y176	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y177	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y178	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y179	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y180	–	–	–	–	–	–	○	–	–	–	–	墓道長さ 2.8+ m、幅 0.5 m、深 1.2 m、端部は階段状、横方向の墓道へ接続、西に開口

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y181	2.46	2.46	1.6	1.4	0.96	ドーム	×	○	平面方形	墳丘より埴輪	6 世紀後半以降	墓道幅 1.8 m、東に開口、墳丘 9 種体部
Y182	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y183	–	–	–	–	–	–	×	–	敷石	須恵器	6 世紀末～7 世紀後半	埋没
Y184	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y185	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y186	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y187	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y188	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y189	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y190	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y191	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y192	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y193	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y194	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y195	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y196	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y197	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y198	1.80	1.39	–	1.40	0.90	ドーム	×	–	–	–	–	前面はテラス状になり、左にY 199 が開口している。東に開口
Y199	1.77	1.48	–	1.60	0.75～1.10	ドーム	○	–	–	須恵器・土師器 –	–	前面はテラス状になり、右にY 198 が開口している。東に開口
Y200	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y201	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y202	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没
Y203	–	–	–	–	–	–	×	–	–	–	–	埋没

遺構名	規模（m）					天井部	羨門部石組	墳丘	その他の特徴	遺物	時期	備考
	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅							
Y204	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y205	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y206	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y207	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y208	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y209	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y210	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y211	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y212	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y213	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y214	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y215	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y216	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y217	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y218	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y219	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	墓道長 3.10 m、幅 1.00 ～ 1.50 m、深 0.5 m、端部は階段状、横方向の墓道へ接続、西に開口
Y220	－	－	－	－	－	－	×	－	－	須恵器	6 世紀末頃	墓道長 1.20 m、幅 1.30 ～ 1.60 m、深 0.5 m端部は階段状、横方向の墓道へ接続、南東に開口、Y149 に隣接
Y221	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y222	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没
Y223	－	－	－	－	－	－	○	－	－	－	－	今回調査で新規確認
Y224	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	今回調査で新規確認
Y225	－	－	－	－	－	－	×	－	－	－	－	埋没　前回報告書遺構配置置図中の Y223 一覧表に漏れていたため番号を振替掲載

※遺構番号及び数値は残存部及び確認時点でのものであり、追加調査等で変更されることがある。

図 版

1. 調査後の城山横穴群（南西より）

2. 整備中の城山横穴群（西より）

図版２

1.Y73
人骨出土状況

2. 宅地トレンチ１
（西から）

3. 宅地トレンチ１
土層状況
（南から）

1. 宅地トレンチ１
土層状況
（南から）

2. 宅地トレンチ２
（東から）

3. 宅地トレンチ２
土層状況
（南から）

図版４

1. 宅地トレンチ３
（東から）

2. 宅地トレンチ３
土層状況
（南から）

3. 宅地トレンチ４
（西から）

1. 宅地トレンチ 4
土層状況
（南から）

2. 宅地トレンチ 5
（東から）

3. 宅地トレンチ 5
土層状況 1
（北から）

図版 6

1. 宅地トレンチ 5
土層状況 2
（北から）

2. 丘陵斜面
トレンチ 1
サブトレンチ 1
（北から）

3. 丘陵斜面
トレンチ 1
サブトレンチ 1
土層状況（西から）

1. 丘陵斜面
トレンチ 1
サブトレンチ 2
（北から）

2. 丘陵斜面
トレンチ 1
サブトレンチ 2
土層状況（西から）

3. 丘陵斜面
トレンチ 2
サブトレンチ 1
土層状況（西から）

図版 8

1. 丘陵斜面
トレンチ 2
サブトレンチ 2
（西から）

2. 丘陵斜面
トレンチ 2
サブトレンチ 2
土層状況（西から）

3. 丘陵斜面
トレンチ 3
（西から）

1. 丘陵斜面
トレンチ 3
土層状況1(北から)

2. 丘陵斜面
トレンチ 3
土層状況 2（北から）

3. 丘陵斜面
トレンチ 4
サブトレンチ 1
（南から）

図版 10

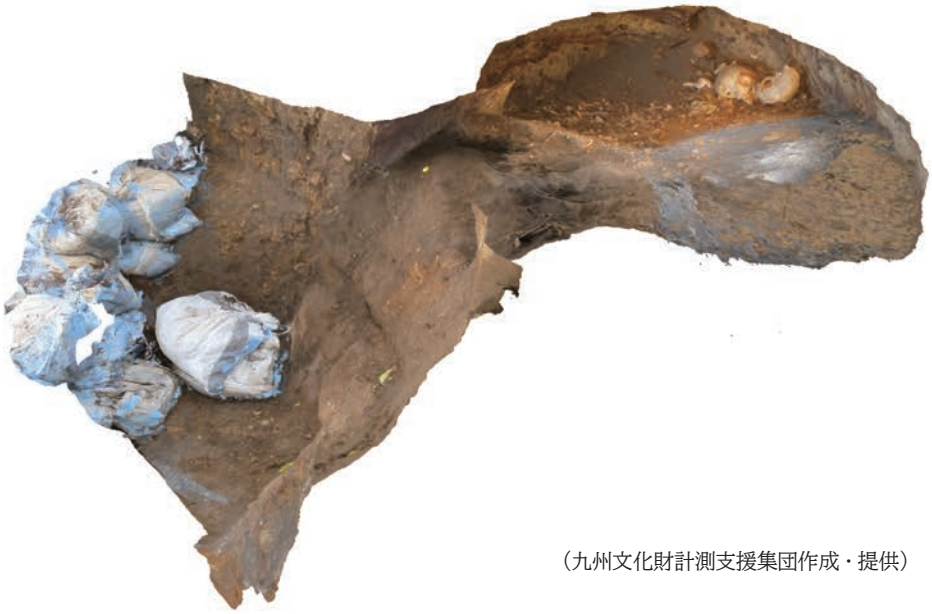
1. 丘陵斜面
トレンチ 2
サブトレンチ 1
土層状況（南から）

2. 丘陵斜面
トレンチ 4
サブトレンチ 2
土層状況1(西から)

3. 丘陵斜面
トレンチ 4
サブトレンチ 2
土層状況2(西から)

1.Y133
前回調査時
（北から）

2.Y133
赤色顔料の付着
状況（北から）



3.Y73
人骨出土状況
3D カット

（九州文化財計測支援集団作成・提供）

図版 12

1 号頭蓋骨 正面観

2 号頭蓋骨 正面観

1 号頭蓋骨 側面観

2 号頭蓋骨 側面観

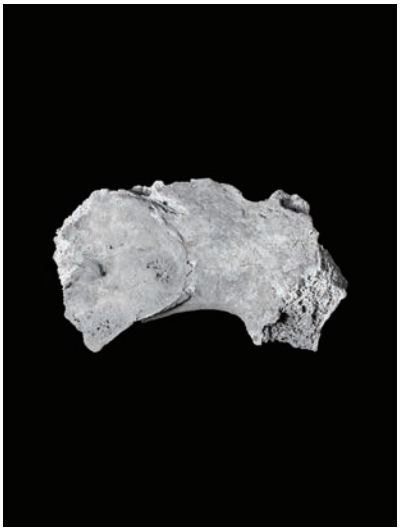
1 号頭蓋骨 上面観

2 号頭蓋骨 上面観

城山横穴群　Y73 号墓出土人骨 頭蓋骨

1号上肢骨

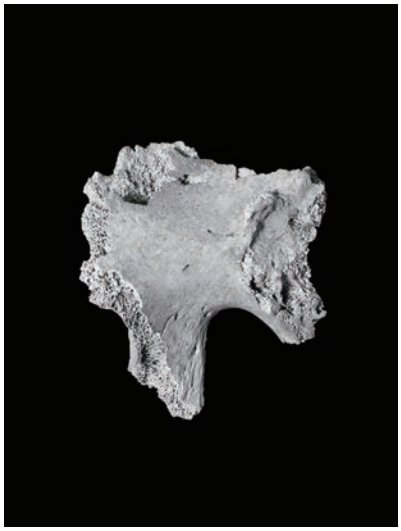
2 号左側下顎体



1 号左寛骨

2 号上腕骨

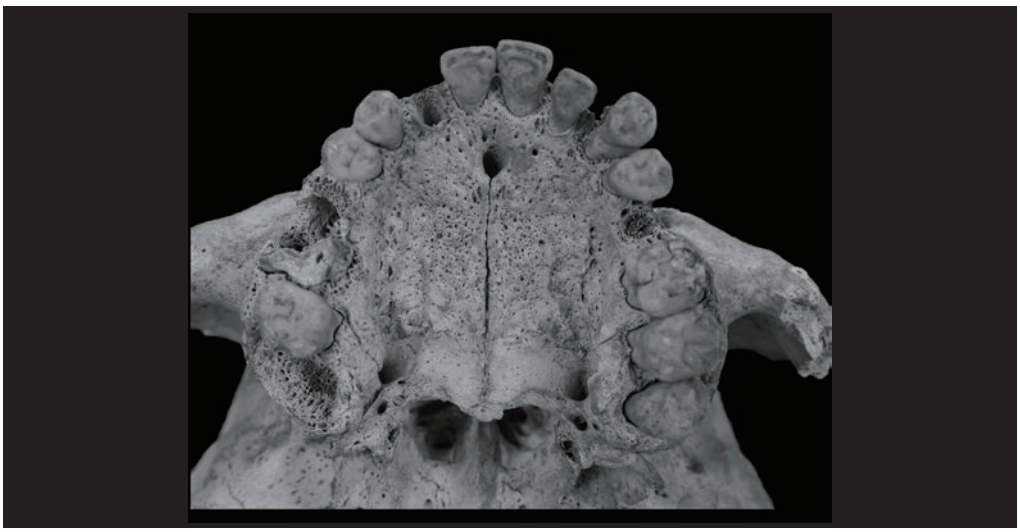
1 号寛骨左前耳状溝



2 号右寛骨

城山横穴群　Y73 号墓出土人骨 1 号・2 号人骨残存部位

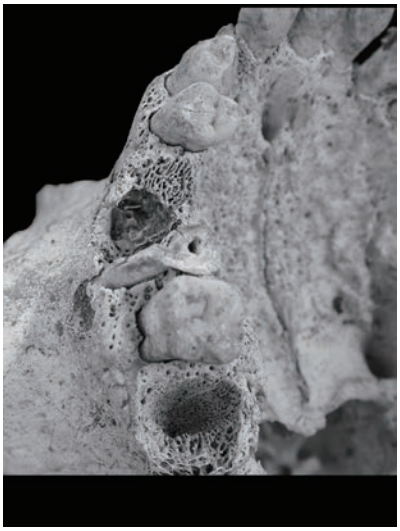
図版 14



2 号上顎骨　歯周病・齲歯

2 号右側側面歯槽

2 号左側面歯槽



2 号右側第 2 小臼歯歯槽

3 号左後頭顆付近

城山横穴群　Y73 号墓出土人骨 1 号・2 号・3 号人骨残存部位

出土遺物 1

出土遺物 2

37

43

50

38

44

51

39

45

52

40

46

53

41

47

54

42

48

55

出土遺物 3

56

62

68

57

63

69

58

64

70

59

65

71

60

66

72

61

67

73

74

80

86

75

81

87

76

83

88

77

84

89

78

90

85

79

91

出土遺物 5

出土遺物 6

出土遺物 7

19
25
31
20
26
32
21
27
33
22
28
34
23
29
35
24
30
36

37

42

47

38

43

48

39

44

49

39

45

50

40

45

51

41

46

52

53

59

65

54

60

66

55

61

67

56

62

68

57

63

69

58

30

70

71

77

83

72

78

84

73

79

85

74

80

86

75

81

87

76

82

88

図版 26

89

95

100

90

96

101

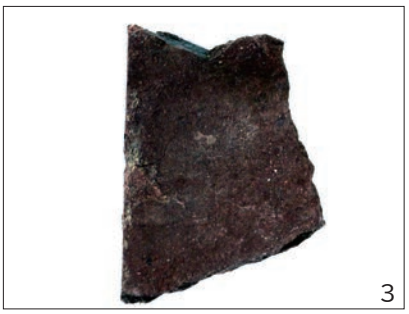
91

97

1 2

92

98


3

93

99

4

94

5 6

報　告　書　抄　録

ふりがな	じょうやまよこあなぐん
書名	城山横穴群
副書名	福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査
シリーズ名	福智町文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者名	福智町教育委員会
編集機関	福智町教育委員会
所在地	福岡県田川郡福智町赤池 970-2　TEL 0947-28-9111　FAX 0947-28-9112
発行年月日	2021 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘要因
		市町村	遺跡番号					
じょうやまよこあなぐん 城山横穴群	ふくおかけん 福岡県 たがわぐん 田川郡 ふくちまち 福智町 かなだ 金田 715-1 他	40610		33 ° 40 ′ 42″	130 ° 46 ′ 47″	20160201 ～ 20160331 20161101 ～ 20170331 20180120 ～ 20180330 20180716 ～ 20181130 20190529 ～ 20200331 20200727 ～ 20210331	約 2,000 ㎡	保存目的の範囲・内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山遺跡群	横穴墓	古墳時代 中世	横穴墓	須恵器、土師器、円筒埴輪、装身具、鉄器、輸入陶磁器、瓦器、石鍋、近世陶磁器	我が国有数の規模を誇る横穴墓群

要約	史跡指定後、保存整備工事を行う計画であり、家屋の移転前では調査条件が整わず調査が不十分であった宅地部分と北側丘陵西側斜面の調査を行った。 調査の結果、宅地部分は低湿地状を呈し周辺まで中元寺川の流路が迫っていたことが確認できた。 丘陵斜面の調査では表土厚が１m以上も堆積し地表面観察だけでは横穴墓の状態の確認は困難である。今回丘陵斜面の一部の表土を除去した結果、指定へ向けた調査で確認した横穴墓すべては確認できなかった。また、新規に確認した横穴墓もあった。

史跡　城山横穴群
福岡県田川郡福智町所在横穴群の発掘調査
福智町文化財調査報告書第５集
令和３年3月 31 日
発行　福智町教育委員会
〒822-1101　福岡県田川郡福智町赤池 970-2
印刷　イーサイトネットワーク
〒822-1102　福岡県田川郡福智町上野 411-1